

# 動詞の漢字表記についての史的研究

広島女学院大学大学院

言語文化研究科 日本語文化専攻

058103 于 泳

# 目 次

序章	1
第1章 漢字表記の史的研究の意義と先行研究	5
第1節 漢字の伝来と使用の歴史	5
1 はじめに	5
2 漢字の伝来	5
3 漢字の受容	7
4 漢字と日本語との結びつき	13
5 終わりに	14
第2節 漢字表記史における先行研究	18
1 はじめに	18
2 表記について	19
3 漢字表記に関する従来の研究	20
4 先行研究の問題点と本論の研究の方法・意義	30
第2章 『今昔物語集』における動詞の漢字表記の研究	36
第1節 『今昔物語集』の漢字表記と	
「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞	36
1 はじめに	36
2 『今昔物語集』と「常用漢字表」がともに	
1種の漢字で表記される動詞	38
3 『今昔物語集』と「常用漢字表」がともに	
2種以上の漢字で表記される動詞	42
4 終わりに	47

## 第2節 『今昔物語集』の漢字表記が

「常用漢字表」の漢字表記と一致しない動詞	49
1 はじめに	49
2 『今昔物語集』に存しているが	
「常用漢字表」に載っていない動詞	49
3 『今昔物語集』の漢字表記が	
「常用漢字表」の漢字表記と異なる動詞	57
4 終わりに	59

## 第3節 『今昔物語集』の漢字表記が

「常用漢字表」の漢字表記と一部一致する動詞	61
1 はじめに	61
2 『今昔物語集』使用数1位の漢字表記が	
「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞	62
3 『今昔物語集』使用数2位以下の漢字表記が	
「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞	68
4 『今昔物語集』で2種以上の漢字表記が	
「常用漢字表」で1種の漢字表記に統一される動詞	73
5 『今昔物語集』の漢字表記が「常用漢字表」	
の漢字表記と一部一致する動詞	81
6 終わりに	85

## 第3章 動詞の漢字表記についての個別的研究 87

### 第1節 「アワツ」の漢字表記についての史的研究 87

1 はじめに	87
2 古辞書における「アワツ」の漢字表記	87

3	上代・中古における「アワツ」の漢字表記	88
4	中世における「アワツ」の漢字表記	89
5	近世における「アワツ」の漢字表記	92
6	近代における「アワツ」の漢字表記	96
7	終わりに	98
第2節 サ変動詞「ス」の漢字表記「仕・為」についての史的研究		
	—サ変動詞の漢字表記「仕」の成立過程を中心に—	101
1	はじめに	101
2	辞書におけるサ変動詞連用形の漢字表記	101
3	中世までの作品における「為・仕」	103
4	中世におけるサ変動詞の漢字表記	104
5	終わりに	114
第3節 「ハイル」の表記と意味の変遷について		
1	はじめに	117
2	上代・中古における「ハイル」の表記と意味	117
3	中世における「ハイル」の表記と意味	119
4	近世における「ハイル」の表記と意味	121
5	近代以後における「ハイル」の表記と意味	123
6	終わりに	128
終章		131
参考文献		136

## 序章

本論は 3 章 8 節からからなっており、漢字の伝来・漢字表記についての先行研究から『今昔物語集』における動詞の漢字表記と、「常用漢字表」の動詞の漢字表記との比較、動詞についての個別研究まで、史的の変遷の視点から検討する。

動詞の漢字表記についての研究は、昭和 30 年以後に本格的に行われ始めたといつてよく、他の分野の研究より遅れている状態である。特に、品詞別による表記の史的変遷の視点から、動詞の漢字表記についての研究は、昭和 30 年以前はほとんどなかった。本論では、古代で使っている動詞と、現代で使っている動詞の漢字表記の違いを明らかにし、動詞の漢字表記の変遷の過程を捉え、更に、表記の変遷の要因についても考察していきたい。

第 1 章では、漢字の伝来・日本語との結びつきについて、史書・記録だけでなく、考古学の視点を入れて、漢字の伝来について検討する一方、他の分野の研究に遅れている表記、特に漢字表記ということについても検討する。

第 1 節では、現在の日本語の表記には、漢字もあれば、仮名もある。それに句読点などの符号もあるが、昔の日本では、『古語拾遺』に「上古之世 未有文字 貴賤老少 口口相傳 前言往行 存而不忘」とあるように、文字はなかった。それでは、日本では、いつから文字があったのか、どこから来たのか、日本語にどんな影響をもたらしたかについて、史書・記録などを検討する必要があるが、史書・記録を成立させるまでの段階の文物の検討も必要となっている。従って、主に出土品に書かれた文字を検討し、その成立年代から漢字の伝来、漢字の使用などを検討する。

第 2 節では、日本語の一連の政策、即ち「漢字制限」「当用漢字」などの動きをきっかけで、人の関心を集め、一般化されてきた表記について、検討したうえで、漢字表記に関する先行研究を検討する。そこで、先行研究の検討を通して、今までに研究していない動詞の漢字表記についての史的研究の意義、方法について、具体的に検討する。

第 2 章では、古代における漢字表記と現代の漢字表記とどう違うかということを、『今昔物語集』（注 1）1 作品に絞って分析し概観する。『今昔物語集』は古代社会の各層の生活を描く日本最大の古代説話であるし、膨大な語彙が存しており、院政期の国語のもっとも有力な資料とされるので、『今昔物語集』を資料とし、その中の動詞の漢字表記について、

詳しく調査していきたい。また、時代も、『今昔物語集』が書かれた時代は、平安時代の貴族を中心とする時代から、武士の時代へと移行していく変化の大きい時代である。表記も、ひらがな書き中心の和文から、漢文の影響を受け、現代の表記につながり、和漢混淆文が生まれた時代である。『今昔物語集』と現代の表記を比較することは、単に時代を離れた 2 作品の比較だけではなく、現代表記成立の過程を探る有効な手段であると考ええる。

第 1 節では、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」(注 2)の漢字表記と一致する動詞は、『色葉字類抄』(注 3)でどのように掲載されているか、当時の常用漢字であるかどうか、『今昔物語集』に用いられている漢字は、どれほど当時の常用漢字が使用されているかについて、詳しく検討する。

第 2 節では、『今昔物語集』に存しているが現在で使用されなくなる動詞と、現在でも使用されているが「常用漢字表」に載っていない動詞は、『色葉字類抄』でどのように掲載されているか、当時の常用漢字であるかどうかについて検討する。また、『今昔物語集』に挙げられているが、「常用漢字表」で異なる漢字で表記されている動詞が存している。それらの動詞は、『色葉字類抄』でどのように掲載されているか、当時の常用漢字がどれほど使用されているかについても検討する。

第 3 節では、『今昔物語集』には、2 種類以上の漢字で表記される動詞が、多く存している。それらの動詞には、使用数が 1 位の漢字表記が現在に残っている動詞と、使用数が 2 位以後の漢字表記が現在に残っている動詞、2 種以上の漢字表記がともに多く使用されているがその中の 1 種の漢字表記が、「常用漢字表」の動詞の漢字表記と一致する動詞など、様々である。これらの動詞の漢字表記は、『色葉字類抄』でどのように掲載されているのか、特徴は何であるかについて、詳しく検討する。また、院政期の多漢字表記の動詞の中で、現在に残っている動詞の漢字表記はどんな特徴があるかについても触れたい。

第 3 章では、「アワツ」(注 4)の漢字表記・サ変動詞「ス」の漢字表記・「ハイル」の漢字表記の成立と意味の変遷について、個別に詳しく史的研究をしたい。これらの動詞は、いずれも、『今昔物語集』での漢字表記と現代の表記とが異なる。その変遷の過程について、個別に検討しながら、変化の時期や変化の要因について明らかにしたい。

第 1 節では、「アワツ」は、古語で、現在の学校教育では「慌」と表記される。「常用漢

字表」においても「アワツ」の項に「慌」の字だけが収められているが、『今昔物語集』では「アワツ」が「遽・澆・急・周・周章」の5種の漢字に当てられているが、「慌」の表記がなかった。「慌」は「アワツ」の漢字表記として、いつからどのような資料で使われ始めたのか。時代によって、「アワツ」はどのように表記されているのか。どんな理由で「慌」が使用され始めたのか。表記によって意味が違ふのだろうか、などについて明らかにしたい。先行研究を調べたところ、「アハツ」についての研究はまだ触れていないようである。従って、古代から現代までの大量の辞書・作品を中心に、詳しく調査していきたい。

第2節では、現代でよく使用されている語「ス」、特に「ス」の連用形「シ」、連用形からなる複合語「シ〜」などの漢字表記について詳しく検討したい。サ変動詞「ス」は、日本語の基礎語であって、『広辞苑』においても、「仕上げ」「仕事」のように、多くの「仕〜」の語が記されている。時代を遡ると、『今昔物語集』で、サ変動詞「ス」、連用形「シ」は「為」で表記されるが、連用形については、「仕」が表記されたかどうか疑問が残る。

ここでは、サ変動詞「ス」連用形の「シ」、複合語「シ〜」が漢字「仕」と表記され始めたのは、いつからどのような資料で使われたのか、サ変動詞の表記を問題として考察する。

第3節では、「ハイル」は、「常用漢字表」で「入」と表記され、日常会話だけでなく、文学作品などにもよく用いられる語である。しかし、『今昔物語集』では、「ハイル」の語はなく、「ハヒイル」（這入）はあった。時代が下がるが、川端康成の『伊豆の踊子』（大正15）（注5）には、「二度も三度も湯には入つてみたりしてゐた」と「湯に入つて」の2種の表記があり、「は入る」という特別の表記が使用されている。この「は入る」という特別な表記はいつからどんな資料で使用されていたのか、特別な意味があるのか。「入」が「ハイル」の漢字表記として、いつからどんな資料で使われ始めたのかなどについて、古代から現代までの文学作品を資料にして、詳しく調査していきたい。

以上のように、『今昔物語集』と「常用漢字表」の動詞の漢字表記を比較し、表記の変遷を大きく捉え、更に、個別の動詞の表記の細から検討を通して、動詞の漢字表記の変化の要因、変化の実態が明らかにしたい。

## 【注】

- 1 山田孝雄編『今昔物語集』（日本古典文学大系 22～26）（1959～1963、岩波書店）による。
- 2 国語研究会監修『現代国語表記の基準』（第6次改訂版）（2001、ぎょうせい）による。
- 3 中田祝夫・峯岸明共編『色葉字類抄研究並びに索引』（1964、風間書房）による。
- 4 古文の「アワツ」と現代の「アワテル」ともに、「アワツ」と表記する。本論のサ変動詞「ス」も同じである。
- 5 川端康成『伊豆の踊子』（新選 名著復刻全集 近代文学館）（1927、金星堂）による。



## 第 1 章 漢字表記の史的研究の意義と先行研究

### 第 1 節 漢字の伝来と使用の歴史

#### 1 はじめに

現在の日本語の文章は漢字交じり平仮名文で、その中に片仮名や数字、符号を交えて書くのが、基本的なスタイルである。この特殊なスタイルの中で、もともと中国で発達した漢字は、平仮名・片仮名とともに日本語の文字歴史において重要な地位を占めている。

日本の文字について、近世の国語学者の平田篤胤、鶴峯戊申、落合直澄らが神代文字という説を提唱したが、早く平安時代初期の斎部広成は、『古語拾遺』(808)の序において「上古之世 未有文字 貴賤老少 口口相傳 前言往行 存而不忘」と記しているので、以前の日本には文字がなかったことを示している。神代文字存在説を反対し批判したのは国語学者の本居宣長、伴信友らである。特に、伴信友が『仮字本末』の付録『神代字弁』でそれを否定し、後世の偽作として論議した。現代の国語学者の山田孝雄も、『所謂神代文字の論』(1953)で、神代文字が後代の偽作であると主張した。また、日本に始めから文字があるならば、早くから日本文の純粋な形が出来ていたはずである(注 1)など、現在の学界では、「神代文字」の存在を否定するのは普通である。

神代文字があるか否か、表記史上の一問題かもしれないが、日本語の表記史上における漢字の重要さは否定できない。本論では、漢字はいつ日本に伝わってきたか、伝来してから、日本語にどのような影響をもたらしたか、日本語の表記史上で、どのような役割を果たしてきたかについて、論じていきたい。

#### 2 漢字の伝来

漢字の発生は、古代中国の殷(紀元前 16 世紀ごろ～紀元前 11 世紀ごろ)の時代であった。「亀甲」「獣骨」などに刻まれたため、甲骨文と言われ、中国の最古の文字である。主に占うために作られたものである。その後、金文・大篆・小篆・楷書などが出てきて、中国の文字が統一されたのは、秦の始皇帝の時代とされている。漢字の伝来に関わる紀元前 3 世紀説の時代である。

中国の歴史書『史記』(前 124)の淮南衡山列伝第 58 の項に、「遣振男女三千人、資之五穀種百工而行。徐福、得平原広沢、止王不来。」(童男女数千人と百工、五穀の種を携え、

東海に船出した。広原平沢を得て王となり、帰らず)と記している。この「平原広沢」は日本であると言われている。徐福の伝説について、民間の伝説ではないかと思っている人がいるだろうが、『史記』は中国の最古の歴史書で、多くは司馬遷が現地を訪ね確認したうえで収録しことで、信憑性が高い史書である。その後の『漢書』の「郊祀志」、『三国志』の「呉志」、『後漢書』の「東夷列伝」などの多くの書にも、徐福のことが取り上げられている。特に、1982年に、徐福が住んでいた村とされる徐阜村(徐福村)に、徐福の子孫が住んでいることが分かった。更に驚くことに、徐福が不老不死の薬を求めて東方に行って帰ってこなかったことが、大切に保存されていた系図に書かれているのである。

日本では、佐賀県の徐副祭(毎年の1月20日)、和歌山県の徐福の墓碑、佐賀県の「徐福上陸地」の石碑など、「徐福」についての伝説が数多く残っている。以上に基づいて、徐福が渡来してきた可能性が極めて高い。この伝承が事実であれば、徐福の渡来によって、中国文化である漢字が日本に伝わってきたに違いない。即ち、紀元前3世紀という可能性も出てくるのである。

漢字の伝来について、有力な記述が漢時代の書物にある。『漢書』の「地理志」には、「樂浪海中有倭人 分爲百餘國 以歲時來獻見云」と記しているのに対して、『後漢書』の「倭人伝」に、「倭在韓東南大海中 依山島爲居 凡百餘國 自武帝滅朝鮮 使驛通於漢者三十許國」と記している。前漢の武帝が朝鮮を滅ぼし、樂浪郡を設置したのは前108年であることから、小国分立状態であった倭国が樂浪郡を通じて漢へ朝貢したのは前1世紀前後と推定される。1998年島根県田和山遺跡(2世紀前半)で出土した二点の破片が、2001年10月4日の山陰中央新報によると、中国が朝鮮半島に設けた樂浪郡のすずりと判明した。日本では実際に字を書いたのかどうかは疑問であるが、文字と関連したものだから、漢字が日本に伝わってきたのではないかと思われる。また、岡村秀典氏(注2)は、須玖岡本遺跡(福岡県・春日丘陵の先端にある春日市)で出土した鏡(D地点)を分析し、そこに埋葬された鏡が全て前漢の鏡で、内の3面は漢鏡2期(前2世紀)で、23面はすべて漢鏡3期(前1世紀)であることにより、須玖岡本D地点墓の年代は、およそ前1世紀ごろに位置付けることができよう指摘されている。それに基づいて、埋葬された鏡は、少なくとも前1世紀に伝わってきたと考えられる。よって、鏡に刻まれた銘文、即ち漢字は日本に伝わってきたのは、前1世紀前後に遡ることができる。

明治36年に、京都府函石浜遺跡で「貨泉」と書いた古代中国の貨幣が発掘された。その後、長崎県・佐賀県・福岡県などの北九州、山口県・岡山県・愛媛県などの瀬戸内海の

港、大阪までの広い地域で、「貨泉」が出土された。「貨泉」は王莽（在位 8～23）の治世に鑄造したもので、14 年～40 年の僅か 35 年間で作られたものである。貨泉は鑄造・使用していた期間が短い、広い地域で出土されたことから、当時の日本と中国との間に、九州から近畿地方に亘って、貿易が盛んに行われたことが窺える。漢字の伝来は前 1 世紀前後であることと、新（8～23）との盛んな交流を考え合わせると、1 世紀の日本では、貿易に従事していた古代日本人たちも少し漢字が読めたのだらうと思われる。

その後、『後漢書』における「東夷伝」で、「建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、倭國之極南界也。光武賜以印綬」と記されている。これに関しては、福岡県の志賀島で出土された「漢委奴国王」という蛇紐印が、『後漢書』に述べられた光武帝から倭奴国王に授かったものではないかという説がある。1981 年に中国江蘇省の甘泉 2 号墳で出土した「廣陵王璽」という金印は、58 年に光武帝の子に下賜されたものとされている。この印の字体が奴国王の金印と似ていることなどから、同じ工房で製作された可能性が高い。古代中国の体制から見れば、光武帝から賜った「漢委奴国王」と共に、「詔書」があったのだろう。「詔書」を読める人たちは恐らく渡来人であろうが、前漢からの漢字の伝来・新との貿易などを考えると、ある程度漢字の読める日本人もいたはずである。

上述したように、漢字と日本語との接触は前 3 世紀であった可能性はあるが、『漢書』の「地理志」・『後漢書』の「倭人伝」の記載と、楽浪郡の硯・前漢鏡の出土により、漢字と日本語との接触は前 1 世紀であることが明らかになった。その後、新との貿易、特に後漢との頻繁な外交と共に、漢字が日本に多く伝わってきたことと推測される。政治・経済の交流の中で、漢字が使える人に渡来人がいたと思われる一方、一部の日本人も漢字が読めたと推測される。

### 3 漢字の受容

漢字が日本に伝わってきたにしても、文字のなかった日本人にとって、簡単に漢字の使い方を身につけることはできなかったはずである。古代の日本人はどのように漢字を身につけ、使用するようになったかについて、出土品と、史書に書かれている記載などを検討しながら解明していきたい。

#### 3・1 出土品における漢字

平成 8 年、三重県大城遺跡で 2 世紀前半とされる弥生式土器の高杯が発掘された。その

高杯の脚の部分に「奉」或は「年」と読める文字が刻まれており、今まで発掘された最古の刻書土器である。また、同県の片部貝蔵遺跡で 2 世紀末とされる「田」と書いた墨書土器も確認された。日本最古の墨書土器とされる。3 世紀の出土品において、長野県の根塚遺跡で出土した「大」と刻まれた土器と、福岡県前原市の三雲遺跡群で出土した甕の口縁部近くに「竟」(鏡)と刻まれた土器がある。また、千葉県市の市野谷宮尻遺跡で 3 世紀の「久」と見える墨書土器も出土された。4 世紀の出土品として、三重県片部遺跡の「田」と書いた土器のほか、4 世紀初頭とされる木製よろいがある。この木製よろいには、黒い跡が五つ並び、筆で書かれた完全な形で、そのうちの 하나가「田」と判定された(注 3)。

以上の土器、木製よろいのほかに、弥生時代とされる「山」と刻んだ貝符が、鹿児島県種子島の広田遺跡で見つかった。これはコミュニケーションとして刻まれた文字ではなく、呪符・護符として刻まれたのではないかという意見がある(注 4)。多く出土した「田」について、寺沢薫氏(注 5)は、中国・殷代の甲骨文字の中にある巫女を意味し、祭祀などに関する記号ではないかと指摘している。また、土器について、村落内で祭祀・儀礼などの行為に伴って使用されたものであるとの指摘がある(注 6)。従って、2 世紀から 4 世紀にかけて、土器などに刻まれたり書かれたりした文字が、祭祀・儀礼などの行為に相応しく選ばれたと考えられる。言い換えれば、ある程度、漢字の意味が分からないならば、漢字が選ばれないと思われる。

一方、先述したように、出土した前漢の鏡、王莽時代の「貨泉」などから、1 世紀までの倭国は、古代中国との交流が盛んに行われたことが窺える。その故、漢字が読める人は渡来人だけでなく、一部の日本人もいたと推測される。土器の「大」の間違った筆順(注 7)・2 文字に見える「竟」(注 8)から、日本人が書いた字ではないかと思われる。それは漢字の真似する段階であろう。それにしても、後の漢字の使用に大きな役割を果たしたのであると言える。

土器に書かれた漢字のほかに、鏡に刻まれた漢字も日本語の文字の研究になくはない資料である。銘文鏡が前漢時代に既に日本に伝わってきたのに対して、現在、日本で作った最古の鏡は、福岡県の平原遺跡で出土した 2 世紀後半とされる内行花文鏡である。中国に例がない直径 46.5cm のサイズである。柳田康雄は、「陶氏作大宜子孫という中国鏡にない銘文があり、中国鏡と逆位置に配置した文様があるなど、本来の意義を知らずに模倣しているふしもある。(略)、渡来工人が伊都国で一括して製造したものではないか」と指摘した(注 9)。この内行花文鏡が日本製であれば、2 世紀の日本では、漢字が既に使用さ

れていることが分かる。これは、2 世紀の土器に刻んだ模様化した漢字を考えると、鏡の銘文を刻んだのは渡来人であつたに違いない。

現在、日本で出土した最も古い年号が入っている鏡は、魏の青龍三年（235）の銘方格規矩四神鏡である。その他に、魏の時代に当たる銘文が書かれたものは景初三年（239）の三角縁神獸鏡、正始元年（240）鏡、景初 4 年（240）（注 10）鏡などがある。また、呉の年号が入った赤烏元年（238）の内行花文鏡と赤烏 7 年（244）の平縁神獸鏡、年号が入っていない銘文鏡も出土した。この中で、三角縁神獸鏡をめぐって論議されているが（注 11）、中国で作ったのであろうが、日本で作ったのであろうが、いずれにしても漢字の広がりに影響をもたらしていくと思われる。大量の銘文鏡の出土により、渡来人だけでなく、漢字が読める日本人がいたはずであると窺われる。土器に書かれた「竟」はこの背景で刻まれたのではないかと思われる。

中国鏡が大量にもたらされた弥生時代中期後半になると、地域の支配者の墓に大量に埋葬された。この習俗は古墳時代にまで継続されるが、3 世紀中ごろ、卑弥呼の死去によって、倭国が混乱の状態になった。政治の混乱は経済にも影響をもたらしたはずである。鏡の輸入・製造にも影響が及んだに違いない。従って、渡来人だけでなく、一部の日本人も自ら鏡を模倣し作るようになったのだろう。奈良県北葛城郡新山で出土した「方格規矩四神鏡」に刻んだ十二干支の文字の順序を誤ったり、同じ字を繰り返し使用したり、文字が判断できないほど模様化したりする字が見られることから、これは日本人が作ったのではないだろうかという説が有力である。また、佐賀県東松浦郡谷口で出土した鏡に「吾作明竟甚独保子宜孫富無譬奇」という銘文があるが、中国の河北省易県出土の方格規矩鳥文鏡に「吾作明竟 甚独奇保子宜孫富無譬」となっている。これらのことから、鏡を作った人がまだ漢文の意味を十分に理解していないと考えられるが、漢字が真似されていると言える。

現在、文字の使用としての確実な例は千葉縣市原氏の稲荷台一号墳で出土した 5 世紀半ばから後半頃築造された「王賜」鉄剣銘である。王権から地方豪族に下賜されたものである。銘文は以下である。

「王賜□□敬安」(表)

「此廷□□□□」(裏)

王権から賜ってきた鉄剣に、漢字が書かれていることにより、漢字は既に政治と繋がり、権力を象徴する一方、貴族たちに使用されていたことが分かる。剣の書写は渡来人かもしれないが、王にしても剣をもらった人にしても漢字の意味がよく分かっていたと断定でき

る。こうして、剣に書かれた漢字は、地方豪族へ下賜したとともに、広がっていった、海外との貿易・外交の役割だけでなく、日本国内の政治舞台にも大きな役割を担っていくことがうかがえる。

また、5 世紀後半の鑄造と考えられる熊本県江田船山古墳の鉄刀銘と埼玉県稲荷山古墳の 471 年の鉄剣銘である。熊本県江田船山古墳の鉄刀銘は、

治天下獲□□□鹵大王世奉事典曹人名无利旦八月中用大鐵釜井四尺廷刀八十練六十  
拮三寸上好利刀服此刀者長壽子孫洋々得其恩也不失其所統作刀者名伊太可書者張安  
也

とあるのに対して、埼玉県稲荷山古墳の鉄剣銘は、

辛亥年七月中記乎獲居臣 上祖名意富比埵 其兒多加利足尼 其兒名旦已加利居 其  
兒名多加披次獲居 其兒名多沙鬼獲居 其兒名半旦比（表）

其兒名加差披余 其兒名乎獲居臣 世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王在斯鬼  
宮時 吾左治天下令作比百練利刀記吾奉事根原也（裏）

とある。熊本県江田船山古墳の鉄刀銘における「獲□□□鹵」という銘文は 471 年の鉄剣銘の表記と似ているところから、両者は同時代に作られたものと推測させる。「書者張安也」から刻んだ人は渡来人か渡来人の後裔であることが分かる一方、漢字の分野で渡来人たちが重要な地位を占めていることも分かる。一方、埼玉県稲荷山古墳の鉄剣銘では、「辛亥年」「上祖」などの名詞、「記」「為」「至」などの動詞が、中国風で表記される一方で、中国語にない「意富比埵」「獲加多支鹵」「斯鬼」等の多くの日本語が、漢字の音を利用し表記されている。このことから、5 世紀の日本では、漢字の音を利用して日本語を多く表現しようということがあった。このような表記は、漢字を十分に理解しないとできないだろう。従って、2 世紀～4 世紀の日本では、漢字を真似し理解する段階があったからこそ、漢字の音を利用し、多くの日本語が表記できるようになったのだろうと考えられる。

そのほかに、和歌山県橋本市における隅田八幡神社の「癸未年」の仿製鏡も以上の出土品と同様に、漢文が使われている一方で、「意柴沙加」「斯麻」のように、漢字の音を利用し中国語にない語が表記されている。「癸未年」は、443 年説と 503 年説があるが、近年の考古学の研究が進むにつれ、503 年の説が有力になってきたという（注 12）。

癸未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮時斯麻念長壽遣開中費直穢人今州利二人等  
取白上同二百早作此竟

以上の検討を通して、漢字が日本に伝わってきたのは、前 1 世紀ごろであることが分か

った。その後、貿易・政治などの交流につれ、遅くとも1世紀になると、日本では、漢字が読めるのは渡来人だけでなく、一部の日本人もいたと推測される。2世紀になって、土器に書かれた記号のように見える漢字が、ふさわしく選ばれたのか、見慣れた字であるのか、人名・地名の一部であるか、いずれにせよ漢字を真似し始めたと考えられる一方、日本人が真似した字ではないかという疑問が沸いてくる。それに対して、福岡県の平原遺跡で出土した2世紀後半の内行花文鏡は、日本で作ったとされ、「陶氏作大宜子孫」という漢文風の銘文から、これは渡来人により刻まれたに違いないと思われる。その後、魏の皇帝から賜った鏡だけでなく、民間の交流の中でも、大量の銘文鏡が倭国に持ち込まれて、一部の日本人の日常品として使用されていたはずである。こうして、これらの鏡の銘文は真似される対象となった。しかし、仿製鏡の銘文が間違えられたり文様化されたりしたことから、漢字をまだ十分に理解していなかったと見られる。それにしても、漢字の広がりによって重要な役割を果たしていくことになった。

また、古墳の副葬について、水野正好氏が「死者の頭部や胸部に置かれた鏡の場合は、死者が生前に愛した文物、あるいは特別に賜与された文物と考えることもできることから、銘文を読み理解できた可能性は高い」という（注13）。以上を踏まえて、4世紀ごろの日本では、渡来人だけでなく、漢字を理解した日本人もいたと判断される。こうして、5世紀になって、漢字を理解した上で、漢字の音を利用し、漢文にない日本語の表記が多くできるようになったと思われる。

### 3・2 記録における漢字

漢字がいつ受容され使用されたかについて、出土品を参考とする一方で、残されている史書の記載、特に文字に関する「文書」の記載も重要な参考になる。「文書」の交流について最初見られるのは『三国志』における「魏書」の「東夷伝」である。

- ア 王遣使詣京都、帶方郡、諸韓國、及郡使倭國、皆臨津搜露、傳送文書賜遺之物詣女王、不得差錯。
- イ 其年十二月、詔書報倭女王曰：制詔親魏倭王卑彌呼。
- ウ 正治元年、太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國、拜假倭王、并齎詔賜金、帛、錦罽、刀、鏡、采物、倭王因使上表答謝恩詔。
- エ 其八年、太守王頎到官。倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和、遣倭載斯、烏越等詣郡說相攻擊狀。遣塞曹掾史張政等因齎詔書、黃幢、拜假難升米為檄告喻之。

オ 復立卑彌呼宗女壹與、年十三為王、國中遂定。政等以檄告喻壹與、

「魏志」における「詔書」「檄」「上表」などを通して、3 世紀の古代日本と古代中国の間に、漢字が書かれた外交としての「文書」が既にあったことが分かる。57 年に光武帝から倭王に印を賜った際、詔書などについての記載はなかったが、少なくとも文字が書かれたものがあつたはずである。従って、1 世紀の日本では、既に通訳のような人がいて、土器などに書かれた漢字 1 文字ではなく、漢字で作った文章があつたはずである。その後、頻繁な交流の中で、倭王及び皇族たちは次第に公式の「文書」の重要性を認識してきたと考えられる。魏の詔書と大量の鏡などを受け取った後、「上表」を渡したことはその証拠であると言える。「上表」がどのような形式で作られたか、日本で作ったか、朝鮮半島を通して作ったかは、はっきりしないが、漢字をよく理解した渡来人か渡来人の子孫が作ったと思われる。一方、外交に関わる重要な書類であるので、倭王及び一部の皇族たちが全く関与しなかったことは考えられない。こうして、漢字と政治との繋がりが 3 世紀後半に始まったのである。政治と繋がったからこそ、漢字が更に広く知られていくようになったと考えられる。

4 世紀の倭国について、中国の史書には記載されていないが、百済から送ってきた七支刀の銘文が貴重な資料となっている。『日本書紀』神功紀条では、52 年に百済から七支刀等を献ずる記述がある。恐らく七支刀における 61 文字の銘文（注 14）の意味を理解できる官人たちの多くは朝鮮半島からの渡来人およびその子孫たちであつただろう。

漢字に関する正史の記録は『日本書紀』と『古事記』である。紀・記の記載によれば、応神天皇の時、王仁が百済から典籍をもたらした。これから貴族階級の間にも本格的に漢字、漢文の学習が始まった。『古事記』に記載された「千字文」について、色々な説がある（注 15）が、学習するための文字資料ではないかと思われる。応神天皇の時代について、4 世紀後半か 5 世紀初頭の説があるので、少なくとも 5 世紀ごろに、正式の漢字、漢文が日本に伝わってきたに違いない。また、『日本書紀』仁徳天皇の条では、「卅一年春三月 遣紀角宿禰於百済 始分國郡場 具録郷土所出」とある。更に、履中天皇の条では、「四年秋八月辛卯朔戊戌 始之於諸國置國史 記言事達四方志」とある。国史の設置によって、漢字が中央から地方へ広がっていくようになると考えられる一方、渡来人だけでなく、一部の日本人でも漢字を身につけていたと考えられる。

よって、『宋書』に記載された 478 年の武王の「上表文」は、渡来人か渡来人の子孫の手によって作られた一方、武王と一部の皇族たちも関与したと推測される。更に、出土し



た鉄剣銘、鉄刀銘などにおける仮借漢字ができたことを考え合わせると、5 世紀後半の日本では、上層階級のなかには漢文に通じていた日本人もいたと分かった。

更に、6 世紀には百済から日本に送られた五経博士の来朝により、儒教の受容とともに、漢字・漢文は日本により広がっていくことが見られる。言い換えれば、漢字・漢文に関する学問を更に吸収しようとしたことが窺える。しかし、文字のなかった日本人にとって、漢字に通達するに至るのはそう簡単ではないものである。敏達天皇元年（572）、三日間誰も読むことの出来なかった高句麗からの国書を、船史の先祖の王辰爾が読み解いたことはその証拠であろう。

以上のように、正史における漢字の伝来は 5 世紀ごろであるが、国史などの設置により、漢字が中央から地方へ広がっていくようになったと見られる。また、出土した 5 世紀後半の鉄剣、鉄刀の銘文における日本の人名・地名の表記から、漢字を利用し日本語の表記をしようとしていた試みも見られる。更に 6 世紀の五経博士らの来朝は、佛教の伝来だけでなく、漢字・漢文の広がりにも、大きな役割を果たしたのである。こうして、漢字は徐々に日本語表記と結びついていくようになる。

#### 4 漢字と日本語との結びつき

中国語は日本語と異なる系統の言語であるので、完全に日本語を表記することが難しい。従って、音訓を交えて用いたり、注を付けたりする方法は、早く『古事記』の序で、「上古之時言意並朴敷文構句於字即難已因訓述者詞不逮心全以音連者事趣更長是以今或一句之中交用音訓或一事之内全以訓録」と記されている。漢字の音を利用し日本語を表記したのは、5 世紀後半の鉄剣、鉄刀に見られるし、その前の 3 世紀の「魏志倭人伝」における「卑弥呼」などの表記もある。

漢字の訓を利用し日本語が表記され始めたのが、いつであるかについては、明らかではないが、推古天皇 4 年（595）の伊予道後温湯碑文の「葛城臣」、推古天皇 15 年（606）の法隆寺金堂薬師仏光背銘の「池辺大宮」「小治田大宮」のような表記は、訓読みをよく理解した上で、借訓が成立したに違いない。従って、訓読みは少なくとも 6 世紀末に既に使いこなしたと考えられる。更に、7 世紀初期になって、漢文の語順を崩して、「大御」「賜」「坐」のような敬語を交えながら、日本語を表記しようとしたことがあった（注 16）。こうして、漢字は、日本語の中に溶け込んでいき、広く使用されてゆく。それは近年の木簡の研究によって分かるようになった。

木簡の漢字は『日本書紀』『古事記』のような正式の場に使われている漢字と違い、日本人の生活に近い文字資料であるので、広い範囲に使われ、大衆的なものと言える。1961 年の平城京跡で大量に出土されて以来、続々と各地で見つかるようになった。

7 世紀前半の『論語』、8 世紀前半の『千字文』、8 世紀後半の『文選』に関する資料の出土により、7 世紀以後、漢字・漢文は既に中央から地方へ多くの人に知られたことが分かった。

更に、滋賀県北大津遺跡で出土した 7 世紀後半の木簡では、「賛」の下に「田須久」、「言至」の下に「阿佐ム加ム移母」、「采」の下に「取」などのように、大きく書いた字の下に二行割でその文字の訓・同義語などが書かれている。この中の「ム」は片仮名「ム」か、漢字「牟」の代わりに使用されているか不明であるが、簡略化にしようとしたことが窺える。また、滋賀県西河原森ノ内遺跡奈良県飛鳥池遺跡から出土した 7 世紀後半の変体漢文で書かれた木簡は以下のようなものである。

棕□□之我□□稻者□□得故我者反来之故是汝トア（表）

自舟人率而可行也 其稻在処者衣知評留五十戸旦波博士家（裏）

この「稻者」の「者」は助詞「は」、「而」は動詞「率」の連用形についた助動詞「て」、「可」は助動詞「べし」に当たり、「也」の下は一文字分あけて、文章の切れ目を占めているそうである（注 17）。このようにして、漢字は日本語の助詞などにも使用されるようになった。

同じように、右側に「世牟止言而□」と、左側に「□本止飛鳥寺」と書いた 7 世紀後半の木簡も見つかった。「世牟」はサ変動詞の未然形「せ」に推量の助動詞「む」がついた「せむ」であろうとされる（注 18）。また、「世牟」は大きく書かれたが、「止」は小さく書かれた宣命体が同時に使用されている。

以上の木簡はいずれも 7 世紀後半のものである。出土した木簡の語順は漢文の順ではなく、日本語にふさわしい日本語表記であることと、漢字を助詞・助動詞などに当てることなどから、7 世紀後半には、宣命体が既に使用されていたことが分かる。また、木簡の民衆性から考えると、漢字を利用し日本語を表記することは、貴族だけでなく、多くの人に普及していたと言える。

## 5 終わりに

以上のように、考古学・中国における史書の考察に基づいて、漢字が日本に伝わってき

たのは、前 1 世紀ごろであることが分かった。その後、貿易・政治などの交流につれ、遅くとも 1 世紀になると、日本では、漢字が読めるのは渡来人だけでなく、一部の日本人もいたと推測される。2 世紀の土器に書かれた字と、日本で作ったとされる 2 世紀後半の内行花文鏡の銘文から、2 世紀の日本では、漢字が既に真似されていたことが分かる一方、土器に書かれた記号のような字から、日本人は真似し作ったものではないかと思われる。その後、倭国に持ち込まれた大量の銘文鏡・日本で作られた仿製鏡など、特に政治との繋がりは、漢字の広がり大きな役割を果たしたのである。

5 世紀になると、出土した刀・剣などの銘文に、漢字の音を利用し中国語にない語を多く表記するようになった。このことから、漢字を使って日本語を表記しようという試みが見られる一方、漢字が既に一部の人に十分理解されていたと思われる。その上で、6 世紀になると、「葛城<sup>かつらぎ</sup>」のように、漢字の訓を利用し日本語が表記されるようになった。更に、7 世紀になって、「大御」「賜」「坐」のような敬語、「者」「而」「可」のように、中国語にない助詞・助動詞も自由に表記されるようになった。変体漢文、宣命書などが使用されていたことも出土した木簡から明らかになってきたのである。

このようにして、外国語としての漢字・漢文は日本に伝わってきってから、様々な工夫がされて漸く日本語の中に定着してきた。その後、片仮名・平仮名などの成立に繋がっている。

#### 【注】

- 1 春日和男の「漢字の伝来」(佐藤喜代治編『漢字講座 1 漢字とは』、1988、明治書院)による。
- 2 岡村秀典著『三角縁神獣鏡の時代』(1999、吉川弘文館)による。
- 3 1997 年 2 月 14 日の中日新聞による。
- 4 上田正昭編『古代の日本と渡来の文化』(1997、学生社)による。
- 5 1995 年 12 月 1 日中日新聞による。
- 6 高島英之著『古代出土文字資料の研究』(2002、東京堂)による。
- 7 平川南「二～四世紀の倭国で書かれた文字」(国立歴史民俗博物館編『古代日本文字のある風景 一金印から正倉院文書まで』、2002、朝日新聞社)による。「先に「入」を書いて後に横画を右から左に引いており、明らかに誤った筆順である」と述べている。
- 8 注 7 に同じ。

- 9 柳田康雄『伊都国を掘る一邪馬台国に至る弥生王墓の考古学』(2000、大和書房)による。
- 10 実際に存しなかった年号である。
- 11 「景初三年 陳是作鏡 自有經述 本是京師 杜地命出 吏人詔之 位至三公 母人詔之 保子宜孫 壽如金石兮」と刻まれた三角縁神獸鏡は日本で作られたか、中国で作られたか、現在の論議の焦点となっている。日本説は、卑弥呼が死んだ 3 世紀の墓から全く出土していないことと、鏡の直径が中国の後漢、三国時代より大きいことなどにある。更に、森博達氏が、卑弥呼を親魏倭王に任命した魏の時代は文学史上で高く評価され、音韻の知識も深まっている時代であるが、銘文の平仄の韻律が、無視されている指摘もある。それに対して、中国説は「魏志倭人伝」で魏の天子(皇帝)から倭の女王に百枚の鏡を賜ったこと、その後も何回も送ったこと、日本向けに特鑄造したなどの反対の意見を出した。恐らく確実な証拠が出るまで、論議し続けられるだろうが、大量の中国の銘文鏡、日本の仿製鏡の出土によって、日本人が漢字に接触するチャンスが増えていったことが窺われる。
- 12 小谷博泰著『木簡と宣命の国語学的研究』(1986、和泉書院)における「稻荷山古墳鉄剣銘の文章」による。
- 13 水野正好「日本に文字が来たころ—出土文字が語る古代」(平川南編『古代日本の文字世界』、2000、大修館)による。
- 14 銘文は平川南編『古代日本の文字世界』(2000、大修館)の P31 を参照する。
- (表) 泰<sup>〔和〕</sup>□ 四年<sup>〔五〕</sup>□ 月十六日丙午正陽造百鍊<sup>〔銅〕</sup>□ 七支刀□辟百兵宜供侯王□□□□作
- (裏) 先世<sup>〔以〕</sup>□ 来未有此刀百<sup>〔濟〕</sup>□ 王世<sup>〔子〕</sup>□ 奇生聖□故為<sup>〔倭〕</sup>□ 王旨造傳<sup>〔示〕</sup>□<sup>〔復〕</sup>□ 世
- 15 注 1 に同じ。
- 16 林史典「日本における漢字」(『岩波講座 日本語 8 文字』、1977、岩波書店)による。
- 17 平川南編『古代日本の文字世界』(2000、大修館)における「漢字はどのように日本語へ適用したか」による。
- 18 注 17 に同じ。

## 【参考文献】

- 1 下中彌三郎『古事記大成 3 言語文字篇』(1957) 平凡社
- 2 坂本太郎[他]『日本書紀 上』(日本古典文学大系 67) (1967) 岩波書店
- 3 古典研究会発行・長澤規矩也解題『後漢書』(3) (1972) 汲古書院
- 4 西郷信綱『古事記注釈』(第1巻) (1975) 平凡社
- 5 伴信友著『仮字本末』(1979) 勉誠社
- 6 坪井清足・平野邦雄『古代史総論』(1993) 角川書店
- 7 沖森卓也・佐藤信『上代木簡資料集成』(1994) 桜楓社
- 8 上田正昭編『古代の日本と渡来文化』(1997) 学生社
- 9 東野治之『木簡が語る日本の古代』(1997) 岩波書店
- 10 平川南編・稲岡耕二[ほか]著『古代日本の文字世界』(2000) 大修館書店
- 11 国立歴史民俗博物館編『古代日本文字のある風景—金印から正倉院文書まで—』(2002) 朝日新聞社
- 12 高島英之【古代出土文字資料の研究】(2002) 東京堂出版
- 13 平川南編『古代日本文字の来た道 古代中国・朝鮮から列島へ』(2005) 大修館書店
- 14 平川南[ほか]編『文字による交流』(2005) 吉川弘文館
- 15 平川南[ほか]編『文字表現の獲得』(2006) 吉川弘文館

## 第2節 漢字表記史における先行研究

### 1 はじめに

前節で述べたように、漢字を使って自由に日本語を表記されるようになったのは、7 世紀に遡ることができる。その後、仮名の成立により、助詞・助動詞・用言の語尾などが仮名で表記され、漢字が自立語の表記として使用されるようになった。現在の日本語の文章は、主に漢字・平仮名・片仮名からなっている。その中で、漢字は、日本語の表記の歴史で、ずっと重要な位置を占めてきている。

時代が下るが、慶応2年(1866年)に、前島密により「漢字御廃止之儀」という文章が提出され、表音文字の採用を主張した。その後、特に明治13(1880)、14(1881)年ごろから、色々な会が成立し、仮名採用論が盛んになったが、やがて会員が減少してくるにつれ、教育界の国字改良部のほうに加わり、仮名字体の統一や仮名遣いなどについて、意見を述べることになった(注1)。

一方、義務教育の普及に伴い、複雑で難しい漢字表記を改める必要が生じた。そこで、漢字節減論が出された。漢字を制限することを最初に提唱したのは福沢諭吉である。彼は「文字之教」(明治六年<1873>)の端書で、次のように述べている。

ムツカシキ字ヲサヘ用ヒザレバ漢字ノ数ハ二千カ三千ニテ沢山ナル可シ此書三冊ニ  
用ヒタル詞ノ数僅ニ千ニ足ラザレドモト通りノ用便ニハ差支ナシ

また、明治9年(1876)、海内果が「文字論」を新聞に発表し漢字を活用すべきであると主張している。その後いろいろと論議された結果、大正12月5日に「常用漢字表」1962字が臨時国語調査会から発表された。その凡例において、漢字の使用について詳しく制定された(注2)。

- 1、本表ニナイ漢字ハ仮名デ書ク。
- 2、固有名詞ニハ本表ニナイ文字ヲ用キテモ差支ナイ。タバシ外国(略)ノ人名地名ハ仮名書キトスルコト。
- 3、代名詞、副詞、接続詞、感動詞、助動詞オヨビ助詞ハナルベク仮名デ書ク。
- 4、外来語ハ仮名デ書ク。

昭和21年11月に、「当用漢字表」1850字が公布され、使用上の注意事項において、大正の「常用漢字表」を基準に、更に、「あて字はかな書きにする」「専門用語については、この表を基準として、整理することが望ましい」という項目が加えられた。昭和56年10

月に、一般の社会生活において、使用する漢字の目安として、「常用漢字表」1945 字の字種、音訓などが選定されることになっている。その中では、「科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない」とあることと、「漢字の目安」などの言葉から漢字表記についての制限が緩められた。

以上の国語の一連の政策をきっかけで、人の関心を集め、一般化されてきたのは、他の研究分野に遅れている表記である。それでは、「表記」というのは、どんな研究なのか、国語の研究項目として、いつ設置されたのかについて検討する。

## 2 表記について

表記に関する研究は、昭和 30 年代に盛んになった。その現象として、『続日本文法講座 2 表記編』（昭和 33、明治書院）に、「国語表記法の諸問題」（池上楨造）・「表記法の変遷」（山内育男）などの論文が載せられている。池上氏の論では、

「表記法」という語は、今はあたためて説明を要しないほど一般的になっている。ことに、戦後の国語政策の一環として、人の関心を集めることが多かったのである。と指摘し、表記法が一般化されてきた一つの要因としては戦後の国語政策にあると見られる。

昭和 36 年の『国語年鑑』（国立国語研究所編、秀英出版）における「文献」部の「国語関係雑誌論文一覧」に、「文字・表記」という項目が設けられ、昭和 37 年に国語学会の機関誌『国語学』（49 集）にも「文字・表記」という項目が立てられるようになった。更に、『国語学』では、昭和 55 年における展望号（121 集）から、「史的研究」と「理論・現代」に分け、「文字・表記」の研究成果が展望されてきた。

表記について、馬淵和夫が、『国語学』（注 3）における「文字・表記」（P13）の項で、

「文字」と「表記」とどちらがうのか、という点をかんがえてみるに、言語のかきあらわしかたは表記といってよいであろうが、文字はその素材の一部となるものである。

と述べ、表記の中には文字のみならず、句読点・括弧などの記号、振り仮名・送り仮名なども表記の範囲に入ると指摘した。武部良明が『国語学』（注 4）の「文字・表記」（理論・現代）において、

文字については、現代日本語を書き表すための漢字・平仮名・片仮名・ローマ字・数字・符号・記号すべてが含まれる。表記については、これらの文字を用いての現代日

本語の書き表し方としてとらえることにする。

と述べている。以上を基づいて、表記は文字、数字、符号などを用いて、言語を書き表すことであると言える。現在では、表記という言葉は、漢字表記、仮名表記だけでなく、横書き表記、数字表記など、色々に使用され、多くの研究がなされている。

ここで、注目したいのは、「表記」という研究が一般化された 1 つの要因は、一連の国語の政策である。その政策の結果として、一般の社会生活において、使用する漢字の目安として、「常用漢字表」1945 字の字種、音訓などが選定されることになっている。よって、古代から現代に使われてきた一部の語の漢字表記が使われなくなる。そこで、表記の中で、漢字表記を絞って、先行研究を見てみよう。

### 3 漢字表記に関する従来の研究

表記が、盛んに行われたのは、30 年代以後であるが、数多くの論、著書が出されている。その中で、漢字表記について、どんな研究がなされているか、どんな傾向があるか、問題点は何であるかについて、先行研究を検討することにする。検討する際、日本語学会の機関誌『国語学』121 集（昭和 55 年の展望号）から、「史的研究」と「理論・現代」に分けるように、「史的研究」と「理論」に分けて検討する。

#### 3・1 史的研究

史的研究では、古代から近世、近代に分けて検討することにする。

##### 3・1・1 古代に関する研究

- 1) 小林芳規「国語資料としての高山寺本古往来」（注 5）で、漢字の用法に 1 訓が 1 漢字で表すかはおよそ決まっていると指摘している。漢字の用法と振仮名との関係について、「常に振仮名のない漢字」は、上代から書記用漢字として使用されてきた「訓漢字」と一致するのに対して、「常に振仮名がある漢字」は、漢文訓読語や誤読の恐れのあるもので、教育的な意図があるものであると示している。
- 2) 峰岸明「高山寺本古往来における漢字の用法について」（注 6）で、資料に用いられた語とその漢字表記との関係を品詞別で整理したうえで、1 語に 2 種以上の漢字を使用する事例を検討し、得られた結論として、多くの語に 1 語 1 表記で定着していることと、1 語に 2 種以上の漢字を持っている語には、漢字の使い分けが存していることが指摘されている。また、本資料における用字を、慶滋保胤「日



本往生極楽記」・三善為康「拾遺往生傳」などにおける用字と比較した結果、本資料に使用されている漢字は、当時の日常実用漢字の中で比較的常用的なものであることが指摘されている。

- 3) 小林芳規「将門記に於ける漢字の用法—和化漢文とその訓読との関連の問題—」(注 7) で、真福寺本『将門記』における用字を考察した結果として、作品に施された全訓仮名は、一定の意図のもとに施されていることが判明された。それは全訓が付された漢字は当時の非日常常用漢字であることを意味していることを指摘した。
- 4) 山内洋一郎「金沢文庫本佛教説話集の表記体系」(注 8) で、和語(自立語)の表記について、説話部には片仮名表記が少ないのに対して、説経部には和語の仮名書きが多いことを指摘した。全訓送り仮名の漢字には、「雨アメ」「目メ」のように、早く固定し付訓の必要がないものが多いが、「躰ツゝミ」「務マツリコト」のように、難訓字の読みを示したものもある。また、「昵ムツマシキ」を取った 2 例とも全訓送り仮名になっている点から、「昵」の訓としての固定度の弱さが見られることも指摘した。
- 5) 田中牧郎「『今昔物語集』」(注 9) で、21 語の動詞を取り上げ、『色葉字類抄』(『類聚名義抄』も触れた)との比較を通して、『今昔物語集』で独自の漢字表記がかなり行われたことが指摘されている。また、これらの字が、ほぼ本朝部特に本朝世俗部に偏り、天竺・震旦部にあっても、ほぼ和文的な色彩が強い 4・5・10 巻にあることも指摘された。特に和文的な語、和文脈に使用されている語が多く見られることから、新しく漢字表記を試みたためだろうと指摘されている。
- 6) 佐藤武義は「古往来—『雲州往来』を中心に—」(注 10) で、古往来群、古辞書群、訓点資料群の共通訓を比較、書陵部本『雲州往来』の訓は、当時の訓をかなり忠実に使用されている結論を得た。品詞ごとに検討した比率として、動詞のうち、『雲州往来』の有訓漢字と古往来群・古辞書群・訓点資料群の有訓漢字が一致する語は 91 語であるのに対して、現在の常用漢字表の訓と共通しているのは 61 語であるので、その比率が 67.0%となる。同じ方法で得た名詞の比率が 54.1%であることを比べると、現在に受け継がれる動詞の漢字表記の比率が高いことが分かった。
- 7) 村田正英が『図書寮本宝物集』における和語表記の漢字」(注 11) で、文脈及び

仮名書きの例を考慮し、和語表記の漢字一覧表を作って分析した結果、『図書寮本宝物集』において、漢字の大半は特定の 1 和訓を担っていることが分かった。また、例が少ない同訓異字に、字によって用法にはっきり差異があることも示されている。

- 8) 川嶋秀之「古事記の用字法一曰・云・言・謂・語」(注 12) で、古事記における 5 字の用法をパターン別に整理し、5 字に使い分けがあるが、「曰」と「云」には、はっきり区別されているところと、あまり区別していないところがあるように、曖昧さをもっているところがあることを述べている。
- 9) 磯貝淳一「和化漢文資料における「アフ」の用字法について—和漢混淆文との比較から—」(注 13) で、動詞「アフ」の用字における差異の背景を探るため、和化漢文と和漢混淆文を比較して、両者の共通性と差異性を整理した結果、資料によって用字の種類が異なることが明らかになった。特に、和漢混淆文で多く使用されている「値」の字について、仏教説話・靈驗記類を中心に使用されていることから、和化漢文(仏教説話・靈驗記類)と和漢混淆文の用字の共通性が窺えることも指摘されている。
- 10) 東辻保和「『打聞集』における漢字の用法」(注 14) で、観智院本『類聚名義抄』を含めて、主に三巻本『色葉字類抄』(前田本と黒川家本)を参考として、『打聞集』における完全付訓漢字及び部分付訓漢字を対象として、漢字と訓との関係を検討した。結論として、付訓漢字は殆ど当時の日常の常用漢字である一方、多くの 1 語多漢字表記が存したが、よく整理されている『今昔物語集』に比べると、まだ整理していないようであると指摘した。
- 11) 青木美子『今昔物語集』における動詞「カヘル」の漢字表記について」(注 15) で、全巻を通じて平均的に出現数が多い「カヘル」が取り上げられた。他の漢字片仮名交じり文では「カヘル」は「帰」、「カヘス」は「返」と表記される傾向に対して、『今昔物語集』の「カヘル」「カヘス」は「返」と統一されたことから、『今昔物語集』は独自な特徴をもっていると指摘した。
- 12) 宇都宮啓吾「「急」字と「イソグ」訓との対応関係の定着に就いて—中世に於ける”日常常用漢字”に就いての一考察—」(注 16) で、「急」は、平安時代において定着をなしえなかった漢字が、中世になって定着した例である。
- 13) 柚木靖史「『万葉集』における「念」「思」の用字法」(注 17) で、『万葉集』にお

ける「念」と「思」の使い方について、文法的側面や意味用法の側面から分析し考察した結果として、2字の使い分けに明確な基準は見出せなかったが、概ね、「念」は感情的な思考活動に用いられているのに対して、「思」は論理的な思考活動に使用されている傾向が認められた一方、2字には使われ方が曖昧な例も多く存していると指摘している。

古代の先行研究の検討を通して、古代では、1語に1種の漢字表記が対応している語が多いのに対し、1語に2種以上の漢字表記が対応している語も存していることが分かった。その1語に2種以上の漢字表記が対応している語に、『高山寺本古往来 表白集』と『図書寮本宝物集』のように、漢字により意味が違うものもあるし、『万葉集』の「念」「思」のように、2字の使い分が見られるが、曖昧な例もある。また、『古事記』の「曰」「云」のように、はっきり区別できないものもある。この1語に2種以上の漢字表記が対応している語の一部が、「急」のように、中世になって定着したものがあるが、「アフ」の用字「値」「逢」「遇」のように、資料によって用字の種類が異なるものもある。

漢字と振仮名の問題について、振仮名のない漢字が、上代から書記資料として使われてきたのに対して、振仮名のある漢字が誤読の恐れがあって、非日常実用漢字である。特に、全訓振仮名・全訓送り仮名が付されている漢字は、非日常実用漢字であることが分かった。

また、説話集である『今昔物語集』に独自の漢字表記が使用されていることが知られる一方、独自の漢字表記語が、ほぼ出典未詳の本朝世俗部に偏ることから、一般的な漢字表記と縁が薄かった和文的な語に、新たな漢字表記が試みられたことが分かる。更に、佐藤武義の研究によると、名詞より、現在に受け継がれる動詞の漢字表記の比率が高いことが分かった(注18)。

### 3・1・2 近世に関する研究

- 1) 佐藤喜代治「西鶴の小説における用字についての試論」(注19)で、西鶴の『好色一代男』『好色五人女』『好色一代女』『日本永代蔵』『世間胸算用』を選び、特殊の漢字と、特殊ではないが字体が特殊な漢字と、あて字に分けて検討したところ、西鶴の小説における用字は自由奔放で、古い伝統や慣習にこだわらないところがあることが指摘されている。
- 2) 鈴木丹士郎の『里見八犬伝』の用字についての一試論』(注20)で、日本にある「節用集」「類聚名義抄」などを参照し、いくつかの語とその漢字表記との関係につい

での検討を通して、表記に当てられた漢字が諸字書、節用集類、唐話辞書類に求められるものが少なくない、即ち、それらの語の訓とその漢字表記が固定している場合が少なくないことが指摘されている。一方、「書言字考節用集」「雑字類篇」などにしか見出せないものがあるから、『里見八犬伝』で比較的に新しい用字法が使用されていることが指摘されている。

- 3) 浅野晃「浮世草子の漢字」(注 21) で、井原西鶴の作品を中心にして検討した結果、西鶴の用字法の多くが、当時の漢字使用の実態に即したものであると指摘された。
- 4) 小林賢次「天理本『狂言六義』用語考」(注 22) で、「天理本にあつて虎明本にない語」という観点から 8 語(動詞 6 語)を検討し、「狂言台本としては天理本独自の用語と見られるもの、天理本と版本狂言記に共通に使用されているもの、和泉流において、後世の台本にも継承されているもの、和泉流、大蔵流を問わず、後世の台本に継承されているもの」という結論を得た。また、天理本に近世語的な性格をもった用語がかなり用いられているが、初出例とみなされるものも少なくないことが指摘されている。
- 5) 鈴木丹士郎「読本におけう漢字語の傍訓―「雨月物語」と「弓張月」を中心にして―」(注 23) で、「雨月物語」と「弓張月」に見られる漢字と傍訓(主に和語)の関係を調査して、「雨月物語」では異なる漢字語に同一の和訓が当てられる場合が多いのに対して、「弓張月」では意味の似た字音語に傍訓が施されることが多いと指摘されている。また、読本において、特異な漢字がかなり存しているが、本字と送り仮名との関係がかなり固定していることが指摘されている。1 語多漢字表記について、ある本字が多用されている傾向が見られることも指摘された。
- 6) 藤井涼子「野郎評判記」「姿記評林」「雨夜三盃機嫌」における和語の漢字表記」(注 24) で、狂詩中の和語の漢字表記を各用法別に、用字面と表記される和語の意味分野の 2 点から考察して、漢字・漢語の意義を尊重し先行表記に倣う表記と、漢字の音、訓、義を自由に用いる新しい表記が混在することが指摘されている。
- 7) 小松寿雄「滑稽本の漢字」(注 25) で、滑稽本表記・ルビなしの漢字・宛字などの色々な面から、滑稽本における漢字を考察した。総合的に滑稽本における漢字の量が少ないこと、内容による漢字の使用が異なること、ルビなしの漢字(少なくともその漢字の直前にルビ付きで用いられていない)が当時の生活に密着した漢字であることなどが指摘されている。また、滑稽本では、「裁物」のように、漢字

と読みとの間に意味的な繋がりが見られる語、「浄瑠璃」を「上るり」と書くような宛字などが滑稽本に存していることも指摘されている。

- 8) 矢野準「人情本の漢字」(注 26) で、人情本・洒落本・滑稽本の各 4 作品を材料にし、抽出調査を行って、人情本は漢字の使用量が比較的に多いようであることが指摘されている。また、漢字の種類・漢字と仮名との関係・漢語風表記とあて字などの方面から、人情本における漢字の使用実態の考察を通して、漢字の使用に際しては、振り仮名が最大限に上手に活用されている一方、読本類との交流が見られることが指摘されている。
- 9) 彦坂佳宣「洒落本の漢字」(注 27) で、江戸後期の 6 作品 (1770～1798) における漢字の含有率・共通の漢字・6 作品の漢字とその性格をめぐって、新聞・雑誌に使われている当用漢字や当時代の他の作品との共通性などを参考して検討した。洒落本の漢字含有率が低いこと、洒落本では人間とその関係分野に使用されている漢字が多いこと、高頻度字の割合が高いのに対して、低頻度字の割合が低いことが指摘されている。一方、低頻度字では、読み仮名付きの難字が一面を占める割合が大きいことも指摘されている。
- 10) 彦坂佳宣「洒落本漢字の用法についての試論」(注 28) で、3 種の洒落本における漢字使用の実態を調査した。その結果として、一般用法においては、全般的に音より訓が優勢で体・用・相にわたり広く見えるのに対して、非一般的用法(人名、地名、「瓦斯」「足袋」のような宛字、熟字訓など)においては、人名・地名が多く比率を占めているが、借字・特殊訓も一定の割合を占めていることが指摘されている。

近世の漢字表記に関する研究を検討してきたところ、近世における漢字表記に、独自の用法が多く見られるが、その独自の用法の多くはその時代において正式な文字として使われていたものであることが明らかになった。

洒落本・滑稽本における漢字の使用量が少ないのに対して、人情本における漢字の使用量が多いことが明らかになった一方、洒落本における漢字の含有率が低いが、一般的な用法、即ち正字的な用法には、音より訓が優勢であることから、和語における漢字表記の使用の傾向が見られると考えられる。

漢字と振り仮名との関係については、中世に引き続き、振り仮名のない漢字は当時の日

常実用漢字、即ち日常生活に密着した漢字であることが分かった。一方、振り仮名のある漢字は難字、当て字が存しているが、その多くは漢字と訓が固定されているものであることが明らかになった。また、近世における語の漢字表記は、自由に使用されている面があるが、多くの漢字と振り仮名の間に意味的な繋がりが存していることが明らかになっている。

### 3・1・3 近代以後に関する研究

- 1) 飛田良文『安愚楽鍋』の漢字(注 29)で、登場人物 5 名(鄙武士・士・町人・<sup>あきうど</sup>商法個・職人)を選び、その使用語を和語・漢語・外来語などに分類し調査したところ、漢字表記と仮名表記の使用率に影響するのは、和語であることが明らかになった。また、和語を品詞別に分類した結果、名詞の漢字表記の使用率が 1 位であるのは士となるのに対して、動詞の漢字表記の使用率が 1 位であるのは<sup>あきうど</sup>商法個となる。
- 2) 蒲生芳郎「鷗外と漢字—初期作品、特に『舞姫』を中心に—」(注 30)で、ほぼ同時代の作品における漢字の使用量を比較し、『舞姫』で漢字表記の抑制の傾向が見られることが分かった。特に、字訓語について、量的には少ない難読漢字が読本の影響があることが、鷗外の字訓語が全て漢字本来の字義に即し、漢文訓読の伝統の中で固定した読みに従っていると述べている。
- 3) 米沢幹一「二葉亭四迷の漢字—『浮雲』における字法—」(注 31)で、言文一致と漢字・漢語との関係、漢字使用率、草稿と初出本の漢字など、いくつかの問題を検討した。『浮雲』における用字について、二葉亭四迷が 1 字 1 句に至るまで配慮と工夫を課したものである一方、字法に対する拘泥と否定、統一と混乱の関係も見べきことも指摘されている。
- 4) 玉村文郎「尾崎紅葉・幸田露伴の漢字—『多情多恨』と『五重塔』—」(注 32)で、露伴の『五重塔』と紅葉の『多情多恨』を資料として検討し、露伴のほうが一般的であるのに対して、紅葉のほうが個性的であるという結論となっている。また、紅葉のほう馬琴などの作品に見られる用字・中国近世白話小説の用語用字が多く観察される特徴があることが指摘されている。更に、紅葉の用字には「和語に漢字を当てる」志向が見られる。
- 5) 岡本勲「自然主義文学の漢字」(注 33)で、4 人の自然主義作家—花袋・藤村・秋

声・泡鳴の代表作を比較し、その代表作における漢字の使用を考察した。花袋・藤村が使用している漢字は、漢文訓読の知識に基づいたものであるのに対して、泡鳴が使用している漢字の多くは、当時の固定的な漢字、世間で広く使用されている漢字で、個性がないものである。三人と比べると、泡鳴のほうが、漢字の知識を無視したところがある。

- 6) 下河部行輝「新感覚派の漢字―川端康成の用法―」(注 34) で、川端康成の「バッタと鈴虫」と「伊豆の踊子」における漢字を、字音と字訓との方面から考察したうえで、品詞別で分析した結果、両作品における漢字は、名詞と動詞に集中して、訓読の漢字を中心として使用されていることが指摘されている。これらの漢字は、基本的なもので難解な漢字がないことが特徴である。
- 7) 田中順子「夏目漱石研究―の『夢十夜』の宛字について―」(注 35) において、作品に見られる宛字について、「表音的宛字」「表意的宛字」とに分けてその用例を見、その結果として、漱石が書き言葉としての漢字表記に話し言葉としての読みを与えることで、庶民的な言葉表現し、生活観のある文章を書き上げたのだと述べている。
- 8) 木坂基「写生文の漢字語」(注 36) で、品詞別・文字結合別・音訓別の観点から、正岡子規の「小園の記」(1898)・「飯待つ間」(1899) と寒川鼠骨の「新囚人」(1901) の 3 作品における漢字の用法を考察した。その 3 作品に共通漢字・漢字語の使用の特徴が見出せなかったが、全体的な特徴として、1 字訓語の使用率が高いこと、平易な漢字が使用されていることが指摘されている。特に、名詞・動詞において、一字訓語を中心に平易的に使用されていることも指摘されている。
- 9) 太田紘子「『あひづき』初訳・改訳の使用漢字」(注 37) における「漢字」で、『あひづき』の初訳・改訳の漢字を調査した結果として、『あひづき』の漢字使用率が言文一致の二葉亭四迷の特徴に相応しい漢字の使用率であることが明らかになった。漢字の使用について、一度しか使用されない漢字が特に多いことが特徴である。また、改訳では、音読漢字が減少する一方で、訓読漢字、特に熟字訓が増加してくる特徴もある。

以上見てきたように、明治初期の文学における語の表記が、読本の影響があるが、『あひづき』初訳・改訳の使用漢字」で見たように、訓読漢字が増加していく傾向が見られる。

「写生文の漢字語」「新感覚派の漢字」の漢字使用は、難読字より平易な漢字が使用され、名詞・動詞を中心に使用されていることが明らかになった。特に、これらの作品において、1 字訓語を中心に平易な漢字が多く使用されているのが見られる。

米沢幹一「二葉亭四迷の漢字—『浮雲』における字法—」で、鷗外の字訓語がすべて漢字本来の字義に即して、漢文訓読の伝統の中で固定した読みに従うことにより、近代にかける語の漢字表記は、意味との繋がりがより強まっていることが分かる。

### 3・2 論理的な研究

- 1) 宮島達夫「和語の漢字表記」(注 38) が、漢字の表語性と表意性・1 語 1 表記・1 語 1 表記へのうごき・仮名書きへの変化を検討したものである。特に、「1 語 1 表記への動き」で、「みる」「よい」の漢字使用について、1877 年から 1878 年の郵便報知新聞と、国立国語研究所の調査資料との比較により、1 語 1 表記の動きは、突然使われなくなるのではなく、次第に変化し実現しているということが指摘された。「かながきへの変化」では、日本語の表記が、実質的な部分が漢字で、形式的・文法的な部分が仮名で表記されるという傾向が指摘された。
- 2) 山田俊雄「近世の常用漢字について」(注 39) で、為永の「梅暦」における用例の分析を通して、近世の漢字と振り仮名との関連は、共存している関係で、常用漢字の使用字種の調査には、振り仮名つき文字連結を捉える必要があると指摘されている。また、字引類、節用集類を対象として、その漢字の分析を通して、時代に後れている節用集類などに増補が認められるが、実作の文芸に使用されている漢字群が異なることが指摘されている。
- 3) 佐藤武義「古代の漢字とことば」(注 40) における「漢字と訓」で、「声」に 9 種の訓がある(『類聚名義抄』による) が、時代の経過とともに整理され、次第に主な語義を示す 1 種の訓に固定していったことにより、漢字の訓の整理は、日本語の中に同化される過程で重要な課題であるため、資料・時期・位相などの面から追及する必要があると指摘されている。一方、『打聞集』の「<sup>タ</sup>打」を挙げて分析した結果、状況に応じて臨時的に使用されている訓であろうと指摘されている。また、『類聚名義抄』をはじめとする古代にない訓が、後世に加えられる新出の訓の存在も無視できないという指摘もある。
- 4) 飛田良文「近代日本語と漢字」(注 41) における「字訓機能の変化—語から造語要



素へ」で、具体的な例を挙げ、1 字 1 字の意味が消滅する代わりに、2 字で一つの意味を示す機能になった近代の現象が述べられている。

- 5) 土屋信一「明治・大正・昭和期の漢字使用」(注 42) で、明治期においては「漢字で書けるものは漢字で書かなければならない」という用字意識が指摘されている。
- 6) 土屋信一「表記」(注 43) で、1899 年あるいはそれに近い時期に書かれた無署名の記事を 4 個選んで百文節程度を検討したところ、そこで漢語がすべて漢字で、和語が僅かの語(アル 6・スル 4・モノ 4・イウ 1・ヨブ 1)以外漢字で表記されていることにより、「使える漢字は最大限に使う」という傾向が見られると指摘されている。
- 7) 土屋信一「漢字使用の新しい傾向」(注 44) で、120 年間の表記の変遷が検討されている。そのうち、漢字含有率では減少の傾向が見られるが、和語を仮名書きにする割合の変化では、和語を片仮名書きする傾向は 1975 年を最高にして減り始めており、これは 1975 年より新聞社がワープロを使用し始めたことが原因であると指摘されている。
- 8) 佐藤武義「和語・漢語の表記」(注 45) で、表記の歴史・近代の表記の実態などの方面から、日本語における漢字使用の実態を考察して、漢字表記に当初から現在に使用され続けているものと、後の時代で変化されたものに分けられている。その変化したものが、殆ど和語との意味上の有縁性が欠如しているものであると指摘される。
- 9) 今野真二「近世語の表記」(注 46) で、『言経卿記』から幾つかの記事を引き、検討して、「内容」が「表記体」を選択するということが指摘されている。また、「書き手」の意図による表記体が異なるということも指摘されている。

以上の研究を通して、古代から現代に至るまで、語の漢字表記について、1 語多漢字表記が 1 種の漢字表記に固定する傾向が見られる。古代の漢字表記について、振り仮名が当時の臨時的な使い方かもしれないが、漢字との繋がりが古代文字の読み方を捉える方法の一つであると考えられる。また、『類聚名義抄』をはじめとする古代にない訓が、後世に加えられる新出の訓の存在も無視できないことから、訓と漢字との繋がりの成立の過程が重要な課題と思われる。

近世の漢字表記について、「内容」或は「書き手」により表記体が異なることが明らか

になった一方、近世の漢字と振り仮名との共存している関係で、振り仮名つき文字連結を捉える必要があることも明らかになった。また、近世における字引類、節用集類に載せている漢字群と、文芸に使用されている漢字群とが異なることにより、近世における漢字表記の自由さが考えられる。

明治初期の新聞・小説などの漢字表記について、「使えるなら最大限で使う」という特徴がある。その後、平易的な 1 語 1 表記へ、次第に変化し実現している動きが見られる。それは、新聞だけではなく、「写生文」「新感覚派」にも見られる。

#### 4 先行研究の問題点と本論の研究の方法・意義

以上のように、先行研究を検討したところ、中世に至って、1 語に 1 種の漢字表記が対応している語が多く定着しているのに対して、1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している語も存していることが分かった。そのうち、『今昔物語集』に独自の漢字表記が使用されている一方、和文的な語に、新たな漢字表記が試みられたことにより（注 47）、和語に新たな漢字表記が使用されていることが窺える。更に、佐藤武義の研究で、名詞より、現在に受け継がれる動詞の漢字表記の比率が高いことにより、動詞の漢字表記は、中世で多く固定されていることが考えられる。

また、近世の漢字表記に関する先行研究を検討してきたところ、洒落本における漢字の含有率が低い、一般的な用法（正字的な用法）には、音より訓が優勢であることから、和語における漢字表記の使用の傾向が見られる（注 48）。

更に、明治初期の文学における語の表記が、読本の影響があるが、『あひづき』初訳・改訳の使用漢字」（注 49）で見たように、訓読漢字が増加していく傾向が見られる。「写生文の漢字語」（注 50）「新感覚派の漢字」（注 51）における漢字の使用にも、難読字より平易な漢字が使用され、名詞・動詞を中心に使用されていることが明らかになった。

このようにして、中世から現代にかけて、和語の漢字表記が使用されていく傾向が見られる一方、動詞に用いられる漢字表記の変化はどうだろうか。古代から現代にかけて、すべての動詞の漢字表記を検討し、纏めたほうが最もいい方法であるが、動詞の膨大な語彙量、古代から現代までの数多くの作品などから、個人の力には及ばないことである。従って、その中の最も特徴がある 1 作品を選び、その中の動詞の漢字表記に絞って、検討することにする。『今昔物語集』は日本古代の最大の説話集で、膨大な語彙量もあるし、新たな漢字表記も試みられた（注 52）ので、古代の全部の動詞が得られないが、当時使われてい

た部分の動詞が含まれていると思われる。また、『今昔物語集』における副詞（注 53）、形容詞に関する研究がある（注 54）ことにより、『今昔物語集』における語の漢字表記の特徴がより捉えやすいと考えられる。

一方、『雲州往来』における動詞の漢字表記は、現在に受け継がれる比率が高いと言われているが（注 55）、『今昔物語集』における動詞の漢字表記は、現在で、どのように表記されているか、「常用漢字表」（注 56）の動詞の漢字表記を中心に、比較していきたい。

『今昔物語集』に用いられている漢字表記は、『色葉字類抄』（注 57）を通して、そこに使用されている漢字表記は当時の常用漢字であるかどうか、参考にすることができる。その上で、現在の「常用漢字」と比較することができる。よって、ある程度、中世の動詞の漢字表記に使用されている常用漢字は、現在の常用漢字がどれほど一致するかを知ることができる。

但し、『今昔物語集』と「常用漢字表」に時代差もあるし、内容も違うことにより、一致しない動詞があるに違いない。これについて、これらの動詞の特徴は何であるかについても、検討する。更に、2つの資料から捉えた特別の動詞について、個別的に検討する。

このようにして、古代の動詞の漢字表記と現代の動詞の漢字表記と、どれほど一致するか、一致する動詞の特徴は何であるか、どんな動詞の漢字表記が変わったのかについて知ることができる。また、動詞の個別研究を通して、具体的な語の変遷の時期、要因などを知ることができる。

### 【注】

- 1 吉田東朔「明治以降の国字問題の展開」（佐藤喜代治編『漢字講座 11 漢字と国語問題』、1989、明治書院）による。
- 2 加藤正信編「付録 2 各種漢字制限案及び現「常用漢字」をめぐる諸事項一覧表」（佐藤喜代治編『漢字講座 11 漢字と国語問題』、1989、明治書院）による。なお、以下の昭和 21 年の「当用漢字表」、昭和 56 年の「常用漢字表」の項目もこの「一覧表」による。
- 3 馬淵和夫「文字・表記」（『国語学』第 81 集、1970）による。
- 4 武部良行「文字・表記」（『国語学』第 145 集、1986）による。
- 5 小林芳規「国語資料としての高山寺本古往来」（『高山寺本古往来 表白集』（高山寺資料叢書第 2 冊）、1972、東京大学出版会）による。

- 6 小林芳規「将門記に於ける漢字の用法—和化漢文とその訓読との相関の問題—」(『高山寺本古往来 表白集』(高山寺資料叢書第2冊)、1972、東京大学出版会)による。
- 7 小林芳規「将門記に於ける漢字の用法—和化漢文とその訓読との相関の問題—」(山岸徳平『日本漢文学史論考』、1974、岩波書店)による。
- 8 山内洋一郎「金沢文庫本佛教説話集の表記体系」(『鎌倉時代語研究』(第5輯)、1982、武蔵野書院)による。
- 9 田中牧郎『今昔物語集』(佐藤喜代治『漢字講座5 古代の漢字とことば』、1988、明治書院)による。
- 10 佐藤武義「古往来—『雲州往来』を中心に—」(佐藤喜代治『漢字講座5 古代の漢字とことば』、1988、明治書院)による。
- 11 村田正英『図書寮本宝物集』における和語表記の漢字」(『尾道短期大学研究紀要』第37巻第2号、1988)による。
- 12 川嶋秀之「古事記の用字法—曰・云・言・謂・語」(大島一郎教授退官記念論文集『日本語論考』、1991、桜楓社)による。
- 13 磯貝淳一「和化漢文資料における「アフ」の用字法について—和漢混淆文との比較から—」(『新大國語』第29号、2003)による。
- 14 東辻保和「『打聞集』における漢字の用法」(『鎌倉時代語研究』(第1輯)、1991、武蔵野書院)による。
- 15 青木美子『今昔物語集』における動詞「カヘル」の漢字表記について」(『高知大國文』第24号、1993)による。
- 16 宇都宮啓吾が「『急』字と『イソグ』訓との対応関係の定着に就いて—中世に於ける“日常常用漢字”に就いての一考察—」(前田富祺『国語文字史の研究3』、1996、和泉書院)による。
- 17 柚木靖史『万葉集』における「念」「思」の用字法」(『広島女学院大学日本文学』第13号、2003)による。
- 18 注10に同じ。
- 19 佐藤喜代治「西鶴の小説における用字についての試論」(『東北大学文学部紀要』第13号下、1963)による。
- 20 鈴木丹士郎の『里見八犬伝』の用字についての一試論」(『専修国文』第11号、1972)による。

- 21 浅野晃「浮世草子の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 7 近世の漢字とことば』、1987、明治書院)による。
- 22 小林賢次「天理本『狂言六義』用語考」(大島一郎教授退官記念論集刊行会『日本語論考』、1991、桜楓社)による。
- 23 鈴木丹士郎「読本における漢字語の傍訓―「雨月物語」と「弓張月」を中心にして―」(『近代語研究』(第2集)(3版)、1994、武蔵野書院)による。
- 24 藤井涼子「野郎評判記」「姿記評林」「雨夜三盃機嫌」における和語の漢字表記」(『同志社国文学』第46号、1997)による。
- 25 小松寿雄「滑稽本の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 7 近世の漢字とことば』、1987、明治書院)による。
- 26 矢野準「人情本の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 7 近世の漢字とことば』、1987、明治書院)による。
- 27 彦坂佳宣「洒落本の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 7 近世の漢字とことば』、1987、明治書院)による。
- 28 彦坂佳宣「洒落本漢字の用法についての試論」(『立命館文学』第505号、1988)による。
- 29 飛田良文「『安愚楽鍋』の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)による。
- 30 蒲生芳郎「鷗外と漢字―初期作品、特に『舞姫』を中心に―」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)による。
- 31 米沢幹一「二葉亭四迷の漢字―『浮雲』における字法―」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)による。
- 32 玉村文郎「尾崎紅葉・幸田露伴の漢字―『多情多恨』と『五重塔』―」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)による。
- 33 岡本勲「自然主義文学の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)による。
- 34 下河部行輝「新感覚派の漢字―川端康成の用法―」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)による。
- 35 田中順子「夏目漱石研究―の『夢十夜』の宛字について―」(『東洋大学短期大学論集』第27号、1992)による。

- 36 木坂基「写生文の漢字語」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)による。
- 37 太田紘子『二葉亭四迷『あひづき』の表記研究と本文・索引』(1997、和泉書院)による。
- 38 宮島達夫「和語の漢字表記」(『国語論説資料 7』(第 4 分冊上、1970)による。
- 39 山田俊雄「近世の常用漢字について」(『言語生活』 378、1983)による。
- 40 佐藤武義「古代の漢字とことば」(佐藤喜代治『漢字講座 5 古代の漢字とことば』、1988、明治書院)による。
- 41 飛田良文「近代日本語と漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 8 近代日本語と漢字』、1988、明治書院)による。
- 42 土屋信一「明治・大正・昭和期の漢字使用」(前田富祺編『国語文字史の研究』(5)、1992、和泉書院)による。
- 43 土屋信一「表記」(『国文学 解釈と鑑賞』第 64 巻第 7 号、1999)による。
- 44 土屋信一「漢字使用の新しい傾向」(『計量国語学』第 22 巻第 7 号、2000)による。
- 45 佐藤武義「和語・漢語の表記」(飛田良文『現代日本語講座 第 6 巻 文字・表記』、2002、明治書院)による。
- 46 今野真二「近世語の表記」(『日本語学』第 23 巻第 12 号、2004、明治書院)による。
- 47 注 9 に同じ。
- 48 注 28 に同じ。
- 49 注 37 に同じ。
- 50 注 36 に同じ。
- 51 注 34 に同じ。
- 52 注 9 に同じ。
- 53 峰岸明「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論—副詞の漢字表記を中心に—〔一〕」(『国語学』第 84 集、1971)と同氏の「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論—副詞の漢字表記を中心に—〔二〕」(『国語学』第 85 集、1971)による。
- 54 佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』(1974 年、明治書院)における「今昔物語集の形容詞語彙」による。
- 55 注 10 に同じ。
- 56 国語研究会監修『現代国語表記の基準』(第 6 次改訂版)(2001、ぎょうせい)による。

57 中田祝夫・峯岸明共編『色葉字類抄研究並びに索引』(1964、風間書房)による。

## 第 2 章 『今昔物語集』における動詞の漢字表記の研究

### 第 1 節 『今昔物語集』の漢字表記と

#### 「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞

##### 1 はじめに

『今昔物語集』は、膨大な語彙量が存しており、院政時代における国語の最も有力な資料でありながら、日本における最長の説話集と言われている。表記の特徴としては、漢字を主として大きく書くのに対して、片仮名を従として双行で小さく書く。また、自立語などの概念を表す語は主に漢字で書くのに対して、助詞・助動詞・活用語尾は片仮名で書くのも、その特徴である。

『今昔物語集』についての研究は、文法から語彙、表記にかけて、かなりの成果が得られており、本書の研究によって、院政時代の文法、語彙、表記の諸相も明らかになってきた。『今昔物語集』における表記についての研究は、山田俊雄氏の「表記体・用字と文脈・用語との関連—今昔物語集宣命書きの中の特例に及ぶ覚書—」（注 1）で、『今昔物語集』の用字意識についての提言は、後の表記の研究に大きな示唆が与えられた。山口佳紀氏の「今昔物語集表記法管見」（注 2）で、宛字と言われている 9 語の形容詞の漢字表記について、史的的に変体漢文・記録類などを比較し考察した結果、これらの語の漢字表記は、ほぼ同時期の他の漢文文献にも存している漢字表記であるという指摘があった。また、峰岸明氏の研究（注 3）では、『今昔物語集』における副詞の漢字表記は、かなりの程度で『色葉字類抄』における掲出上位の漢字と一致し、1 語に一定の漢字表記が定着し、当時の日常常用漢字群であったのに対して、1 語に 2 種以上の用字があったとしても、仮名表記より正字表記で、また借字表記より正字表記で用いられ、その正字表記は当時の日常常用漢字であったという指摘があった。佐藤武義氏が、『今昔物語集』における形容詞語彙の漢字表記についての研究（注 4）も、概ね峰岸氏との指摘と一致する。

動詞についての研究は、田中牧郎の研究（注 5）で、峰岸氏と佐藤氏の論を認めている一方、『類聚名義抄』『色葉字類抄』非収録語・『色葉字類抄』非掲出漢字が専用される語・『色葉字類抄』掲出漢字と非掲出漢字が共用される語のそれぞれ 10 語・6 語・4 語を検討した結果、『色葉字類抄』と異なって、独自の用字がかなり行われ、特に和文的な語の表記や、和文脈での表記に多く見られるという指摘があった。青木美子氏も、『今昔物語集』



における動詞の特別性を指摘した（注 6）。

『今昔物語集』における動詞の漢字表記は、副詞と形容詞の漢字表記と同じような特徴があると想像できるが、田中氏らの研究を通して、『今昔物語集』における動詞の漢字表記は独自性があることにより、『今昔物語集』における動詞の漢字表記は、より複雑だと考えられる。そこで、『今昔物語集』における全体的な動詞の漢字表記を検討する必要がある。

本論では、『色葉字類抄』（注 7）を参考しながら、『今昔物語集』における動詞の漢字表記を検討することを通して、『今昔物語集』における動詞の漢字表記は、どれほど当時の常用漢字が使われているかを知ることができる。このようにして、『今昔物語集』に使用されている漢字表記は、当時の独自の漢字表記であるか、中世の常用漢字であるかを知ることができる。

その上で、『今昔物語集』における動詞の漢字表記と、「常用漢字表」（注 8）に載っている動詞の漢字表記を比較する。勿論、『今昔物語集』に書かれている年代と「常用漢字表」が公布されている年代は離れているが、『今昔物語集』と「常用漢字表」の常用漢字の比較を通して、院政期の常用漢字と現代の常用漢字の違いを知ることができる。

方法として、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一致しない動詞、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一部一致する動詞に分けて、検討する。

古語と現代語の違いを考慮し、論文全体の語について、次のような処理を施した。

- ① 『今昔物語集』の「アキナフ」（商）と、「常用漢字表」の「アキナウ」（商）のように、歴史仮名遣いと現代仮名遣いが違う語は、同じ語として扱う。
- ② 『今昔物語集』の「アフグ」（仰）と、「常用漢字表」の「アオグ」（仰）のように、「u」と「o」が違う語は、同じ語として扱う。
- ③ 『今昔物語集』の「タガヘス」（耕）と、「常用漢字表」の「タガヤス」（耕）のように、「タガヤス」は「タガヘス」の転とされる語は、同じ語として扱う。
- ④ 『今昔物語集』の「アブ」（浴）と「常用漢字表」の「アビル」（浴）のように、活用の変化した動詞は、同じ語として扱う。

それでは、『今昔物語集』における動詞の漢字表記は、どのように表記されているのか、当時の常用漢字がどれほど使用されているか、『色葉字類抄』でどのように掲載されているのかについて、『今昔物語集』に存しており、「常用漢字表」にもある動詞の漢字表記を検討する。

以下、網かけをしているのは、『色葉字類抄』に掲載されていない語か、或は語が掲出されているが、『今昔物語集』に用いられた漢字は掲載されていない場合である。\_\_\_\_がついているのは、『色葉字類抄』に掲載されていないが、関連する語の漢字表記が『色葉字類抄』で第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字であり、\_\_\_\_がついているのは、『色葉字類抄』で掲出順位が 2 位以後の漢字で、印はないのは、『色葉字類抄』で第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字である。また、      がついているのは、関連する語の漢字表記が『色葉字類抄』で掲出順位 2 位以下であることを示す。また、㊦は黒川本『色葉字類抄』による例であることを示す。

## 2 『今昔物語集』と「常用漢字表」がともに 1 種の漢字で表記される動詞

『今昔物語集』と「常用漢字表」がともに 1 種の漢字で表記される動詞には、『今昔物語集』で用例が僅かしか使用されていない動詞と、『今昔物語集』で用例が多い動詞に分けて検討する。

### 2・1 『今昔物語集』で用例が僅かしか使用されない動詞

『今昔物語集』の動詞の漢字表記と、「常用漢字表」の動詞の漢字表記と一致する動詞には、用例が僅かしか使用されていない語は、以下の 33 語である。

アブ(浴) イハフ(祝) オブ(帯) カカフ(抱) カヌ(兼) コバム(拒) コヤス(肥) コラス(凝) コラス(懲) コル(凝) サク(避) シタシム(親) シタダル(滴) スク(透) ススム(進) [下二] スブ(統) ソラス(反) タツ[建] タノシム(楽) タヤス(絶) ツヒヤス(費) ツラヌク(貫) ニガル(苦) ハク(掃) ハケム(励) ハタス(果) ハユ(生) ヒユ(冷) マヨフ(迷) ムス(蒸) ムル(群) モドル(戻) ヤハラグ(和)

33 語のうち、『色葉字類抄』で合点がついている漢字か或は第 1 掲出漢字であるのは 22 語で、33 語の 67%弱を占めている。一方、『色葉字類抄』に掲載されていない語について、「コヤス」(肥)は「肥<sub>コユ</sub>」(辞字 下 8 オ 4) と、「シタシム」(親)は「親<sub>シタシ</sub> 七人反 近一 傍一 類一」(辞字 下 72 ウ 1) と、「ニガル」(苦)は「苦<sub>ニカシ</sub>」(飲食 上 38 オ 4) と、「マヨフ」は「迷<sub>マトフ</sub>」(辞字 中 93 オ 6) ㊦と、「ムル」(群)[下二]は「群<sub>ムラカル</sub>」(員数 中 44 ウ 6) ㊦とあるように、関連する語の漢字表記から、5 語の漢字表記が得られる。以上の関連する 5 語に使用されている漢字表記は、いずれも『色葉字類抄』における第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字であるので、5 語に用いられる漢字は当時の常用漢字で

あることが分かる。このようにして、『今昔物語集』における 33 語のうち、82%弱を占めている 27 語に当時の常用漢字が使用されていることが分かる。この 33 語はすべて「常用漢字表」の動詞の漢字表記と一致することにより、「常用漢字表」に載っている 33 語の動詞に、82%弱を占めている 27 語の漢字表記は、院政期で既に常用漢字として使用されていることが考えられる。

## 2・2 『今昔物語集』で使用例が多い動詞

『今昔物語集』で 1 語に 1 種の漢字表記が対応しており、使用数も多い動詞と、「常用漢字表」の動詞の漢字表記と一致するのは、以下の 240 語である。

アキナフ(商) アク(飽) アク(開)[四] アク(開)[下二] アソブ(遊) アタフ(与) ア  
ヅク(預) アツム(集) アハレム(哀) アフグ(仰) アマル(余) アユム(歩) アル(荒)  
 イク(生)[四] イク(生)[下二] イサム(勇) イソグ(急) イノル(祈) イム(忌) イル  
 (射) イル(鑄) イル(入)[四] イル(入)[下二] ウ(得) ウカガフ(伺) ウカブ(浮)[四]  
 ウカブ(浮)[下二] ウク(浮) ウゴク(動) ウシナフ(失) ウタガフ(疑) ウツス(写)  
 ウツタフ(訴) ウヤマフ(敬) ウル(売) オク(置) オク(起) オコナフ(行) オトル  
 (劣) オドロカス(驚) オドロク(驚) オフ(生) オフ(負) オユ(老) オヨブ(及) オ  
 ル(織) カギル(限) カク(書) カクス(隠) カクル(隠) カサヌ(重) カタル(語) カ  
 ツ(勝) カマフ(構) カハク(乾) カヨフ(通) カル(狩) カル(借) キコユ(聞) キス  
 (着) キタス(来) キタル(来) キラフ(嫌) キル(切)[下二] クダク(砕)[四] クツ  
 (朽) クツガヘス(覆) クハタツ(企) クハハル(加) クハフ(加) クユ(悔) クラ  
ス(暮) クルフ(狂) ケス(消) ケヅル(削) ココロザス(志) ココロミル(試) コタフ  
 (答) コノム(好) コフ(恋) コユ(肥) コル(懲) サカユ(栄) サガル(下) サケブ  
 (叫) ササフ(支) サダマル(定) サダム(定) サヅク(授) サマタグ(妨) シク(敷)  
 シヌ(死) シノブ(忍) シバル(縛) シム(染) シメス(示) シメス(湿) シラブ(調)  
 スグ(過) スグス(過) ススム(進)[四] スタル(廃) スフ(吸) スマス(澄) スム(澄)  
 ソム(染)[下二] ソル(反) タカヘス(耕) タスカル(助) タツ(建) タヅサハル(携)  
 タヅサフ(携) タノシブ(楽) タブ(食) タフス(倒) タル(足) タル(垂)[下二] チカ  
 フ(誓) チギル(契) チラス(散) チル(散) ツカハス(遣) ツク(尽) ツグ(告) ツク  
 ス(尽) ツクノフ(償) ツタハル(伝) ツタフ(伝)[四] ツタフ(伝)[下二] ツドフ(集)  
ツム(詰) ツム(積) ツモル(積) テラス(照) トク(解)[四] トク(解)[下二] トク

(説) トグ(遂) トヅ(閉) トナフ(唱) トバス(飛) トフ(問) トブ(富) トブ(飛)  
トホス(通) トホル(通) トラハル(捕) トラフ(捕) ナガス(流) ナガル(流) ナヤ  
 マス(悩) ナヤム(悩) ナラス(鳴) ナル(鳴) ニガス(逃) ニグ(逃) ニゴル(濁) ニ  
ユ(煮) ヌク(抜)[四] ヌク(抜)[下二] ヌスム(盗) ヌフ(縫) ヌル(塗) ノコル(残)  
 ノゾク(除) ノゾム(臨) ハウブル(葬) ハク(履) ハゲマス(励) ハコブ(運) ハジ  
マル(始) ハジム(始) ハタラク(働) ハヤマル(早) ハル(張) ハル(晴) ヒカル(光)  
 ハク(弾) ヒタス(浸) ヒビク(響) ヒユ(冷) ヒラク(開) ヒロフ(拾) フク(吹) フ  
 クム(含)[四] フクム(含)[下二] フトル(太) フマフ(踏) フム(踏) フル(振) ヘダ  
 ツ(隔) ホコル(誇) ホドコス(施) マク(負) マジハル(交) マジフ(交) マツ(待)  
 マナブ(学) マヌカル(免) マネク(招) マフ(舞) マキル(参) ミス(見) ミダス(乱)  
 ミダル(乱)[下二] ミツ(満)[四] ミユ(見) ミル(見) ムカフ(迎)[下二] ムク  
(向)[四] ムク(向)[下二] ムスブ(結) モチキル(用) モツ(持) モユ(燃) モヨホス  
 (催) モラス(漏) モル(盛) モル(漏) ヤク(焼) ヤシナフ(養) ヤドス(宿) ヤトフ  
 (雇) ヤドル(宿) ヤム(病) ユヅル(譲) ユハフ(結) ユフ(結) ユルグ(揺) ユルブ  
 (緩) ヨス(寄) ヨワル(弱) ワク(分) ワヅラハス(煩) キル(居) エフ(酔) ヲシフ  
 (教) ヲシム(惜) ヲフ(迫) ヲル(折)

以上の 240 語のうち、186 語に使用されている 1 種の漢字表記は、『色葉字類抄』にお  
 ける合点がついている漢字か或は第 1 掲出漢字である。240 語の 78%弱を占めている。『色  
 葉字類抄』に掲載されていないが、関連する語(注 9)の漢字表記から得られる語は、「ア  
 ヅク」・「オドロカス」・「オユ」・「キタス」・「クハハル」・「ココロサス」・「コフ」・「コル」・  
 「サダマル」・「スグス」・「スマス」・「ツタハル」・「トバス」・「トラハル」・「ナラス」・「ニ  
 ガス」・「ニユ」・「ハゲマス」・「ハジマル」・「ハヤマル」・「ヒカル」・「フトル」・「フル」・「マ  
 ジフ」・「ミス」・「ミダス」・「ミユ」・「ムク」[四]・「ムク」[下二]・「モラス」・「ヤドス」・  
 「ユハフ」・「ヨワル」・「ワヅラハス」の 34 語である。「アヅク」(預)は「預<sup>アツカル</sup>」(辞字  
 下 37 ウ 6)と、「オドロカス」(驚)は「驚<sup>オドロク</sup>」(辞字 中 67 ウ 3) ②と、「オユ」(老)は  
 「老<sup>オッ</sup>」(人事 中 65 オ 4) ②と、「キタス」(来)は「来<sup>キタル</sup>」(辞字 下 59 ウ 4)、「クハ  
 ハル」(加)は「加<sup>クッ</sup>」(辞字 中 77 オ 5) ②と、「ココロザス」(志)は「志<sup>ココロサシ</sup>」(人事  
 下 5 ウ 5)と、「コフ」(恋)は「恋<sup>コヒ</sup>」(人事 下 5 オ 2)と、「コル」(懲)は「懲<sup>コラス</sup>」(辞  
 字 下 9 オ 1)と、「サダマル」(定)は「定<sup>サタム</sup>」(辞字 下 49 オ 3)と、「スグス」(過)は

「過<sub>ス</sub>ク」(辞字 下 118 オ 2)と、「スマス」(澄)は「澄<sub>ス</sub>ム」(辞字 下 118 オ 3)と、「ツタハル」(伝)は「伝<sub>ツ</sub>タフ」(辞字 中 26 ウ 5) ②と、「トバス」(飛)は「飛<sub>ト</sub>フ」(辞字 上 59 オ 7)と、「トラハル」(捕)は「捕<sub>ト</sub>ラフ」(辞字 上 59 ウ 6)と、「ナラス」(鳴)は「鳴<sub>ナ</sub>ル」(辞字 中 35 ウ 8) ②と、「ニガス」(逃)は「逃<sub>ニ</sub>ク」(辞字 上 39 オ 1)と、「ニユ」(煮)は「煮<sub>ニ</sub>ル」(辞字 上 39 オ 1)と、「ハゲマス」(励)は「励<sub>ハ</sub>ケム」(辞字 上 29 オ 7)と、「ハジマル」(始)は「始<sub>ハ</sub>シム」(辞字 上 30 オ 4)と、「ハヤマル」(早)は「早<sub>ハ</sub>ヤシ」(辞字 上 30 オ 1)と、「ヒカル」(光)は「光<sub>ヒ</sub>カリ」(天象 下 90 オ 6)と、「フトル」(太)は「太<sub>フ</sub>トシ」(辞字 中 105 オ 4) ②と、「フル」(振)は「振<sub>フ</sub>ルウ」(辞字 中 105 オ 4) ②・「マジフ」(交)は「交<sub>マ</sub>シハル」(辞字 中 94 オ 5) ②と、「ミス」(見)は「見<sub>ミ</sub>ル」(人事 下 63 オ 1)と、「ミダス」(乱)は「乱<sub>ミ</sub>タル」(辞字 下 64 ウ 7)と、「ミユ」(見)は「見<sub>ミ</sub>ル」(人事 下 63 オ 1)と、「ムク」(向)[四]は「向<sub>ム</sub>カフ」(辞字 中 45 オ 4) ②と、「ムク(向)[下二]」は「向<sub>ム</sub>カフ」(辞字 中 45 オ 4) ②と、「モラス」(漏)は「漏<sub>モ</sub>ル 虚候也 一魁也水下也」(辞字 下 104 オ 4)と、「ヤドス」(宿)は「宿<sub>ヤ</sub>トル」(辞字 中 86 ウ 7) ②と、「ユハフ」(結)は「結<sub>ユ</sub>フ」(辞字 下 68 オ 4)と、「ヨワル」(弱)は「弱<sub>ヨ</sub>ハシ」(辞字 上 116 ウ 6)と、「ワヅラハス」(煩)は「煩<sub>ワ</sub>ツラハシ」(辞字 中 68 ウ 2) ②とある。34 語に使用されている漢字表記は、関連する語でいずれも合点がついている漢字か或は第 1 掲出漢字であることにより、34 語に使用されている漢字表記も『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字が使用されていることが分かる。このようにして、計 220 語で、240 語の 92%弱を占めている動詞の漢字表記に、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字が使用されていることが分かる。

以上、『今昔物語集』で使用されている 1 種の動詞の漢字表記と、「常用漢字表」に載っている 1 種の動詞の漢字表記と一致する 273 語を検討してきた。『今昔物語集』で使用数が僅かしか使用されていない 33 語の動詞のうち、82%弱を占めている 27 語の漢字表記に当時の常用漢字が使用されているのに対して、『今昔物語集』で使用数が多い 240 語のうち、92%弱を占めている 220 語の漢字表記に、当時の常用漢字が使用されていることが、以上の検討を通して分かった。2 つの場合の動詞の漢字表記を合わせて計算すると、273 語のうち、90%強を占めている 247 語に当時の常用漢字表記が使用されていることが分かった。このことから、『今昔物語集』で使用されている 1 種の動詞の漢字表記と、「常用漢字表」に載っている 1 種の動詞の漢字表記と一致する場合、『今昔物語集』に使用されている漢字表記は、ほぼ当時の常用漢字であることが明らかになった。

### 3 『今昔物語集』と「常用漢字表」がともに 2 種以上の漢字で表記される動詞

『今昔物語集』の動詞の漢字表記と「常用漢字表」の動詞の漢字表記とが一致する語のうち、ともに 2 種以上の漢字表記が存している動詞は以下の 20 語である。

アリ(有・在) ウク(受・請) ウマル(生・産) ウム(生・産) オクル(送・贈)[四] オサフ(抑・押) オル(降・下) カヘリミル(願・省) キク(聞・聴) コユ(超・越) サク(裂・割) タツ(断・絶) タフトブ(貴・尊) ツクル(作・造) トトノフ(整・調)[下二] ノス(乗・載) ノボル(上・登・昇) ハナル(放・離) ワカル(分・別) ヲドル(踊・躍)

以上の 20 語のうち、語の漢字表記として 2 種以上の漢字がともに『色葉字類抄』で合点がついている漢字か或は第 1 掲出漢字であるのは、「アリ(有・在)」は「有<sup>アリ</sup>在(他 6 字略)」(辞字 下 35 オ 1) と、「キク(聞・聴)」は「聞<sup>キク</sup>又<sup>キ</sup>コユ(他 11 字略)聴(人事 下 57 ウ 4) と、「コユ(越・超)」は「踰<sup>コユ</sup>又<sup>作</sup>超越(他 9 字略)」(辞字 下 8 オ 3)「サク(裂・割)」は「裂<sup>同下也</sup>折<sup>サク</sup>割(辞字 下 48 ウ 4) と、「トトノフ(整・調)[下二)」は「調<sup>トトノフ</sup>律<sup>悠</sup>又<sup>作</sup>整(他 41 字略)」(辞字 上 61 オ 4) の 5 語である。次は、他の 15 語を検討する。

#### 1 ウク(受・請)

『今昔物語集』では、「ウク」の漢字表記として、「受」は 477 例使用されているのに対して、「請」は 33 例使用されている。一方、黒川本『色葉字類抄』に「受<sup>ウク</sup>請(他 28 字略)」(辞字 中 51 ウ 2) とあるように、「受」は第 1 掲出漢字であるのに対して、「請」は第 2 掲出漢字である。このようにして、『今昔物語集』に多く使用されている「受」は、黒川本『色葉字類抄』において第 1 掲出漢字であることにより、「受」は『今昔物語集』の常用漢字である一方、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが推測される。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

#### 2 ウマル(生・産)

『今昔物語集』では、「ウマル」の漢字表記として、「生」は 271 例使用されているのに対して、「産」は 7 例しか使用されていない。一方、黒川本『色葉字類抄』に「生<sup>ウム</sup>又<sup>ウ</sup>マル<sup>産山</sup><sub>已上生</sub> ウマル也<sup>誕興育乳娩</sup><sub>已上ウム</sub>」(人事 中 49 オ 4) とあるように、「生」は第 1 掲出漢字であるのに対して、「産」は第 2 掲出漢字である。このようにして、『今昔物語集』に

多く使用されている「生」は、黒川本『色葉字類抄』で第 1 掲出漢字であることにより、「生」は『今昔物語集』の常用漢字でもあり、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字でもあることが分かる。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

### 3 ウム(生・産)

『今昔物語集』では、「ウム」の漢字表記として、「産」は 37 例使用されているのに対して、「生」は 23 例使用されている。一方、黒川本『色葉字類抄』に「生<sup>ウム</sup> <sup>又</sup>ウマル<sup>産</sup>山<sup>已上</sup>生<sup>ウマル也</sup>誕興育乳<sup>婉</sup>已上<sup>ウム</sup>」(人事 中 49 オ 4)とあるように、「生」は第 1 掲出漢字であるのに対して、「産」は第 2 掲出漢字である。『今昔物語集』では、「ウマル」の漢字表記「生」が多く使用されていることを考え合わせると、「ウム」の漢字表記「産」「生」とも『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが考えられるが、黒川本なので、合点の有無は分からない。

### 4 オクル(送・贈)

『今昔物語集』では、「ヲクル」の漢字表記として、「送」は 116 例使用されているのに対して、「贈」は 1 例しか使用されていない。一方、前田本『色葉字類抄』に「送<sup>ヲクル</sup>贈(他 23 字略)」(辞字 上 84 オ 3)とあるように、「送」は第 1 掲出漢字且つ合点がついているのに対して、「贈」は第 2 掲出漢字である。このようにして、『今昔物語集』に多く使用されている「ヲクル」の漢字表記「送」は、前田本『色葉字類抄』で第 1 掲出漢字且つ合点がついていることにより、「送」は『今昔物語集』の常用漢字であり、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字でもあったことが分かる。

### 5 オサフ(抑・押)

『今昔物語集』では、「ヲサフ」[下二]の漢字表記として、「抑」は 20 例使用されているのに対して、「押」は 1 例しか使用されていない。一方、前田本『色葉字類抄』に「抑<sup>ヲサフ</sup>握推(他 14 字略)」(辞字 上 83 ウ 7)とあるように、「抑」は第 1 掲出漢字且つ合点がついているのに対して、「押」は掲載されていない。「ヲサフ」の漢字表記「押」は、「推<sup>ヲサフ</sup>搜壓<sup>抑</sup>排惣<sup>扔</sup>ッ<sup>接</sup>扱<sup>交</sup>抑<sup>已上</sup>同」(辞字 上 83 ウ 2)から推測される。このようにして、「ヲサフ」の漢字表記「抑」は、『今昔物語集』に多く使用されていることと、前田本『色葉字類抄』で第 1 掲出漢字且つ合点がついていることと一致する。よって、「抑」は、『今昔物

6 オル(下・降)

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

## 8 タフトブ(貴・尊)

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

## 広島女学院大学大学院



は第 4 掲出漢字である。しかし、『今昔物語集』では、「断」が多く使用されていることから、「タツ」の漢字表記が「断」に統一する傾向が見られる。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

#### 10 ツクル(造・作)

『今昔物語集』では、「ツクル」の漢字表記として、「造」は 579 例使用されているのに対して、「作」は 92 例使用されている。一方、黒川本『色葉字類抄』に「造ツクル作(他 29 字略)」(辞字 中 26 ウ 4)とあるように、「造」は第 1 掲出漢字であるのに対して、「作」は第 2 掲出漢字である。このようにして、「造」は、『今昔物語集』に多く使用されていることと、黒川本『色葉字類抄』で第 1 掲出漢字であることと一致する。よって、「ツクル」の漢字表記「造」は、『今昔物語集』の常用漢字であり、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが分かる。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

#### 11 ノス(乗・載)

『今昔物語集』では、「ノス」の漢字表記として、「乗」は 96 例使用されているのに対して、「載」は 2 例しか使用されていない。一方、黒川本『色葉字類抄』に「載ノス 昨代反 勝一重一 運一 乗ノル 實証食凌 二反 一馬也 騎載又奇 (他 15 字略)」(辞字 中 60 ウ 4)とあるように、「載」は「ノス」の第 1 掲出漢字として掲載されているのに対して、「乗」は「ノル」の第 1 掲出漢字として掲載されている。このことから、『今昔物語集』に使用されている「ノス」の漢字表記は、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字ではなく、関連する語の漢字表記が使用されていることが分かる。

#### 12 ノボル(上・登・昇)

『今昔物語集』では、「ノボル」の漢字表記として、「上」は 204 例使用されているのに対して、「登」は 162 例、「昇」は 104 例使用されている。一方、黒川本『色葉字類抄』に「登ノボル 都藤反 一壇 一山 昇ショウ 識蒸反 同上也 本作升俗加田也 升仝上 時掌反 (他 22 字略)」(辞字 中 60 ウ 8)とあるように、「登」は第 1 掲出漢字であるのに対して、「昇」は第 2 掲出漢字で、「上」は第 5 掲出漢字である。3 字とも多く使用されていることにより、当時の常用漢字であると考えられるが、黒川本なので、合点の有無は分からない。

#### 13 ハナル(離・放)

『今昔物語集』では、「ハナル」の漢字表記として、「離」は 176 例使用されているのに対して、「放」は 1 例しか使用されていない。一方、前田本『色葉字類抄』に「離<sup>ハナル</sup>脱麦討携放（他 7 字略）」（辞字 上 29 ウ 2）とあるように、「離」は第 1 掲出漢字かつ合点がついているのに対して、「放」は第 6 掲出漢字である。このようにして、『今昔物語集』に多く使用されている「ハナル」[下二]の漢字表記「離」は、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが分かる。

#### 14 ワカル(別・分 (注 10) )

『今昔物語集』では、「ワカル」の漢字表記として、「別」は 54 例使用されているのに対して、「分」は 2 例しか使用されていない。前田本『色葉字類抄』に「別<sup>ワカル</sup>斑<sup>ハナ</sup>離<sup>ハナ</sup>辞<sup>ハナ</sup>叛<sup>ハナ</sup>贖<sup>ハナ</sup>已上同」（辞字 上 89 オ 3）とあるように、「別」は「ワカル」の漢字表記として、第 1 掲出漢字且つ合点がついているが、「分」は掲載されていない。但し、関連する動詞「ワカツ」の漢字表記「分」は、前田本『色葉字類抄』に「分<sup>ワカツ</sup>別（他 33 字略）」（辞字 上 89 オ 1）とあるように、「分」に第 1 掲出漢字且つ合点がついているので、「ワカツ」の漢字表記「分」は当時の常用漢字であることが分かる。よって、「ワカル」の漢字表記「分」も当時の常用漢字であることが推測される。このようにして、『今昔物語集』に使用されている「ワカツ」の漢字表記「分」「別」がともに、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが分かる。

#### 15 フドル(踊・躍)

『今昔物語集』では、「フドル」の漢字表記として、「踊」は 15 例使用されているのに対して、「躍」は 1 例しか使用されていない。一方、前田本『色葉字類抄』に「踊<sup>フドル</sup>跳<sup>ハナ</sup>躍<sup>ハナ</sup>跳<sup>ハナ</sup>踊<sup>ハナ</sup>跳<sup>ハナ</sup>已上フドル」（辞字 上 82 オ 4）とあるように、「踊」は第 1 掲出漢字且つ合点がついているのに対して、「躍」は第 3 掲出漢字で、「踊」は第 4 掲出漢字である。

以上、『今昔物語集』で 2 種以上の漢字表記が使用されている動詞が、「常用漢字表」においても 2 種以上の漢字表記が存している 20 語の動詞を見たところ、「アリ(有・在)」、「キク」(聞・聴)などの 5 語だけは、『今昔物語集』に使用されている漢字すべての表記は、当時の常用漢字であることが分かる。

一方、「ウク(受・請)」、「ウマル(生・産)」、「オクル(送・贈)」、「オサフ(抑・押)」、「オル

(下・降)・「ツクル(造・作)」・「ハナル(離・放)」・「ワカル(別・分)」の 8 語は、『今昔物語集』で使用数が 1 位である漢字表記は、『色葉字類抄』で合点がついている漢字か或いは第 1 掲出漢字であることによって、『今昔物語集』における動詞の漢字表記は、1 種の漢字表記に統一しようとする試みが見られる。なお、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字に統一しようとする傾向が見られる。

#### 4 終わりに

以上、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞について、『色葉字類抄』で、どのように掲載されているか、どれほど『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字と一致するかについて検討してきた。結果として、以下のようなものである。

『今昔物語集』で使用されている 1 種の動詞の漢字表記と、「常用漢字表」に載っている 1 種の動詞の漢字表記と一致する場合、『今昔物語集』に使用されている漢字表記は、ほぼ当時の常用漢字であることが明らかになった。よって、「常用漢字表」に載っている同じ動詞の漢字表記は、ほぼ『今昔物語集』が編纂されている当時で、すでに常用漢字であることが考えられる。

一方、『今昔物語集』の動詞の漢字表記と「常用漢字表」の動詞の漢字表記が、ともに 2 種以上の漢字表記が存している場合、『今昔物語集』に使用されている漢字表記は、全て当時の常用漢字であることがあるが、『色葉字類抄』で合点がついている漢字か或いは第 1 掲出漢字に統一しようとする傾向が見られる。即ち、1 種の漢字表記に統一しようとする傾向が見られる。

本論では、動詞の漢字表記について検討してきたが、動詞の漢字表記と意味との関係は切り離して考えることができない存在であるので、第 3 章において個別の語を取り上げながら検討したい。

#### 【注】

- 1 山田俊雄「表記体・用字と文脈・用語との関連—今昔物語集宣命書きの中の特例に及ぶ覚書—」(『成城文芸』第 15 号、1958)による。
- 2 山口佳紀「今昔物語集表記法管見」(『国語と国文学』第 42 巻 12 号、1966)による。
- 3 峰岸明「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論—副詞の漢字表記を中心に—」(『日本語学』第 84 集、1971)、同氏の「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論—副

詞の漢字表記を中心に―〔二〕(『日本語学』第 85 集、1971) による。

- 4 佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』(1974、明治書院) による。
- 5 田中牧郎の『今昔物語集』(佐藤喜代治『漢字講座 5 古代の漢字とことば』、1988、明治書院) による。
- 6 青木美子『今昔物語集』における動詞「カヘル」の漢字表記について(『高知大国文』第 24 集、1993) による。
- 7 中田祝夫・峯岸明共編『色葉字類抄研究並びに索引』(1964、風間書房) による。
- 8 国語研究会監修『現代国語表記の基準』(第 6 次改定版)(2001、ぎょうせい) による。
- 9 例えば、他動詞「オトロカス」は、『色葉字類抄』に掲載されていないが、自動詞「オトロク」は、『色葉字類抄』に「驚<sub>オトロク</sub>」とあるように、掲載されているので、「驚」は「オトロク」と読むことが分かる。よって、他動詞「オトロカス」の漢字表記「驚」は『色葉字類抄』が編纂された当時で使われていることが推測される。このような処理を行って、考察したものを以下、「関連する語」と表現する。
- 10 「使、四方ニ相ヒ分レテ亡」(『今昔物語集』(3) 卷 11・11 慈覚大師、亘唐傳顯密法歸来語) とあるように、「ワカル」(分)と「ワカル」(別)とは、同じ語であることが判断される。

#### 【参考資料】

- 1 山田孝雄編『今昔物語集』(日本古典文学大系 22～26)(1959～1963) 岩波書店
- 2 馬淵和夫監修・有賀嘉寿子編『今昔物語集自立語索引』(笠間索引叢刊 39)(1982) 笠間書院
- 3 馬淵昌子[他]編『今昔物語集文節索引』(笠間索引叢刊 11-38)(1971～1981) 笠間書院
- 4 馬淵和夫監『今昔物語集漢字索引』(笠間索引叢刊 40)(1984) 笠間書院

## 第 2 節 『今昔物語集』の漢字表記が

### 「常用漢字表」の漢字表記と一致しない動詞

#### 1 はじめに

『今昔物語集』の漢字表記と、「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞の検討を通して、『今昔物語集』における 1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞の漢字表記には、当時の常用漢字が使用されていることが分かった。一方、「常用漢字表」に載っている動詞の漢字表記は、院政期に既に常用漢字として使用されていることが明らかになった。『今昔物語集』における 1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞と、「常用漢字表」における同じく 1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞との漢字表記は、『今昔物語集』では、1 種の常用漢字に統一させようとする傾向も見られる。

以上のように、第 1 節では、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記とが一致する動詞について見てきたが、本節では、『今昔物語集』に存しているが「常用漢字表」に載っていない動詞と、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と異なる動詞について取り上げる。

これらの動詞は、『色葉字類抄』でどのように掲載されているか、当時の常用漢字であるかどうか、その使用率はどうかについて検討する。

#### 2 『今昔物語集』に存しているが「常用漢字表」に載っていない動詞

『今昔物語集』に存しているが、「常用漢字表」に載っていない動詞は、現在で使用されなくなる（注 1）動詞と、現在でも使用されているが、「常用漢字表」に載っていない動詞との 2 種類がある。

##### 2・1 『今昔物語集』に存しているが現在で使用されなくなる動詞

『今昔物語集』に存している動詞が、現在で使用されなくなる動詞には、1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞と、1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞が存している。1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞は、以下の 188 語である。

アカム(赤) アカム(赤)[下二] アキラム(明) アザフ(叉) アソバカス(遊) アタタラカス(温) アタフ(能) アハク(旆) アヘタク(喘) アメフル(雨) アヤス(出) アユ(出) アユバス(歩) アラワカス(現) アヲバム(青) アヲム(青) イカラカス(噴)

イダカフ(抱) イダカラフ(抱) イダス(出) イタヅク(労) イヅ(出) イドマス(排)  
 イトヨル(繚) イナブ(辞)[四] イナブ(辞)[上二] イヌ(寝) イマス(坐) イヤス(賤)  
 イヨタツ(堅) ウソフク(吹) ウタテガル(転) ウツス[摸] ウム(続) オキツ(俸)  
 オコス(遣)[四] オコス(遣)[下二] オソフ(圧) オトナフ(音) オホス(生) オホホル  
 (溺) オロイユ(愈) カク[挙] カク[駕] カケラス(翔) カシク(炊) カヘス(耕) カ  
 ユガル(痒) カラグ(結) カラブ(辛) カラム(辛) カロシム(軽) キキサス(聞) キ  
 ホフ(競) キラメカス(鑑) クソヒル(痢) クソマル(屎) クチュガム(喝) クラム  
 (暗) クルハカス(狂) クルベク(転) クルメク(転) クロバム(黒) クロム(黒) ク  
 エツム(蹴) ケツ(消) ケヅル(梳) コヅル(剥) コボツ(壊) コボル(壊) コユ[凍]  
 コル(伐) サイギル[邀] サク(去) サク(榮) サフ(障) サブラフ(候) サラボフ(曝)  
 シコヅ(譜) シス(殺) シタタマル(拈) シタム(漉) シノビカス(忍) シハブク(咳)  
 シフ(誣) シフ(聾) シブク(洩) シマク(繞) シラグ(精) シラフ(知) シワム(皺)  
 スガム(眇) スク(捶) スグ(捶) スサマジガル(冷) スサム(遊) セタム(責) ソボ  
 ツ(霑) タウトガル(貴) タウブ(食) タガフ(替) タグフ(類) タブ(給) タラフ(垂)  
 タル(垂) チヂカム(握) チチボム(瘡) チハフ(護) チリボフ(散) ツカヌ(堰) ツ  
 カフ(突) ツカフ[仕] ツガフ(番)[四] ツガフ(番)[下二] ツヅマル(促) ツヅム(促)  
 ツツメク(当頭) ツツヤク(去々) ツヨル(強) テスル(拵) トバシル(迸) トブラフ  
 (訪) ドヨム(動) トヨモス(動) トラカス(蕩) トラフ[接] ナガラム(存) ナガラ  
 フ(准) ナヘグ(蹇) ナム(並) ニクガル(慄) ヌルム(温) ヌレバム(湿) ネブタガ  
 フ(寝) ノゾコル(除) ハグ(矯) ハグ(剥)[下二] ハダカル(開) ハダカル(跨) ハダ  
 ク(疥) ハタル(微) ハヂシラフ(恥) ハナサク(榮) ハナタル[離] バフ(奪) ハヘ  
 トブ(飛) ヒサグ(提) ヒタク(昊) ヒラム(平) ヒロゴル[弘] フクラカス(複) フ  
 スブ(熏) フリメク(振) ホノシル(髯知) ホフル(屠) ホラス(悦) ホラフ(旄) マ  
 カル(罷) マグサカフ(秣) マシマス(在) マシマス(坐) マシマス(御) マジラフ  
 (交) マツリゴツ(政) マナブ(学)[上二] マヌカラカス(免) マビロク(披) マミユ  
 (見) マロカス(丸) マロカル(丸) マキリサス(参) ミツ(満)[下二] ムカシメク  
 (昔) ムクメク(蠹) ムスボル(結) メグラカス(巡) メザマシガル(目) モス(喪)  
 モル(守) ヤマフ(病) ユラフ(汰) ユエブ(故) ヨコナハス(横) ヨコナハル(横)  
 ヨロボフ(透) ワガヌ(蟠) ワコツル(棍) ワシガル(惜)

以上の 188 語は現在では使用されなくなるが、『今昔物語集』に使用されている動詞で

ある。これらの語の漢字表記は、『色葉字類抄』でどのように掲載されているかについて調べたところ、49 語の漢字表記は、『色葉字類抄』における第 1 掲出漢字か或いは合点がついている漢字である。188 語の 26% 強しか占めていない。

『色葉字類抄』に掲載されていない語の漢字表記について、関連する語の漢字表記から推測されるのは、以下の 61 語である。「アカム(赤)」[四]と「アカム(赤)」[下二]の 2 語は「赤<sub>アカシ</sub>」(光彩 下 33 オ 4) から、「アキラム(明)」は「明<sub>アキラカニ</sub>」(辞字 下 38 オ 5) から、「アソバカス(遊)」は「遊<sub>アッパ</sub>」(人事 下 29 ウ 5) から、「アタタラカス(温)」は「暖<sub>アタハカニ</sub>」(辞字 下 38 ウ 3) から、「アユバス(歩)」は「歩<sub>アユム</sub>」(人事 下 29 ウ 6) から、「アラワカス(現)」は「現<sub>アラハス</sub>」(辞字 下 37 オ 4) から、「アヲバム(青)」と「アヲム(青)」の 2 語は「青<sub>アラシ</sub>」(光彩 下 33 オ 4) から、「イカラカス(唄)」は「唄<sub>イカル</sub>」(人事 上 7 オ 3) から、「イダカフ(抱)」と「イダカラフ(抱)」の 2 語は「抱<sub>イタク</sub>」(辞字 上 10 ウ 3) から、「イヤス(賤)」は「賤<sub>イヤシ</sub>」(人事 上 6 ウ 2) から、「ウタテガル(転)」は「転<sub>ウタ</sub>」(辞字 中 52 ウ 6) ②から、「オホス(生)」は「生<sub>オフ</sub>」(辞字 中 67 ウ 3) ②から、「カケラス(翔)」は「翔<sub>カケル</sub>」(辞字 上 102 ウ 7) から、「カユガル(痒)」は「痒<sub>カユシ</sub>」(人体 上 96 ウ 1) から、「カラブ(辛)」と「カラム(辛)」は「辛<sub>カラス</sub>」(辞字 上 102 ウ 6) から、「カロシム(軽)」は「軽<sub>カロシ</sub>」(辞字 上 104 オ 2) から、「キキサス(聞)」は「聞<sub>キクヌキコユ</sub>」(人事 下 57 ウ 4) から、「クソマル(尿)」は「尿<sub>クソミ</sub>」(人体 中 74 オ 2) ②から、「クルハカス(狂)」は「狂<sub>クルフ</sub>」(人事 中 74 ウ 1) ②から、「クルベク(転)」は「転<sub>クルメク</sub>」(人事 中 74 ウ 2) ②から、「クロバム(黒)」と「クロム(黒)」の 2 語は「黒<sub>クロシ</sub>」(光彩 中 76 ウ 1) ②から、「クエツム(蹴)」は「蹴<sub>クエル</sub>」(人事 中 7 ウ 8) ②から、「ケツ(消)」は「消<sub>ケス</sub>」(辞字 中 97 ウ 7) ②から、「コヅル(剥)」は「削<sub>コッ取也</sub>」(辞字 下 8 ウ 2) から、「コボル(壊)」は「毀<sub>コホツ</sub>」(辞字 下 49 オ 7) から、「サラボフ(曝)」は「曝<sub>サラス</sub>」(辞字 下 49 オ 5) から、「シノビカス(忍)」は「忍<sub>シノフ</sub>」(辞字 下 77 オ 1) から、「シラフ(知)」は「知<sub>シル</sub>」(辞字 下 75 ウ 7) から、「スサマジガル(冷)」は「冷<sub>スサマシ</sub>」(辞字 下 119 オ 2) から、「タグフ(類)」は「類<sub>タクヒ</sub>」(辞字 中 8 オ 7) ②から、「タラフ(垂)」は「垂<sub>タル</sub>」(辞字 中 6 ウ 3) ②から、「チリボフ(散)」は「散<sub>チル</sub>」(辞字 上 68 オ 4) から、「ツカフ(突)」は「突<sub>ツク</sub>」(辞字 中 25 ウ 1) ②から、「ツヨル(強)」は「強<sub>ツヨシ</sub>」(辞字 中 26 ウ 2) ②から、「トヨモス(動)」は「動<sub>トヨム</sub>」(辞字 上 60 オ 6) から、「ニクガル(慄)」は「慄<sub>ニクム</sub>」(人事 上 37 ウ 4) から、「ヌルム(温)」は「温<sub>ヌル</sub>」(辞字 上 78 オ 6) から、「ノゾコル(除)」は「除<sub>ノック</sub>」(辞字 中 60 ウ 6) ②から、「ハナタ

ル[離]」は「離ハナル」(辞字 上 29 ウ 2) から、「ヒラム(平)」は「平ヒラ」(名字 下 100 ウ 5) から、「ヒロゴル[弘]」は「弘ヒロシ」(辞字 下 96 ウ 2) から、「フリメク(振)」は「振フル」(辞字 中 105 オ 4) ②から、「ホラス(悦)」は「悦ホル」(人事 上 43 ウ 7) から、「マジラフ(交)」は「交マシナル」(辞字 中 94 オ 5) ②から、「マツリゴツ(政)」は「政マツリゴト」(人事 中 91 ウ 2) ②から、「マヌカラカス(免)」は「免マヌカル」(辞字 中 94 ウ 1) ②から、「マキリサス(参)」は「参マキル」(辞字 中 93 ウ 1) ②から、「ムカシメク(昔)」は「昔ムカシ」(天象 中 41 ウ 8) ②から、「ムスボル(結)」は「結ムスブ」(辞字 中 45 オ 7) ②から、「メグラカス(巡)」は「巡メクル」(辞字 下 59 ウ 2) から、「ヤマフ(病)」は「病ヤマヒ」(人体 中 84 オ 5) ②から、「ユラフ(汰)」は「汰ユル」(辞字 下 68 オ 4) から、「ユエブ(故)」は「故ユエ」(辞字 下 68 オ 4) から、「ヨコナハス(横)」と「ヨコナハル(横)」の 2 語は「横ヨコナフ」(辞字 上 117 オ 2) から、「ヲシガル(惜)」は「惜ヲシム」(辞字 中 68 ウ 2) ②から推測した。前述の『色葉字類抄』に掲載されている第 1 掲出漢字か或いは合点がついている漢字で表記されている 49 語を合わせて、188 語の 59%弱を占めている 110 語に当時の常用漢字が使用されていると考えられる。これは前節の『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞に 90%以上当時の常用漢字が使用されているのとは比べれば、低い数字である。

以上、『今昔物語集』に存しているが、現在で使用されなくなる 1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞を検討してきた。次は、『今昔物語集』に存しているが、現在で既使用されなくなる 1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している 31 語の動詞を検討する。語の漢字表記の並べ方は、語の使用順(多→少)で並べることとする。第 1 位に並べた漢字表記は、『今昔物語集』で使用数が多い漢字である。なお、同じ使用数の場合、巻順で並べる。また、語の右下にある小さな数字は、『色葉字類抄』における掲出されている漢字総数を示す。漢字の右下にある小数字は、その漢字が『色葉字類抄』における掲出順位か、或は関連する語の漢字表記は『色葉字類抄』における掲出順位を示す。『色葉字類抄』に掲載されていない語の右下に「×」を記す。これには、語自体が掲載されていない場合と、語は掲載されているが、漢字が掲載されていない場合とがある。語の後ろの②は、黒川本のことである。字の上にある「・」は前田本に付けられている合点である。

アカフ<sub>8</sub>(贖<sub>1</sub>・価<sub>×</sub>) アフ<sub>46</sub>(壺<sub>15</sub>・敢<sub>×</sub>) イヌ<sub>3</sub>(去<sub>1</sub>・往<sub>3</sub>) イマスカリ<sub>×</sub>(坐<sub>2</sub>・有<sub>×</sub>・座<sub>×</sub>)② イル<sub>4</sub>(沃<sub>1</sub>・濺<sub>×</sub>) オヅ<sub>13</sub>(怖<sub>3</sub>・恐<sub>2</sub>)② オハシマス<sub>×</sub>(御<sub>×</sub>・御坐<sub>×</sub>・御座<sub>×</sub>)



オハス<sub>x</sub>(御<sub>x</sub>・坐<sub>x</sub>・座<sub>x</sub>) オホス<sub>5</sub>(負<sub>5</sub>・課<sub>2</sub>)⑦ カカユ<sub>x</sub>(聞<sub>x</sub>・香<sub>x</sub>) カタヌグ<sub>5</sub>(編<sub>2</sub>・祖<sub>1</sub>) カツク<sub>x</sub>(被<sub>x</sub>・纏<sub>x</sub>)[四] カツグ<sub>x</sub>(被<sub>x</sub>・纏<sub>x</sub>)[下二] キタナム<sub>x</sub>(穢<sub>1</sub>・攘<sub>x</sub>・汗<sub>x</sub>) キヨマハル<sub>x</sub>(浄<sub>1</sub>・清<sub>2</sub>) クジル<sub>3</sub>(挾<sub>1</sub>・棲<sub>x</sub>・排<sub>2</sub>)⑦ タシブ<sub>x</sub>(嗜<sub>1</sub>・耽<sub>x</sub>)⑦ タマフ<sub>19</sub>(給<sub>1</sub>・賜<sub>2</sub>)⑦ ナツム<sub>7</sub>(泥<sub>1</sub>・乏<sub>x</sub>)⑦ ニヨブ<sub>4</sub>(吟<sub>1</sub>・呻<sub>4</sub>) ネタガル<sub>x</sub>(妬<sub>6</sub>・嫉<sub>2</sub>)⑦ ネブル<sub>7</sub>(舐<sub>1</sub>・舐<sub>2</sub>)⑦ ノル<sub>4</sub>(罵<sub>1</sub>・冒<sub>2</sub>)⑦ ハカリゴツ<sub>x</sub>(謀<sub>1</sub>・計<sub>2</sub>) マウサク<sub>32</sub>(申<sub>1</sub>・言<sub>4</sub>・云<sub>14</sub>)⑦ マヒナフ<sub>4</sub>(賂<sub>2</sub>・賄<sub>1</sub>)⑦ マキラス<sub>x</sub>(参<sub>1</sub>・進<sub>4</sub>)⑦ マロバス<sub>x</sub>(丸<sub>x</sub>・辻<sub>x</sub>) マロブ<sub>6</sub>(丸<sub>x</sub>・転<sub>4</sub>・辻<sub>2</sub>)⑦ ムツブ<sub>6</sub>(睦<sub>3</sub>・陸<sub>x</sub>・昵<sub>1</sub>)⑦ ヨバフ<sub>14</sub>(喚<sub>1</sub>・呼<sub>10</sub>)

以上の 31 語のうち、「アフ」「カタヌグ」「タシブ」「ナツム」「マヒナフ」の 5 語において、2 種以上の漢字表記がともに使用数が少ない。他の 26 語で使用数の多い 1 種の漢字表記が、『色葉字類抄』に掲出されている第 1 掲出漢字か或いは合点がついている漢字表記であるのは、10 語で 26 語の 38%強を占めている。『色葉字類抄』に掲載されていないが、関連する語の漢字表記から推測されるのは、「キタナム」「穢<sub>キタナシ</sub>」(辞字 下 60 オ 7) から、「キヨマハル」は「浄<sub>キヨシ</sub> 及政反 又キヨム 清<sub>セイ</sub> 七情反 又キヨム (他 21 字略)」(辞字 下 60 オ 3) から、「タシブ」は「嗜<sub>タシナム</sub>」(人事 中 4 オ 4) ⑦から、「ハカリゴツ」は「謀<sub>ハカリ</sub> 計 (他 27 字略)」(人事 上 25 ウ 2) から、「マキラス」は「参<sub>マイル</sub> 倉社反 又マウツ 入進 已上同」(辞字 中 93 ウ 1) ⑦から、5 語に使用されている漢字表記は『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが考えられる。上述した 10 語を合わせて、15 語で 58% 弱を占めている語の漢字表記に、当時の常用漢字が使用されていることが考えられる。これは前節の『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞 (1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞) に 90% 以上当時の常用漢字が使用されているのと比べれば、低い数字である。

「常用漢字表」の漢字が選定された当時、「日本基本漢字」「雑誌 90 種調査」「新聞調査」などの資料における漢字の使用率が高い字が選ばれたこと (注 2) により、『色葉字類抄』が編纂された当時も同じ手段が取られたと考えられる。以上の語は、他の資料を検討していないが、『今昔物語集』で、第 1 節の動詞の漢字表記の使用と比べると、全体的に使用率が低いのは、確かである。よって、他の資料の使用率も低い可能性がある。恐らく、『色葉字類抄』が編纂された当時もこういう状態であったのだろう。従って、これらの語の漢字表記は、語の使用が少なくなるため、漢字表記も次第に消えてしまうのだろう (注 3)。

## 2・2 現在でも使用されているが、「常用漢字表」に載っていない動詞

『今昔物語集』に使用されており、現在でも使用されているが、「常用漢字表」に載っていない動詞には、1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞と、1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞が存している。『今昔物語集』で 1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞は、以下の 141 語である（注 4）。

アラガフ(諍) アガム(崇) アザケル(嘲) アソバス(遊) アハレガル(哀) アフグ(扇) アブル(炮) アヘグ(喘) イソガス(急) イトフ(厭) イロメク(色) ウカス(浮) ウス(失) ウズクマル(隣) ウツフス(低) ウヅモル(埋) ウナダル(垂) ウム(膿) オゴル(寵) オヨガス(泳) オチブル(落) オビユ(愕) オモネル(恤) オトナブ(長) カカス(闕) カカヤカス(暉) カク(搔) カシツク(傳) カナフ(叶)[下二] カフ(牧) カブル(被) カヨハス(通) キタナガル(穢) キバム(黄) キラメク(鏘) ククル(括) クチバシル(憤) クツログ(怵) クヤシガル(悔) クラガル(暗) クラマス(暗) クエル(蹴) コグ(漕) コシラフ(誘) コゾル(挙) コトナル(異) コトハル(裁) コヒシガル(恋) コブ(媚) コボス(泛) コボル(泛) コボル(壊) コモル(籠) ササメク(私語) サヘヅル(轉) サラス(曝) シタタム(拈) シノグ(凌) シボム(萎) シラス(知)[四] シラス(知)[下二] シラム(白) ス(為) スクム(座)[下二] ススル(飲) ソシル(謗) ソバム(喬) ソビフ(聳) ソム(染) ソル(剃) タガフ(違)[四] タガフ(違)[下二] タキシム(焼) タクス(託) タタフ(湛) タタル(崇) タフトガル(貴) タバヌ(束) タヒラグ(平) タマハス(給) タメラフ(踉蹌) タユム(緩) タワム(撓) ツイバム(啄) ツカサドル(主) ツマヅク(躓) トガム(咎) トキメク(時) トドロカス(動) トラス(取) トロク(融) ナビク(靡) ナム(嘗) ナユ(萎) ナラハス(習) ニホハス(匂) ニホフ(匂) ノク(去) ノク(去)[下二] ノタマフ(宣) ハグ(剥) ハス(馳) ハツ(畢) ハバカル(憚) ハフ(這) ハベリ(侍) ハヤル(早) ヒガム(僻) ヒザマツク(跪) ヒネル(捻) ヒビカス(響) フク(葺) フクマス(含) フサガル(塞) フサグ(冥) フサグ(塞) ホコロブ(綻) ホシガル(欲) ホトバシル(迸) マウヅ(詣) マク(蒔) マクハフ(交) マジロク(瞬) マタガル(跨) マネブ(学) ミダル(乱) ムサボル(貪) ムシル(揃) ムス(噓) ムラガル(群) メグラス(運) メデタガル(目出) モタス(持) モテアソブ(翫) ヤル(遣) ユガム(喝)[四] ユガム(喝)[下二] ユヅ(茹) ワキマフ(弁) ワブ(侘) ワラハカス(咲)

以上の 141 語は、『今昔物語集』に使用され、現在でも使用されているが、「常用漢字表」

に載っていない動詞である。

これらの動詞の漢字表記は、院政期の常用漢字であるかどうかについて、『色葉字類抄』を参考し調べたところ、141 語のうち、51%強を占めている 72 語の漢字表記は、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字である。『色葉字類抄』に掲載されていない語の漢字表記でも、次のような語は、関連する他の語（注 5）が掲載されているので、参考としたい。

「アソバス(遊)」は「遊<sub>アッ</sub>」(人事 下 29 ウ 5) から、「イソガス(急)」は「急<sub>イッ</sub>」(辞字 上 10 ウ 7) と、「イロメク(色)」は「色<sub>イロ</sub>」(光彩 上 9 オ 3) から、「ウカス(浮)」は「浮<sub>ウカフ</sub>」(辞字 中 52 オ 4) ②から、「ウス(失)」は「失<sub>ウシナフ</sub>」(辞字 中 52 ウ 8) ②、「ウヅモル(埋)」は「埋<sub>ウツム</sub>」(地儀 中 52 ウ 1) ②、「オヨガス(泳)」は「泳<sub>オヨク</sub>」(辞字 中 67 ウ 5) ②から、「オチブル(落)」は「落<sub>オツ</sub>」(辞字 中 67 ウ 1) ②から、「カカス(闕)」は「闕<sub>カク</sub>」(人事 上 101 ウ 6) から、「カブル(被)」は「被<sub>カウフル</sub>」(辞字 上 104 ウ 7) から、「カヨハス(通)」は「通<sub>カヨフ</sub>」(辞字 上 104 オ 6) から、「キタナガル(穢)」は「穢<sub>キタナシ</sub>」(辞字 下 60 オ 1) から、「キバム」(黄)は「黄<sub>クワウ・キナリ</sub>金彩 胡光反」(光彩 下 58 ウ 6)から、「クヤシガル(悔)」は「悔<sub>クユ</sub>」(人事 中 74 オ 6) ②から、「コヒシガル(恋)」は「恋<sub>コヒ</sub>」(人事 下 5 オ 2) から、「ササメク(私語)」は「私語<sub>ササメキコト</sub>」(豊字 下 53 ウ 3) から、「シラス(知)」[四]と「シラス(知)[下二]」の 2 語は「知<sub>シル</sub>」(辞字 下 75 ウ 7) から、「シラム(白)」は「白<sub>シロシ</sub>」(光彩 下 75 オ 3) と、「タフトガル(貴)」は「貴<sub>タフトフ</sub>」(人事 中 3 ウ 6) ②と、「タヒラグ(平)」は「平<sub>タヒラカ</sub>」(辞字 中 9 オ 4) ②から、「トキメク(時)」は「時<sub>トキ</sub>」(名字 上 65 オ 2) から、「トラス(取)」は「取<sub>トル</sub>」(辞字 上 58 ウ 2) から、「ナラハス(習)」は「習<sub>ナラフ</sub>」(人事 中 34 オ 6) ②から、「ニホハス(匂)」は「匂<sub>ニオフ</sub>」(辞字 上 39 ウ 3) から、「ノタマフ(宣)」は「宣<sub>ノタフ</sub>」(人事 中 59 ウ 1) ②と、「ハヤル(早)」は「早<sub>ハヤシ</sub>」(辞字 上 30 オ 1) から、「ヒビカス(響)」は「響<sub>ヒビク</sub>」(辞字 下 97 オ 1) から、「フクマス(含)」は「含<sub>フクム</sub>」(辞字 中 105 オ 3) ②から、「ホシガル(欲)」は「欲<sub>ホッス</sub>」(辞字 下 46 オ 6) と、「メデタガル(目出)」は「目出<sub>メテタシ</sub>」(豊字 下 60 オ 8) ②の 31 語の漢字表記である。

これら関連する語と、上述した『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字か或は合点がついている 72 語を合わせて、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字が使用されているのは、103 語で 73%強を占めている。

この中で、サ変動詞「ス」の漢字表記「為」は、『色葉字類抄』に「擬<sub>ス</sub> スル 将欲為<sub>遠支反</sub>

作<sub>已上同</sub>」(辞字 下 117 ウ 2) とあるように、「為」に合点がついているので、当時の常用漢字であることが分かる。「仕」はサ変動詞の漢字表記として、前田本『色葉字類抄』に掲載されていない。しかし、『今昔物語集』で、サ変動詞連用形について、「仕」が表記されたかどうか疑問が残る。この「仕」は、サ変動詞「ス」の漢字表記であるか、黒川本『色葉字類抄』に掲載されている「仕<sub>ツカフマツル</sub>事侍奉賞<sub>已上同</sub>」(人事 中 23 オ 8) とあるように、「ツカフマツル」の漢字表記であるかについて、第 3 章の第 2 節で検討する。

以上、『今昔物語集』に使用され、現代でも使用しているが、「常用漢字表」に載っていない 1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞の漢字表記について検討してきた。次は『今昔物語集』に使用され、現代でも使用しているが、「常用漢字表」に載っていない 1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している 54 語の動詞を検討する。

アツラフ<sub>6</sub>(詠<sub>1</sub>・属<sub>x</sub>) アナヅル<sub>17</sub>(蔑<sub>1</sub>・慢<sub>5</sub>) イザナフ<sub>4</sub>(倡<sub>3</sub>・率<sub>2</sub>・誘<sub>1</sub>) イタハル<sub>13</sub>(勞<sub>1</sub>・営<sub>x</sub>) イフ<sub>7</sub>(云<sub>6</sub>・謂<sub>1</sub>) イヤス<sub>x</sub>(噫<sub>x</sub>・愈<sub>1</sub>・療<sub>7</sub>) イユ<sub>9</sub>(噫<sub>x</sub>・愈<sub>1</sub>) ウガツ<sub>8</sub>(穿<sub>1</sub>・窟<sub>x</sub>・鑿<sub>2</sub>) ウヅム(埋<sub>1</sub>・填<sub>12</sub>)[四] ウヅム<sub>x</sub>(埋<sub>1</sub>・填<sub>12</sub>)[下二] カガマル<sub>12</sub>(屈<sub>1</sub>・曲<sub>2</sub>) カガム<sub>12</sub>(曲<sub>2</sub>・屈<sub>1</sub>) カグ<sub>x</sub>(聞<sub>x</sub>・香<sub>x</sub>) カナフ<sub>38</sub>(叶<sub>1</sub>・合<sub>3</sub>・称<sub>6</sub>・陪<sub>4</sub>) カム<sub>4</sub>(囁<sub>2</sub>・咋<sub>1</sub>) クハス<sub>x</sub>(食<sub>1</sub>・咋<sub>x</sub>・噉<sub>3</sub>) クハフ<sub>x</sub>(舐<sub>x</sub>・咋<sub>x</sub>・歌<sub>x</sub>・噉<sub>3</sub>) クボム<sub>7</sub>(窪<sub>1</sub>・陷<sub>x</sub>) ササグ<sub>5</sub>(捧<sub>1</sub>・擎<sub>2</sub>) ススグ<sub>14</sub>(漱<sub>10</sub>・瀨<sub>5</sub>・濯<sub>1</sub>) タク<sub>10</sub>(焼<sub>1</sub>・燃<sub>3</sub>) タタク<sub>11</sub>(叩<sub>x</sub>・扣<sub>10</sub>) タダル<sub>4</sub>(爛<sub>2</sub>・乱<sub>x</sub>・爛<sub>x</sub>) タバカル<sub>7</sub>(謀<sub>6</sub>・撻<sub>x</sub>) ツカム<sub>14</sub>(齔<sub>1</sub>・抓<sub>x</sub>) トドマル<sub>12</sub>(留<sub>1</sub>・止<sub>x</sub>) トドム<sub>11</sub>(止<sub>1</sub>・留<sub>x</sub>) トモス<sub>4</sub>(燃<sub>1</sub>・灯<sub>x</sub>・燈<sub>x</sub>) ナヅ<sub>11</sub>(撫<sub>1</sub>・摩<sub>3</sub>) ニギハフ<sub>38</sub>(賑<sub>1</sub>・脍<sub>x</sub>) ニラム<sub>8</sub>(毗<sub>5</sub>・眅<sub>4</sub>) ヌラス<sub>9</sub>(湿<sub>2</sub>・潤<sub>5</sub>) ヌル<sub>9</sub>(湿<sub>2</sub>・濡<sub>x</sub>・濯<sub>3</sub>) ネタム<sub>10</sub>(妬<sub>1</sub>・嫉<sub>2</sub>) ノゴフ<sub>17</sub>(巾<sub>7</sub>・拭<sub>1</sub>) ノゾク<sub>15</sub>(望<sub>1</sub>・臨<sub>2</sub>・睨<sub>x</sub>) ノロフ<sub>4</sub>(咀<sub>1</sub>・呪<sub>x</sub>・詛<sub>x</sub>) ハム<sub>7</sub>(飡<sub>5</sub>・噉<sub>x</sub>・食<sub>1</sub>) ハラム<sub>11</sub>(孕<sub>2</sub>・懷<sub>6</sub>) ハル<sub>3</sub>(腫<sub>1</sub>・瘡<sub>3</sub>) フラス<sub>4</sub>(雨<sub>1</sub>・降<sub>2</sub>) フルマフ<sub>1</sub>(翔<sub>1</sub>・容止<sub>x</sub>) ホユ<sub>10</sub>(吠<sub>1</sub>・吼<sub>x</sub>) ホル<sub>5</sub>(悅<sub>1</sub>・旄<sub>x</sub>) マドハス<sub>12</sub>(迷<sub>1</sub>・燒<sub>x</sub>) マトフ<sub>14</sub>(纏<sub>1</sub>・絡<sub>5</sub>) ムセブ<sub>3</sub>(噎<sub>1</sub>・哽<sub>x</sub>) メグラス<sub>50</sub>(廻<sub>1</sub>・遶<sub>50</sub>) メヅ<sub>x</sub>(目出<sub>1</sub>・愛<sub>x</sub>) モム(糙<sub>x</sub>・攤<sub>7</sub>・攢<sub>x</sub>・輾<sub>5</sub>) ヤス<sub>11</sub>(瘦<sub>1</sub>・瘠<sub>2</sub>) ユヅ<sub>9</sub>(茹<sub>5</sub>・茹<sub>1</sub>) ヨミガヘル<sub>3</sub>(活<sub>3</sub>・蘇<sub>1</sub>・甦<sub>x</sub>) キル<sub>5</sub>(将<sub>1</sub>・率<sub>4</sub>)

以上の 54 語のうち 40 語 (74% 強) において、『今昔物語集』における使用数の 1 位の漢字表記が、『色葉字類抄』に掲載されており、かつ合点がついている漢字かあるいは第 1 掲出漢字である。「クハス」「メヅ」の 2 語は掲載されていないが、関連する「食<sub>ッ</sub>」(人事 中 74 オ 7) ②と「目出<sub>メテタシ</sub>」(豊字 下 60 オ 8) ②の漢字表記「食」「目出」がとも

に、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字であることから、当時の常用漢字であることが分かる。このようにして、54 語のうち、78%弱を占めている 42 語の最も多く使用されている漢字表記は、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが明らかになった。

一方、「常用漢字表」に載っていないのは、時代の変遷について、語の使用率が次第に少なくなるため、特に、「常用漢字表」(注 6)の漢字が選定された当時、使用されている資料の中で、これらの語の漢字表記の使用率が低いため、「常用漢字表」に載っていなかったのだろうと推測される。

以上、『今昔物語集』に存しているが、「常用漢字表」に載っていない動詞の漢字表記を検討してきた。現在で使用されなくなる動詞の場合、1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞でも、1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞でも、いずれも動詞の漢字表記に、『色葉字類抄』における第 1 掲出漢字か或いは合点がついている漢字が使用されている比率が低いと言える。

一方、現在でも使用されている動詞の場合、1 語に 1 種の漢字が対応している動詞の漢字表記でも、1 語に 2 種以上の漢字が対応している動詞の漢字表記でも、動詞に使用されている漢字表記は、『色葉字類抄』における第 1 掲出漢字か或いは合点がついている漢字が多い。

### 3 『今昔物語集』の漢字表記が「常用漢字表」の漢字表記と異なる動詞

『今昔物語集』に挙げられている動詞の漢字表記が、「常用漢字表」に載せている動詞の漢字表記と異なるものが存している。これらの漢字表記が、『色葉字類抄』でどのように掲載されているか、当時の常用漢字であるかどうかを検討する。

#### 3・1 1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞

『今昔物語集』に挙げられている動詞の漢字表記が、「常用漢字表」で別の漢字で表記されて、1 語に 1 種の漢字表記が対応している動詞は以下の 39 語である。→の前の漢字は、『今昔物語集』の漢字表記であるのに対して、→の後の漢字表記は「常用漢字表」の漢字表記である。

イコフ(息→憩) イマシム(誠→戒) イヤシム(賤→卑) ウトム(疎→疎) ウナガス(催→促) ウルホス(霑→潤) オヨグ(游→泳) カス(借→貸) カル(刈→刈) カゾフ(計→数) カナヅ(乙→奏) カル(仮→借) カル(駈→駈) ケガス(穢→汚) コガ

ス(焦→焦) コム(籠→込) サク(割→裂)[下二] サトス(怪→諭) スグル(勝→優)  
 スウ(居→据) スズム(冷→涼) タクハフ(貯→蓄) ツヅク(次→続)[下二] ツツム  
 (裏→包) トク(蕩→溶) ナゴム(透→和) ナル(馴→慣) ハヒイル(這入→入) ヒ  
 ロマル(弘→広) ヒロム(弘→広) フク(深更→更)[下二] マギラハス(交→紛) マ  
 ギル(交→紛) マドフ(迷→惑) マハル(廻→回) ヤスマル(息→休) ヤハラグ(冥  
 →和) ワル(破→割) ワル(破→割)[下二]

39 語のうち、44%弱を占めている 17 語の漢字表記は、『色葉字類抄』に掲載されている  
 第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字である。『色葉字類抄』に掲載されていない語の  
 漢字表記について、「イヤシム(賤)」は「賤<sub>ィヤシ</sub>」(人事 上 6 ウ 2) から、「スズム(冷)」  
 は「冷<sub>ス、シ</sub>」(天象 下 113 オ 6) から、「ヒロマル(弘)」と「ヒロム(弘)」の 2 語は「廣<sub>ヒ  
 ロシ</sub>宏弘(他 19 字略)」(辞字 下 96 ウ 2) から、4 語に用いられている漢字表記が当時の  
 常用漢字であると推測される。このようにして、21 語で 54%弱を占めている語の漢字表記  
 に、当時の常用漢字が使用されていることが分かる。

「ハイル」という語は、『今昔物語集』に存しているが、複合語「ハヒイル」(這入)とし  
 て使われている。「入」は「イル」[四]と「イル」[下二]の漢字表記として、使用されてい  
 る。「這入」から「入」への変化の時期・要因・意味とのかかわりについて、第 3 章の第 3  
 節で検討する。

### 3・2 1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞

『今昔物語集』に挙げられている動詞の漢字表記が、「常用漢字表」で別の漢字で表記  
 されている 1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞は以下の 22 語である。語の数  
 字・符号の意味については、前述した現在で既に使用されなくなる 1 語に 2 種以上の漢字  
 表記が対応している動詞と同じである。

アワツ 8(周<sub>×</sub>・澆<sub>1</sub>・周章<sub>×</sub>・遽<sub>3</sub>・忿<sub>×</sub>→慌) イロドル 3(綵<sub>3</sub>・色取<sub>×</sub>→彩) オドス 4(恐  
<sub>×</sub>・怖<sub>4</sub>→脅) オトヅル 1(音信<sub>×</sub>・音<sub>×</sub>→訪) オビヤカス 9(愕<sub>4</sub>・劫<sub>6</sub>→脅) カカグ 6(褰<sub>3</sub>・挑<sub>1</sub>→掲) カガヤク 13(耀<sub>2</sub>・曜<sub>3</sub>→輝) カムガフ 16(勘<sub>1</sub>・撿<sub>2</sub>・校<sub>4</sub>→考) クモル  
 8(陰<sub>1</sub>・暗<sub>×</sub>→曇)② シタガフ 52(随<sub>1</sub>・順<sub>6</sub>→従)[下二] シボル 10(洩<sub>×</sub>・搆<sub>1</sub>→絞) シ  
 ム 10(卜<sub>2</sub>・点<sub>×</sub>→占) ソソク 24(灑<sub>4</sub>・灌<sub>2</sub>→注)② タダス 46(直<sub>11</sub>・紕<sub>1</sub>・格<sub>×</sub>→正)②  
 タトフ 19(譬<sub>2</sub>・喩<sub>1</sub>→例)② トグ 7(鋭<sub>1</sub>・磨<sub>2</sub>・鏡<sub>×</sub>→研) ナガム 5(長<sub>×</sub>・詠<sub>1</sub>→眺)②  
 ニギル 14(捲<sub>×</sub>・拳<sub>1</sub>・把<sub>11</sub>・搏<sub>14</sub>→握) ノブ 16(陳<sub>16</sub>・宣<sub>4</sub>・叙<sub>8</sub>・申<sub>1</sub>→述)② フクル



った。これは第 1 節で検討した結果と一致する。

『今昔物語集』に挙げられている動詞の漢字表記と、「常用漢字表」に載せられている動詞の漢字表記とが、両者異なる場合については、動詞に使用されている漢字表記は、半分程度しか当時の常用漢字が使用されていないことが分かった。このことから、『色葉字類抄』に掲載されている常用漢字の一部が、『今昔物語集』が編纂されている際、既に表記が変化しており、使用されなくなっている可能性がある一方、混乱し使用し続けられている可能性もある。これらの語の漢字表記が後に時代に従い、変わりやすい語の漢字表記となっていると考えられる。

本論は、『今昔物語集』の動詞の漢字表記を中心に検討したが、『今昔物語集』にないが、「常用漢字表」に載っている動詞が多く存している。これらの動詞は、『今昔物語集』に使用されていないが、中世で存しているかどうか、どの漢字表記は、どのように使用されているのか、なかった動詞あるいはなかった動詞の漢字表記は、いつの時代から使われ始めたのかは、今後の課題として取り上げたい。

#### 【注】

- 1 現在で使われなくなる語については、地域差・個人差・文体などで、現在で全く使用されないわけではない。
- 2 藤原宏著『注解 常用漢字表 新しい国語表記』（1981、ぎょうせい）による。
- 3 個人差・地域差などによって、全く消えてしまうわけではない。
- 4 表記上、第 1 節の 38 頁（上から 4 行目～11 行目）を参照する。
- 5 関連する語について、第 1 節の注 9 に同じ。
- 6 注 2 に同じ。



### 第 3 節 『今昔物語集』の漢字表記が

#### 「常用漢字表」の漢字表記と一部一致する動詞

##### 1 はじめに

『今昔物語集』には、2 種類以上の漢字で表記される語が、多く存している。それらの語には、使用数が 1 位の漢字表記が現在に残っている語と、使用数が 2 位以後の漢字表記が現在に残っている語、2 種以上の漢字表記がともに多く使用されている語と、2 種以上の漢字表記がともに使用数が少ない語のように、様々である。

『今昔物語集』において、複数の漢字表記がある副詞に関しては、その中の 1 種の漢字表記が多用され、当時の常用漢字であろうという指摘がある（注 1）、『今昔物語集』の 1 訓に 2 種以上の漢字が使用されている形容詞の漢字表記について、仮名表記より借字表記、借字表記より正字表記に統一しようとする傾向が見られ、また、正字表記に用いられる漢字表記が当時の常用漢字群に属しているという論もある（注 2）。

『今昔物語集』における 1 語に 2 種以上の漢字が使用されている動詞には、以上の形容詞・副詞の特徴があるかどうかについて、『色葉字類抄』（注 3）を参考にしながら、詳しく検討する。『色葉字類抄』に漢字の読みがある一方、合点がついている漢字、掲載順位が上位の漢字が当時の常用漢字であると言われているので、『今昔物語集』における動詞の漢字表記が、『色葉字類抄』でどのような順位であるかを確認したうえで、『今昔物語集』に使用されている動詞の漢字表記が、当時の常用漢字かどうか、検討する。このようにして、『今昔物語集』に使用されている漢字と現在の「常用漢字表」（注 4）との比較を通して、古代の動詞の漢字表記と現代の動詞の漢字表記との差異を知ることができる。

方法として、以下のように検討することにする。

- 『今昔物語集』で使用数 1 位の漢字表記が「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞
- 『今昔物語集』で使用数 2 位以下の漢字表記が「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞
- 『今昔物語集』に 2 種以上の漢字表記のどちらかが「常用漢字表」で 1 種の漢字表記に統一される動詞
- 『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一部一致する動詞

本論では、『色葉字類抄』を主に参照するが、『色葉字類抄』にない語については、『類聚名義抄』(注 5)を参考する。表記上で、全体として、片仮名で語を上げ、( )の漢字は『今昔物語集』に使用される語の漢字表記である。( )の漢字の上の「・」が、『色葉字類抄』における漢字の合点である。数字については、片仮名のすぐ後の数字は、『色葉字類抄』におけるその語の総字数である。語の後に来る㊦について、「前田本」の欠損部分のため、「黒川本」で補ったことを示す。なお、各漢字の後の数字は、『色葉字類抄』におけるその漢字の掲出順位を示す。『色葉字類抄』に四段活用と下二段活用が明示されていないため、『今昔物語集』における四段活用と下二段活用の動詞が、『色葉字類抄』に存している語として扱うことにする。また、『今昔物語集』における動詞の漢字表記の並べ方について、漢字の使用率がすぐ分かるように、使用率の順(多→少)で並べることにするが、同じ使用率の語としては、その出現した巻順に並べることにする。また、「アヤシブ」「アヤシム」のように、音韻変化を起こした語は、1 語として扱うことにする。「オトス」のように、『色葉字類抄』に掲載されていないが、関連する「オツ」から、「オトス」の漢字表記として使用されていることが推測される語の表記は、「オトス<sub>x</sub>(落<sub>1</sub>・墮<sub>2</sub>→落)」のように、「オトス」の右下に「x」をつけたが、( )の漢字の後の数字は、関連する語が『色葉字類抄』における掲出順位であることを示す。

## 2 『今昔物語集』使用数 1 位の漢字表記が「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞

『今昔物語集』において、1 種の漢字表記が最も多く使用されているのに対して、他の漢字表記が僅かしか使用されていない動詞と、最も多く使用されている表記より他の表記が遥かに少ない動詞が 86 語存している。この 86 語の最も多く使用されている漢字表記が、「常用漢字表」の動詞の漢字表記と一致する。それでは、これらの動詞の漢字表記が、『色葉字類抄』でどのように掲載されているか、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であるかどうかを検討する。

アヤシブ<sub>x</sub>(恠<sub>2</sub>・怪<sub>2</sub>・奇<sub>1</sub>→怪) アヤシム<sub>x</sub>(恠<sub>2</sub>・怪<sub>2</sub>・奇<sub>1</sub>→怪) アタル<sub>41</sub>(当<sub>1</sub>・宛<sub>13</sub>・属<sub>x</sub>・壬<sub>x</sub>→当) アヅカル<sub>15</sub>(預<sub>1</sub>・事<sub>11</sub>・備<sub>15</sub>→預) アツマル<sub>70</sub>(集<sub>1</sub>・聚<sub>2</sub>→集) アハレブ<sub>21</sub>(哀<sub>1</sub>・憐<sub>2</sub>・愍<sub>3</sub>→哀) アラタム<sub>12</sub>(改<sub>1</sub>・更<sub>12</sub>→改) イダク<sub>6</sub>(抱<sub>2</sub>・懷<sub>1</sub>→抱) イタル<sub>87</sub>(至<sub>1</sub>・詣<sub>13</sub>・達<sub>66</sub>・到<sub>4</sub>→至) イトナム<sub>17</sub>(營<sub>1</sub>・勞<sub>4</sub>→營) イドム<sub>5</sub>(挑<sub>x</sub>・排<sub>x</sub>→挑) ウゴカス<sub>x</sub>(動<sub>1</sub>・震<sub>19</sub>→動)㊦ ウツス<sub>18</sub>(移<sub>2</sub>・遷<sub>1</sub>→移)㊦ ウツル<sub>18</sub>(移

2・遷<sub>1</sub>→移)⑦ ウラナフ<sub>x</sub>(占<sub>x</sub>・ト<sub>x</sub>→占) ウラム<sub>34</sub>(恨<sub>2</sub>・怨<sub>7</sub>→恨)⑦ オコタル<sub>24</sub>(怠<sub>1</sub>・退<sub>3</sub>・緩<sub>8</sub>→怠) オトス<sub>x</sub>(落<sub>1</sub>・墮<sub>2</sub>→落) オツ<sub>23</sub>(落<sub>1</sub>・墮<sub>2</sub>→落)⑦ オトロフ<sub>12</sub>(衰<sub>1</sub>・悴<sub>x</sub>→衰)⑦ オモフ<sub>30</sub>(思<sub>1</sub>・意<sub>22</sub>・欲<sub>10</sub>・慮<sub>9</sub>・念<sub>6</sub>→思)⑦ カタブク<sub>27</sub>(傾<sub>1</sub>・低<sub>x</sub>→傾) カタム<sub>x</sub>(固<sub>x</sub>・堅<sub>x</sub>→固) カタラフ<sub>4</sub>(語<sub>1</sub>・談<sub>2</sub>→語) カナシブ<sub>29</sub>(悲<sub>1</sub>・哀<sub>7</sub>→2 悲) カフ<sub>14</sub>(飼<sub>1</sub>・養<sub>3</sub>→飼) カフ<sub>x</sub>(買<sub>x</sub>・賈<sub>x</sub>→買) カル<sub>12</sub>(枯<sub>1</sub>・乾<sub>11</sub>→枯) キル<sub>37</sub>(切<sub>1</sub>・斬<sub>3</sub>・伐<sub>6</sub>・斫<sub>37</sub>・断<sub>x</sub>・割<sub>21</sub>・剪<sub>4</sub>→切) キル<sub>7</sub>(着<sub>1</sub>・服<sub>3</sub>・被<sub>2</sub>→着) クダク<sub>25</sub>(碎<sub>7</sub>・摧<sub>1</sub>→碎)[下二]⑦ クダル<sub>19</sub>(下<sub>1</sub>・降<sub>2</sub>→下)⑦ クフ<sub>25</sub>(食<sub>1</sub>・咋<sub>x</sub>・噉<sub>3</sub>→食)⑦ クル<sub>7</sub>(暮<sub>4</sub>・暗<sub>x</sub>・晩<sub>1</sub>→暮)⑦ クルシブ<sub>12</sub>(苦<sub>1</sub>・困<sub>2</sub>→苦) コロス<sub>19</sub>(殺<sub>1</sub>・害<sub>2</sub>→殺) サグル<sub>5</sub>(探<sub>1</sub>・摸<sub>x</sub>・搜<sub>2</sub>→探) サス<sub>17</sub>(刺<sub>4</sub>・螫<sub>8</sub>→刺) サトル<sub>24</sub>(悟<sub>2</sub>・覺<sub>1</sub>・達<sub>x</sub>・識<sub>5</sub>・智<sub>15</sub>→悟) サム<sub>7</sub>(覺<sub>3</sub>・悟<sub>4</sub>・醒<sub>1</sub>・寤<sub>5</sub>→覺) サル<sub>33</sub>(去<sub>1</sub>・避<sub>3</sub>→去) シヅム<sub>15</sub>(沈<sub>1</sub>・沒<sub>6</sub>→沈) シル<sub>15</sub>(知<sub>1</sub>・識<sub>2</sub>→知) スクフ<sub>17</sub>(救<sub>1</sub>・濟<sub>2</sub>→救) スム<sub>13</sub>(住<sub>1</sub>・栖<sub>3</sub>・棲<sub>4</sub>→住) セム<sub>50</sub>(責<sub>2</sub>・逼<sub>1</sub>・迫<sub>3</sub>→責) ソムク<sub>31</sub>(背<sub>1</sub>・戾<sub>13</sub>→背)⑦ タスク<sub>42</sub>(助<sub>2</sub>・資<sub>5</sub>・扶<sub>1</sub>→助)⑦ タタム<sub>8</sub>(畳<sub>1</sub>・帖<sub>2</sub>→畳)⑦ タツ<sub>32</sub>(立<sub>1</sub>・起<sub>4</sub>→立)[四]⑦ タツ<sub>32</sub>(立<sub>1</sub>・起<sub>4</sub>→立)[下二]⑦ タテマツル<sub>13</sub>(奉<sub>1</sub>・進<sub>4</sub>・上<sub>10</sub>→奉) タフル<sub>26</sub>(倒<sub>1</sub>・顛<sub>2</sub>・斃<sub>9</sub>→倒)⑦ ツカフ<sub>21</sub>(仕<sub>1</sub>・態<sub>x</sub>→仕)[下二]⑦ ツク<sub>31</sub>(突<sub>1</sub>・撞<sub>5</sub>→突)⑦ トム<sub>8</sub>(富<sub>1</sub>・福<sub>2</sub>→富) トモナフ<sub>51</sub>(伴<sub>1</sub>・共<sub>8</sub>・具<sub>4</sub>・朋<sub>14</sub>→伴) ナク<sub>5</sub>(泣<sub>1</sub>・哭<sub>x</sub>・涙<sub>4</sub>→泣)⑦ ナク<sub>5</sub>(啼<sub>2</sub>・鳴<sub>x</sub>→鳴)⑦ ナグ<sub>10</sub>(投<sub>1</sub>・擲<sub>2</sub>・抛<sub>3</sub>→投)⑦ ナス<sub>13</sub>(成<sub>x</sub>・為<sub>1</sub>・作<sub>2</sub>→成)⑦ ナラブ<sub>27</sub>(並<sub>1</sub>・比<sub>3</sub>→並)[四]⑦ ナラブ<sub>27</sub>(並<sub>1</sub>・并<sub>11</sub>→並)[下二]⑦ ナル<sub>27</sub>(成<sub>1</sub>・為<sub>2</sub>→成)⑦ ネブル<sub>8</sub>(眠<sub>1</sub>・睡<sub>4</sub>→眠)⑦ ノコス<sub>x</sub>(残<sub>1</sub>・遺<sub>3</sub>→残)⑦ ノコル<sub>14</sub>(残<sub>1</sub>・遺<sub>3</sub>)⑦ ノゾム<sub>15</sub>(望<sub>1</sub>・幸<sub>x</sub>→望)⑦ ハク<sub>7</sub>(吐<sub>1</sub>・咄<sub>2</sub>→吐) ハジム<sub>45</sub>(始<sub>1</sub>・初<sub>2</sub>→始) ハシル<sub>18</sub>(走<sub>1</sub>・奔<sub>7</sub>→走) ハナツ<sub>11</sub>(放<sub>1</sub>・離<sub>x</sub>・捨<sub>6</sub>・散<sub>8</sub>→放) ヒク<sub>42</sub>(引<sub>1</sub>・曳<sub>2</sub>・牽<sub>3</sub>→引) ヒラク<sub>39</sub>(開<sub>1</sub>・披<sub>2</sub>→開) フセク<sub>21</sub>(防<sub>1</sub>・禦<sub>2</sub>→防)⑦ フル<sub>4</sub>(降<sub>2</sub>・雨<sub>1</sub>・落・下→降)⑦ マウス<sub>32</sub>(申<sub>1</sub>・白<sub>2</sub>→申)⑦ マク<sub>6</sub>(卷<sub>1</sub>・纏<sub>2</sub>→卷)⑦ マス<sub>29</sub>(増<sub>1</sub>・倍<sub>2</sub>・誉<sub>13</sub>→増)⑦ マツル<sub>17</sub>(祭<sub>1</sub>・祀<sub>6</sub>・祠<sub>2</sub>→祭)⑦ ムカフ<sub>27</sub>(向<sub>1</sub>・対<sub>2</sub>→向)⑦ ヨブ<sub>14</sub>(呼<sub>10</sub>・喚<sub>1</sub>→呼) ヨロコブ<sub>45</sub>(喜<sub>4</sub>・欣<sub>5</sub>・悦<sub>1</sub>・寿<sub>x</sub>→喜) ワカツ<sub>35</sub>(分<sub>1</sub>・別<sub>2</sub>・判<sub>34</sub>→分) ワタス<sub>3</sub>(渡<sub>3</sub>・亘<sub>x</sub>→渡) ワタル<sub>33</sub>(渡<sub>2</sub>・亘<sub>6</sub>→渡) エル<sub>7</sub>(彫<sub>1</sub>・刻<sub>x</sub>→彫)

86 語のうち、78%弱を占めている 67 語に最も多く使用されている 1 種の漢字表記は、『色葉字類抄』における第 1 掲出漢字あるいは合点が付されている漢字であることが分かる。

一方、『色葉字類抄』に掲載されていないが、「アヤシブ(恠)」は「奇<sup>ァヤシ</sup>恠 (他 9 字略)」(辞字 下 36 オ 3) から、「ウゴカス(動)」は「動<sup>ウゴク</sup>」(辞字 中 52 オ 6) ②から、「オトス(落)」は「落<sup>オツ</sup> 木目—墮 (他 21 字略)」(辞字 中 67 ウ 1) ②から、「ノコス(残)」は「残<sup>ノコル</sup>」(辞字 中 61 オ 3) ②から、4 語に使用されている漢字表記は『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが考えられる。このようにして、86 語のうち、71 語で 83% 弱を占めている語に使用されている漢字表記は、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが分かる。

一方、「イドム<sub>5</sub>(挑<sub>x</sub>・排<sub>x</sub>→挑)」のように、『今昔物語集』に使用されている漢字表記が、『色葉字類抄』に掲載されていない動詞と、「クダク<sub>25</sub>(碎<sub>7</sub>・摧<sub>1</sub>→碎)」のように、『今昔物語集』で最も多く使用されている漢字表記が、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字ではなく、2 位以下の漢字が選ばれた語とが存する。これらの語の漢字表記が『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であるかどうかについて、以下検討していく。

### 1 イドム<sub>5</sub>(挑<sub>x</sub>・排<sub>x</sub>→挑)

前田本『色葉字類抄』では、「咄<sup>イトム</sup> 詵 咄 桃 競<sup>已上同又イソフ</sup>」(辞字 上 10 オ 3) とあるが、「挑」「排」が掲出されていない。『類聚名義抄』に「挑<sup>イドム</sup> (他略)」(佛下本 69・7)・「排<sup>イドム</sup> (他略)」(佛下本 70・1) とあるように、「イドム」の漢字表記として「挑」「排」が掲出されているのに対して、「桃<sup>モ、モ、ノキ</sup> (他略)」(佛下本 86・8) とあるように、「イドム」の訓がない。このことから、前田本『色葉字類抄』における「桃」の字は、「挑」の誤字である可能性が高い。『今昔物語集』で、「排」が「道ヲ挑ム」(巻 23・13) のみに使用されているのに対して、「挑」は「道ヲ挑ケル」(巻 25・3)・「知恵・験ヲ挑マムハ」(巻 3・5)・「態ヲ挑ニケル」(巻 24・5) のように、広く使用されている。このことから、「イドム」の漢字表記「挑」は『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

### 2 ウツス<sub>18</sub>(移<sub>2</sub>・遷<sub>1</sub>→移)② ウツル<sub>18</sub>(移<sub>2</sub>・遷<sub>1</sub>→移)②

黒川本『色葉字類抄』に「遷<sup>ウツル・ウツス</sup> 移 (他略)」(辞字 中 52 ウ 2) とあるように、「遷」は第 1 掲出字で、「移」は第 2 掲出字であるが、『今昔物語集』には「移」が多く使われている。『今昔物語集』で、「遷」は、「物の移動」「場所の移動」に使用されているのに対して、「移」が「人の心」「水」「影」などにも広く使用されている。このことから、「ウツス」「ウツル」の 2 語の漢字表記「移」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。一方、『色葉字類抄』では、第 2 掲出漢字の「移」が、18 字の中で、上位を占めていることから、

「移」が『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが推測される。但し、この例は、黒川本でしか確認できないので、合点の有無は分からない。

### 3 ウラナフ(占・ト→占)

黒川本『色葉字類抄』に「占<sup>ウヒ</sup>一妻一男<sup>ト 博木反</sup>」(人事 中 49 オ 6)・「占手<sup>ウラテ</sup>」(人倫 中 48 ウ 4) とあるが、「ウラナフ」の訓はない。『類聚名義抄』において、「占<sup>ウラ</sup> ウラナフ シム」(佛中 55・5)・「ト<sup>ウラナフ</sup> シム」(法上 96・4) とあるように、「占」「ト」がともに「ウラナフ」と読むことが分かる。

『今昔物語集』では、「ウラナフ」の漢字表記として、「占」「ト」の意味の使い分けが見出せなかったが、「ト」が「不思議なことがあって、陰陽師に「凶吉」を問う」のみに 3 例使用されているのに対して、「占」が「奇妙なことがあって、それについて凶吉」を問うだけでなく、「夢」「病氣」などにも全巻にわたり広く使用されている。このことから、「占」は『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

### 4 ウラム<sub>34</sub>(恨<sub>2</sub>・怨<sub>7</sub>→恨)⑦

黒川本『色葉字類抄』に「憂<sup>ウラム</sup>恨<sup>胡良反</sup> (他 32 字略)」(人事 中 49 オ 8) とあるように、「恨」は第 2 掲出漢字であるのに対して、「怨」は第 7 掲出漢字である。『今昔物語集』では、「怨」が 4 例使用されているのに対して、「恨」は 27 例使用されている。このことから、「ウラム」の漢字表記「恨」は『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

### 5 クダク<sub>25</sub>(砕<sub>7</sub>・摧<sub>1</sub>→砕)[下二]⑦

黒川本『色葉字類抄』では、「クダク」の漢字表記として、「摧<sup>クダク</sup>折摧抹拉研砕<sup>砕正字</sup> (他 18 字略)」(辞字 中 77 オ 6) とあるように、「摧」は第 1 掲出漢字であるのに対して、「砕」は第 7 掲出漢字である。『今昔物語集』で、「摧」が巻 19 の 42 話に「打たれて壊れる」という意味に 2 例しか使われないのに対して、「砕」は「心」「肝」「思い」などにも、幅広く 16 例使用されている。このことから、「クダク」の漢字表記「砕」は『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。但し、ここでは、黒川本によるので、合点の有無は分からない。

### 6 クル<sub>7</sub>(暮<sub>4</sub>・暗<sub>x</sub>・晩<sub>1</sub>→暮)⑦

黒川本『色葉字類抄』に「晩<sup>クル</sup>又クレヌ晦落<sup>一日也</sup>暮 (他 3 字略)」(天象 中 71 ウ 1) とあ

るように、「晩」は第 1 掲出漢字であるのに対して、「暮」は第 4 掲出漢字で、「暗」は挙げられていない。『今昔物語集』で「晩」は使用数が最も少ないのに対して、掲載されていない「暗」が「暮」に次ぎ、多数使用されている。『今昔物語集』の「暗」が「目」だけに使用され、「晩」が「日」だけに使用されているのに対して、「暮」は「日」「目」とも使用されている。このことから、「クル」の漢字表記「暮」は『今昔物語集』の常用漢字であるこ

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
暮	1				1	1	1			1		2	2	3	3	8	3	4	2	2	4	1	5	6	2	3	1	2
暗					1					1						1	4					1	1			1	2	
晩				1					2		2	1										1						

とが分かる。但し、ここでは、黒川本によるので、合点の有無は分からない。

#### 7 タスク<sub>42</sub>(助<sub>2</sub>・資<sub>5</sub>・扶<sub>1</sub>→助)②

黒川本『色葉字類抄』では、「扶<sub>タスク</sub>助高祐資(他 37 字略)」(人事 中 3 ウ 2)とある。

「扶」が第 1 掲出漢字であるが、『今昔物語集』では「病ヲ扶ケムト」(巻 15・51)の 1 例しか使われない。第 5 掲出漢字「資」も「功ヲ資テ」(巻 4・39)の 1 例しか使われないが、第 2 掲出漢字の「助」が、「命ヲ助クル人也」(巻 1・32)・「苦ヲ助ケ」(巻 6・1)・「國ヲ助ケムガ為ニ」(巻 19・30)などに幅広く 271 例使用されている。このことから、「タスク」の漢字表記「助」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。但し、黒川本でしか確認できないので、もともと「助」に合点がついていたかどうかは不明である。

#### 8 ナス<sub>13</sub>(成<sub>x</sub>・為<sub>1</sub>・作<sub>2</sub>→成)②

黒川本『色葉字類抄』に「為<sub>ナス</sub>ナル作<sub>同</sub>(他 11 字略)」(辞字 中 36 オ 1)とあるように、「為」が第 1 掲出漢字で、「作」が第 2 掲出漢字であるのに対して、「成」はない。黒川本『色葉字類抄』に「成<sub>ナル</sub>為作(他 24 字略)」(辞字 中 35 ウ 6)とあることから、「成」は「ナル」と読むことが分かる。従って、他動詞として「ナス」と読んだ可能性もある。

「成」は「ナル」の漢字表記としては、黒川本『色葉字類抄』で第 1 掲出である。『今昔物語集』では、「為」が巻 11 の 19 話の題目「光明皇后、建法華寺為尼寺語」(巻 11・19)の 1 例に、「作」が「悪ヲ作テ」(巻 2・29)の 1 例に使用されているのに対して、「成」が 338 例使用されていることにより、「ナス」の漢字表記「成」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

9 フル<sub>4</sub>(降<sub>2</sub>・雨<sub>1</sub>→降)㊦

黒川本『色葉字類抄』では、「雨フル 王過反降同下霑同」とあるように、「フル」の漢字表記「雨」が第1掲出字として掲載されているが、『今昔物語集』では、「花降ル事、雪ノ雨ルガ如シ」(巻7・25)のように、「降」が繰り返しを避けるために使用される1例と、特別な場面「天ヨリ蓮華雨レリ」(巻11・1)のような例が4例使用されているのに対して、「降」が「花降ル」だけでなく、「雨」「雪」「霧」などの自然現象に対して、100例使用されている。

但し、黒川本でしか確認できないところなので、「降」にもともと合点がついていたかどうかは不明である。

10 ヨブ<sub>14</sub>(呼<sub>10</sub>・喚<sub>1</sub>→呼)

前田本『色葉字類抄』に「喚ヨフ ヨハフ 叫稱叱呵咤招咤騷呼 (他4字略)」(辞字 上116ウ4)とあるように、第1掲出字の「喚」に合点が付いているので、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字と考えられるが、『今昔物語集』では、「喚」が、「人ヲ喚テ」(巻3・22)・「牛ヲ喚テ」(巻9・39)のように15例使用されているが、「呼」が「彼レヲ仙人ト呼ブ」(巻11・24)・「名ヲ呼テ」(巻20・19)・「人ヤ有ル」ト呼給ヒケレバ」などのように、幅広く198例使用されている。このことから、「ヨブ」の漢字表記「呼」は『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
呼	1	1	2	3	1	4	4	1	6	5	7		7	25	12	11	15	14	2	3	11	4	3	20	13	12	5	5
喚	1	3	2					9																				

11 ワタス<sub>3</sub>(渡<sub>3</sub>・亘<sub>x</sub>→渡)

「ワタス」の漢字表記について、前田本『色葉字類抄』において、「済ワタリ ワタス 泊同渡同」(地儀 上85ウ6)とあり、「渡」は第3掲出漢字であるが、「ワタル」の漢字表記として、「度ワタル 渡過倭渉亘又ワタス 一橋」(辞字 上89オ4)とあるように、「渡」は第2掲出漢字で、合点がついている。『今昔物語集』で、「亘」は「橋ヲ亘シ給ヒケリ」(巻11・2)と使用されているのに対して、「渡」は「佛ヲ渡シ」(巻11・22)・「橋ヲハツ渡ケルニ」(巻24・35)などのように、78例使用されている。このことから、「ワタス」の漢字表記「渡」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

以上の検討を通して、以下の結果を纏めることができる。

- 1) 黒川本のため、合点の確認ができない漢字があるが、総字数の順位から見れば、上位である「ウツス」(移)・「ウツル」(移)・「ウラム」(恨)・「クダク」(碎)【下二】・「タスク」(助)・「ナス」(成)の 6 語が、『今昔物語集』に広く使用されている。
- 2) 「ヨブ」(呼)のように、前田本『色葉字類抄』における掲出順位が先の漢字表記ではなく、後の漢字表記が、広く使用されていることもある。『今昔物語集』における常用漢字と、前田本『色葉字類抄』に掲載されている常用漢字と異なることがあることが分かる。

以上、『今昔物語集』で、1 語に 2 種以上の漢字表記がある場合、最も多く使用されている 1 種の漢字表記が、「常用漢字表」の動詞の漢字表記と一致する 86 語について検討してきた。このうち、78%弱を占めている 67 語が、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字かあるいは合点がついていることが分かった。また、「アヤシブ」(「アヤシム」)・「ウゴカス」・「オトス」・「ノコス」の 4 語が『色葉字類抄』に掲載されていないが、関連する「アヤシ」・「ウゴク」・「オツ」・「ノコル」が『色葉字類抄』に掲載されており、これらの漢字も第 1 掲出漢字かあるいは合点が付されていた。よって、86 語のうち、83%弱の語の漢字表記が『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字が使用されていることになった。

このように、『今昔物語集』に最も多く使用されている 1 種の漢字表記が、「常用漢字表」の動詞の漢字表記と一致することを考えると、動詞の漢字表記が統一される傾向が早く院政時代に既に存していることが分かる。

### 3 『今昔物語集』使用数 2 位以下の漢字表記が「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞

『今昔物語集』で使用数が 2 位以下の漢字表記と、「常用漢字表」の漢字表記と一致する語は以下の 41 語である。これらの語の漢字表記が、『色葉字類抄』でどのように掲載されているか、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であるかどうかを検討する。

アヤマツ<sub>40</sub>(誤<sub>1</sub>・錯<sub>12</sub>・謬<sub>2</sub>・過<sub>6</sub>→過) アラソフ<sub>10</sub>(諍<sub>2</sub>・争<sub>1</sub>→争) イカル<sub>32</sub>(嗔<sub>2</sub>・瞋<sub>1</sub>・怒<sub>6</sub>・忿<sub>3</sub>→怒) イタス<sub>x</sub>(至<sub>1</sub>・致<sub>3</sub>→致)⑦ イタダク<sub>9</sub>(戴<sub>1</sub>・頂<sub>2</sub>→頂) ウウ<sub>10</sub>(殖<sub>1</sub>・植<sub>2</sub>→植)⑦ ウウ<sub>10</sub>(餓<sub>3</sub>・飢<sub>2</sub>・渴<sub>7</sub>→飢)⑦ オボユ<sub>12</sub>(思<sub>x</sub>・覚<sub>1</sub>→覚)⑦ カウブル<sub>16</sub>(蒙<sub>1</sub>・被<sub>2</sub>→被)⑦ カク<sub>16</sub>(闕<sub>1</sub>・欠<sub>2</sub>→欠)⑦ カザル<sub>14</sub>(莊<sub>5</sub>・飾<sub>1</sub>・嚴<sub>x</sub>→飾) キヨム<sub>23</sub>(清<sub>2</sub>・淨<sub>1</sub>)→清 ケガル<sub>x</sub>(穢<sub>2</sub>・汚<sub>1</sub>→汚)⑦ コガル<sub>1</sub>(焦<sub>1</sub>・焦<sub>x</sub>→焦)⑦ シ



タガフ<sub>52</sub>(随<sub>2</sub>・従<sub>1</sub>→従) スツ<sub>43</sub>(棄<sub>2</sub>・捨<sub>1</sub>→捨) ソフ<sub>15</sub>(副<sub>1</sub>・添<sub>2</sub>→添) ソフ<sub>15</sub>(副<sub>1</sub>・添<sub>2</sub>→添)[下二]② タノム<sub>18</sub>(憑<sub>7</sub>・頼<sub>11</sub>・恃<sub>1</sub>・怙<sub>5</sub>→頼) タマハル<sub>x</sub>(給<sub>1</sub>・賜<sub>2</sub>→賜)② タモツ<sub>10</sub>(持<sub>1</sub>・保<sub>3</sub>→保)② ナグサム<sub>5</sub>(嘆<sub>1</sub>・慰<sub>3</sub>→慰)[下二]② ナゲク<sub>20</sub>(歎<sub>1</sub>・嘆<sub>x</sub>→嘆)② ニクム<sub>15</sub>(慍<sub>4</sub>・憎<sub>2</sub>・惡<sub>1</sub>・嫌<sub>x</sub>→憎)② ニナフ<sub>6</sub>(荷<sub>1</sub>・担<sub>2</sub>→担) ノガル<sub>13</sub>(遁<sub>2</sub>・逃<sub>1</sub>・脱<sub>12</sub>・免<sub>11</sub>→逃)② ハラフ<sub>34</sub>(払<sub>1</sub>・掃<sub>2</sub>・揮<sub>x</sub>→払)② フス<sub>x</sub>(臥<sub>x</sub>・伏<sub>x</sub>・低<sub>x</sub>→伏)[四] フス<sub>x</sub>(臥<sub>x</sub>・伏<sub>x</sub>→伏)[下二] ホロボ<sub>23</sub>(亡<sub>1</sub>・滅<sub>2</sub>→滅)② ホロボス<sub>x</sub>(亡<sub>1</sub>・滅<sub>2</sub>→滅)② ヤスム<sub>12</sub>(息<sub>2</sub>・休<sub>1</sub>・休息<sub>x</sub>→休)[四]② ヤスム<sub>12</sub>(息<sub>2</sub>・休<sub>1</sub>→休)[下二]② マウク<sub>15</sub>(儲<sub>1</sub>・設<sub>6</sub>→設)② マサル<sub>23</sub>(増<sub>1</sub>・勝<sub>15</sub>・倍<sub>2</sub>→勝)② メグル<sub>50</sub>(廻<sub>5</sub>・遶<sub>3</sub>・巡<sub>4</sub>・匝<sub>2</sub>・迺<sub>1</sub>→巡)② ワカス<sub>16</sub>(湧<sub>1</sub>・沸<sub>2</sub>→沸) ワル<sub>4</sub>(破<sub>1</sub>・割<sub>x</sub>→割) ヲガム<sub>6</sub>(礼<sub>5</sub>・拝<sub>1</sub>・敬<sub>4</sub>→拝)② ヲハル<sub>20</sub>(畢<sub>3</sub>・終<sub>2</sub>→終) ヲフ<sub>x</sub>(畢<sub>3</sub>・終<sub>2</sub>→終)

41 語のうち、61%弱を占めている 25 語に使用されている最も多い漢字表記は、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字かあるいは合点が付いている漢字である。「イタス」「タマハル」・「ホロボス」・「ヲフ」の 4 語が、『色葉字類抄』に掲載されていないが、関連する「イタル」の漢字表記「至」、「タマフ」の漢字表記「給」、「ホロボ」の漢字表記「滅」、「ヲハル」の漢字表記「終」は、『色葉字類抄』において、合点がついている漢字か或は第 1 掲出漢字であるので、「イタス」「タマハル」・「ホロボス」・「ヲフ」の 4 語に最も多く使用されている漢字表記「至」、「給」、「滅」、「終」も『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが分かる。以上を踏まえて、『今昔物語集』で使用数が 2 位以下の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一致する 41 語のうち、71%弱の 29 語の漢字表記に、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字が使用されていることが分かった。

しかし、『今昔物語集』で、ウウ<sub>10</sub>(餓<sub>4</sub>・飢<sub>2</sub>・渴<sub>7</sub>→飢)のように、最も多く使用されている漢字表記「餓」は、黒川本『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字ではない。また、『今昔物語集』で、「ニクム」に最も多く使用されている漢字表記「慍」が、前田本『色葉字類抄』では、第 1 掲出漢字ではないし、合点もついていない。次はこれらの語について検討する。

#### 1 ウウ<sub>10</sub>(餓<sub>4</sub>・飢<sub>2</sub>・渴<sub>7</sub>→飢)②

後の表に示すように、『今昔物語集』で「ウウ」の漢字表記として、最も多く使用されている「餓」が、黒川本『色葉字類抄』に「饑<sub>ウフ</sub> 渠遶反 ウヘタリ 飢<sub>キ</sub> 居夷反 饑<sub>キ</sub> 五穀不熟曰—餓(他 6 字略)」(人事 中 49 オ 5) とあるように、第 4 掲出漢字である。「餓」より掲出順位が上

位である「飢」は、「母飢テ死ニキ」(巻 2・39)・「極テ飢ヘニケレバ」(巻 10・32) のように、「食物がなくて腹がへル」という意味に 9 例使用されているのに対して、「餓」は、「食ニ餓テモ」(巻 16・25) のように、「腹が減る」という意味に使用されているだけでなく、「五百人商人、通山餓水語第 11」(巻 5・11) のように、「喉が渴く」にも使用されている。「餓」の使用例は 17 である。2 字の使用範囲から考えると、「餓」は『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

ただし、黒川本なので、合点の有無は分からない。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
餓	1		2		2		1				1	4			3	2									1			
飢		1							1	3					1			3										

## 2 オボユ<sub>12</sub>(思<sub>x</sub>・覚<sub>1</sub>→覚)㊦

『今昔物語集』で、「オボユ」の漢字表記として、「思」が最も多く使用されているが、黒川本『色葉字類抄』で、「覚<sub>オボユ</sub> 不悟解(他 9 字)」(人事 中 65 ウ 2) とあるように、「覚」は第 1 掲出漢字であるが、「思」が掲載されていない。『古本節用集』(注 6) と『文明節用集』(注 7) を確認したところ、「オボユ」の漢字表記として、「覚」と掲載されているが、「思」は掲載されていない。しかし、『今昔物語集』では、「覚」が「呼ニ遣ラン程ヲ可待モ無恋シク覚エケレバ」(巻 26・5)・「我ヲ引落ツルマデハ覚ユ」(巻 26・5)・「可為方覚エザリケレバ」(巻 26・14) の 3 例しか使われないのに対して、「思」は「恋シク思エ給ケレバ」(巻 4・7)・「悲シク思エケム」(巻 19・9)・「田舎人ノ娘ト不思ズ」(巻 20・37) などの 367 例に、全巻に亘り広く使用されている。このことから、「思」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

## 3 ケガル<sub>19</sub>(穢<sub>2</sub>・汚<sub>1</sub>→汚)㊦

『今昔物語集』で、「ケガル」の漢字表記として、最も多く使用されている「穢」が、黒川本『色葉字類抄』に「汚<sub>ケカス</sub> ケカル 穢泥(他 16 字略)」(辞字 中 98 オ 1) とあるように、第 2 掲出漢字である。第 1 掲出漢字「汚」は、「聊ニ湿汚給ヒタル事无シ」(巻 7・29)・「極テ穢ク汚タル衣ヲ着テ」(巻 13・43) の 2 例しか使われないのに対して、「穢」は、「衣服モ皆穢レ」(巻 3・11)・「心ノ穢ガレケレバ」(巻 5・30) などの 13 例に使用されている。このことから、「ケガル」の漢字表記「穢」は、『今昔物語集』の常用漢字であると言える。

ただし、黒川本なので、合点の有無は分からない。

4 タノム<sup>18</sup>(憑<sup>7</sup>・頼<sup>13</sup>・恃<sup>1</sup>・怙<sup>x</sup>→頼)⑦

『今昔物語集』で、「タノム」の漢字表記として最も多く使用されている「憑」は、黒川本『色葉字類抄』では、「恃<sup>タノム</sup>峙擁憑怡籍憑籍憑慣博薦頼(他7字略)已上恃也」(辞字 中 8オ3)とあるように、第7位である。第1掲出漢字の「恃」は、「豪族ヲ恃ムデ悪言ノ事ヲ出シ」(巻2・37)と「自ラ王子ト恃ムデ常ニ憍慢ヲ成シテ」(巻3・19)に2例しか使われないが、「憑」は「壺驗ヲ憑テ」(巻6・38)・「偏ニ夢ヲ憑テ」(巻12・32)・「威力ヲ憑テ」(巻12・38)などの92例に広く使用されている。よって、「タノム」の漢字表記「憑」は、『今昔物語集』の常用漢字であると言える。

ただし、黒川本なので、合点の有無は分からない。

5 ニクム<sup>15</sup>(慍<sup>4</sup>・憎<sup>2</sup>・惡<sup>1</sup>・嫌<sup>10</sup>→憎)

『今昔物語集』で「ニクム」の漢字表記として最も多く使用されている「慍」は、前田本『色葉字類抄』では、「惡<sup>ニクム</sup>憎亞慍厭(4字略)嫌(5字略)」(人事 上 37ウ4)とあるように、第4掲出漢字である。第1掲出漢字「惡」は、「其ノ妻ヲ永ク惡ムデ寵スル事無シ」(巻9・3)のような例が5例しか使われないが、第4掲出漢字「慍」は「近隣ノ人ニモ慍レヌ」(巻1・31)・「盗人ノ重罪ヲ慍テ」(巻12・13)・「物ヲ盗ミ取ラムトテ殺シタルヲ、天ノ慍ミ給テ」(巻29・9)など、34例に広く使用されている。このことから、「嘸」が『今昔物語集』の常用漢字であると言える。但し、前田本『色葉字類抄』で、「慍」は第1掲出漢字でもないし、合点もついていないことから、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字ではない。

6 ノガル<sup>13</sup>(遁<sup>2</sup>・逃<sup>1</sup>・脱<sup>12</sup>・免<sup>11</sup>→逃)⑦

後の表に示すように、『今昔物語集』で「ノガル」の漢字表記として、最も多く使用されている「遁」は、黒川本『色葉字類抄』に「逃<sup>ノガル</sup>亡<sup>逃</sup>遁難遜(他5字略)免脱北<sup>已上同</sup>」(辞字 中 61オ4)とあるように、第2掲出漢字である。第1掲出漢字「逃」は、「高祖逃テ去ツヽ」(巻10・2)のように、「危険な場所から離れる」という意味に10例使用されているが、第2掲出漢字の「遁」が「罪ヲ遁レムガ為ニ」(巻19・9)・「惡道ヲ遁ルヽ事ハ」(巻31・28)など、97例に広く使用されている。このことから、「ノガル」の漢字表記「遁」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが判明される。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
遁	3	3	5	3	3	4	2	7	5	3	1	1	8	2	10	7	5	1			9	1	5	1		6		2
逃					4			1	5																			

7 メグル<sub>50</sub>(廻<sub>5</sub>・遶<sub>3</sub>・巡<sub>4</sub>・匝<sub>2</sub>・迕<sub>1</sub>→巡)

『今昔物語集』で、「メグル」の漢字表記として最も多く使用されている「廻」は、黒川本『色葉字類抄』に「迕<sub>メクル</sub> 子谷反 巾繞而沼反 繼一巡<sub>シユン</sub> 盃一也 廻<sub>クワイ</sub> (他 45 字略)」(辞字 下 59 ウ 2) ②とあるように、第 5 掲出漢字である。第 1 掲出漢字「迕」は、「卒堵婆ヲ迕テ」(巻 10・36) に 1 例しか使われないが、「廻」は、「后ヲ三度廻テ」(巻 3・25)・「礼拝シテ右ニ七匝廻テ」(巻 3・34)・「生死ニ廻ル事車ノ輪ノ廻ルガ如シ」(巻 4・6) などのように、66 例に広く使用されている。このことから、「メグル」の漢字表記「廻」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが考えられる。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

8 ヤスム<sub>12</sub>(息<sub>2</sub>・休<sub>1</sub>・休息<sub>x</sub>→休)[四] ヤスム<sub>12</sub>(息<sub>2</sub>・休<sub>1</sub>→休)[下二]

『今昔物語集』で、「ヤスム」の漢字表記として最も多く使用されている「息」が、黒川本『色葉字類抄』に「休<sub>ヤスム</sub> 息慰 (他 9 字略)」(辞字 中 86 ウ 6) とあるように、「息」が第 2 掲出漢字である。第 1 掲出漢字「休」は、「暫モ休ム事无クシテ」(巻 7・45)・「日夜ニ休ム事无」(巻 20・31)・「罷出テ休マムト」ト云テ」(巻 20・36)・「男女ノ老少ノ人多ク居テ休ケルヲ」(巻 24・21) の 4 例しか使用されていないのに対して、「息」が「暫ク息ム程ニ」(巻 3・3) のように、19 例使用されていること。このことから、「息」が『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

同じように、「ヤスム」(下二)の漢字表記「休」が「馬ノ蹄ヲ不休ル」(巻 25・1)・「兵ヲ休ル間」(巻 25・13) の 2 例しか使用されていないのに対して、「息」が「心ヲ息メムガ為」(巻 1・17)・「御馬ノ足モ息サセ給ハムガ為」(巻 16・20) などの 7 例に使用されている。「ヤスム」の漢字表記「息」が多く使用されていることと一致する。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

9 フガム<sub>6</sub>(礼<sub>5</sub>・拝<sub>1</sub>・敬<sub>4</sub>→拝)②

『今昔物語集』で、「フガム」の漢字表記として最も多く使用されている「礼」が、黒川本『色葉字類抄』に「拝<sub>オカム</sub> 博佐反 膜一 肅一 張禮敬<sub>礼同</sub> 礼竟<sub>已上同</sub>」(人事 中 65 ウ 1) とあるように、第 5 掲出漢字である。第 1 掲出漢字「拝」が、「聖人ヲ拝ミ給フ」(巻 4・5)・「王

王ヲ令拝シム」(巻 9・27)・「卒堵婆ヲ上テ拝ケリ」(巻 10・36) の 3 例しか使用されていないのに対して、「礼」が「卒堵婆ヲ礼ミケリ」(巻 10・36)・「貴キ靈驗ノ所、ヲ礼ケル間」(巻 15・28)・「此ノ疵ヲ礼ミ奉テ」(巻 16・3) などの 67 例に広く使用されている。このことから、「ヲガム」の漢字表記「礼」は、『今昔物語集』における常用漢字であることが分かる。

以上、『今昔物語集』における「ウウ」・「ケガル」などの語を検討したところ、これらの語に最も多く使用されている 1 種の漢字表記は、『色葉字類抄』において、第 1 掲出漢字あるいは合点がついている漢字ではないが、『今昔物語集』の常用漢字であることが分かった。但し、「ニクム」以外の語は、黒川本しか掲載されていないので、合点の有無は分からない。従って、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であるかどうか、断定できない。

#### 4 『今昔物語集』で 2 種以上の漢字表記が「常用漢字表」で 1 種の漢字表記に統一される動詞

『今昔物語集』では、1 語に少なくとも 2 種の漢字表記が多数使用されている語が 16 語存している。また、1 語に 2 種以上の漢字表記があるが、その使用数が少ないため、どの漢字表記が当時の常用漢字であるか、判断しにくい動詞が 22 語ある。これらの動詞の漢字表記は、『色葉字類抄』でどのように掲載されているか、当時の常用漢字であるかどうかについて検討したい。また、「常用漢字表」の動詞の漢字表記とどれほど一致するか、調べてみる。

##### 4・1 1 語に 2 種の漢字表記がともに多数使用されている語

『今昔物語集』で、1 語に 2 種の漢字表記がともに多数使用されている語は、以下の 16 語が存する。

アカス<sub>x</sub> (明<sub>1</sub>・嗟<sub>x</sub>・曙<sub>x</sub>・暁<sub>x</sub>→明) アク<sub>2</sub>(明<sub>1</sub>・嗟<sub>x</sub>・<sub>x</sub>・曙<sub>x</sub>・暁<sub>x</sub>→明) アヤマツ<sub>39</sub>(誤<sub>1</sub>・錯<sub>11</sub>・謬<sub>2</sub>→誤) アヤマル<sub>x</sub>(錯<sub>11</sub>・誤<sub>1</sub>→誤) ウケタマハル<sub>5</sub>(承<sub>1</sub>・奉<sub>2</sub>→承)② オソル<sub>51</sub>(恐<sub>2</sub>・怖<sub>1</sub>・懼<sub>3</sub>・畏<sub>11</sub>・忤<sub>5</sub>→恐)② カクム<sub>6</sub>(衛<sub>4</sub>・圀<sub>1</sub>→圀) カタブク<sub>27</sub>(低<sub>2</sub>・傾<sub>1</sub>→傾)[下二] クルシム<sub>12</sub>(苦<sub>2</sub>・困<sub>1</sub>→苦) コフ<sub>12</sub>(乞<sub>2</sub>・請<sub>1</sub>→請) シルス<sub>23</sub>(記<sub>4</sub>・注<sub>1</sub>・印<sub>x</sub>・驗<sub>8</sub>・署<sub>x</sub>→記) ツカル<sub>24</sub>(羸<sub>2</sub>・疲<sub>1</sub>→疲)② トツグ<sub>6</sub>(娶<sub>2</sub>・嫁<sub>1</sub>・婚<sub>6</sub>→嫁) ノム<sub>13</sub>(吞<sub>2</sub>・飲<sub>1</sub>→飲)② ヤブル<sub>45</sub>(破<sub>6</sub>・壊<sub>1</sub>・傷→破)[四]② ユル

ス<sub>33</sub>(免<sub>2</sub>・許<sub>1</sub>・聴<sub>4</sub>・開・宥→許)

前田本『色葉字類抄』では、「コフ」の漢字表記「乞・請」・「トツグ」の漢字表記「娶・嫁」・「ユルス」の漢字表記「免・許」において、1 語に多く使用されている 2 種の漢字表記がともに合点がついているので、2 種の漢字表記がともに当時の常用漢字であることが分かる。従って、ここではこの 3 語を除く 13 語について検討する。

1 アカス<sub>x</sub>(明<sub>1</sub>・嗟<sub>x</sub>・曙<sub>x</sub>・曉<sub>x</sub>→明) アク<sub>2</sub>(明<sub>1</sub>・嗟<sub>x</sub>・曙<sub>x</sub>・曙<sub>x</sub>・曉<sub>x</sub>→明)

前田本『色葉字類抄』において、他動詞「アカス」が挙げられないが、自動詞「アク」が掲載されているので、「アク」を検討することにする。

後の表に示すように、『今昔物語集』では、「アク」の漢字表記として、「明」が 78 例、「嗟」が 59 例あるように、「明」「嗟」がともに多く使用されている。「曙」「曙」「曉」は、それぞれ 8 例、4 例、2 例で、使用数が少ない。『今昔物語集』で多く使用されている「明」は、前田本『色葉字類抄』に「明<sub>テ</sub>晞<sub>同</sub>」(天象 下 24 ウ 3) とあるように、第 1 掲出漢字であるが、「嗟」は、掲載されていない。「嗟」について、『今昔物語集』(1) (注 8) の補注に「嗟は、他の字書にも現実の具体的言語においても使用した例を未だ見ない。(略)」。嗟は、恐らく、曉の草体から来た譌字であろう。曉は、名義抄に、アカツキとともにアケヌの訓が見える」とある。

『大漢和辞典 巻 5』(P5520) (注 9) で、「晞」について、「あける、明らか」という意味が掲載され、『詩経』の「齊風・東方未明」における「東方未晞」が挙げられているが、同じく『大漢和辞典 巻 5』(P5575) における「曉」の項には、「明らか」という意味しか掲載されていない。『今昔物語集』における「嗟」が、全て「夜が終わって朝になる」という意味に使用されているので、「嗟」が「晞」の誤字である可能性がないと言えない。そうすれば、前田本『色葉字類抄』の第 2 掲出漢字であることになるので、『今昔物語集』に多く使用されていることも納得できると思われる。

『今昔物語集』における「明」について、「夜が明ける」のほか、「明ル日来レリ」(巻 7・31)・「明ル年ノ春」(巻 11・13) などの例にも使用されていることから、「明」が広く使用されていることが分かる。また、表に示すように、「嗟」が巻 20 までに多く使用されており、特に、本朝仏法部に多く使用されているのに対して、「明」は、本朝仏法部から多く使用され、更に本朝世俗部で多く使用されていることから、「明」が使用されていく傾向が見られる。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
明								1		1		1	2	2	3	2	9	3	5		1	8	2	10	4	11	4	7
嗟		1	1	2	1			1	1	1		5	5	7	13	6	2	2	1				2	7		1		
晴											1		1		1	4								1				
曙										1		3																
曉																				1			1					

## 2 アヤマツ<sub>39</sub>(誤<sub>1</sub>・錯<sub>11</sub>・謬<sub>2</sub>→誤) アヤマル<sub>x</sub>(錯<sub>11</sub>・誤<sub>1</sub>→誤)

下の表に示すように、『今昔物語集』では、「アヤマツ」の漢字表記として、「誤」が 21 例、「錯」が 14 例あるのに対して、「謬」が 1 例しか使われない。前田本『色葉字類抄』に「誤<sub>アヤマツ</sub> 五故反 謬<sub>訛</sub> 五禾反 愆<sub>老乾反</sub> 餽<sub>過</sub> 古臥反 僻佚紕繆錯 (他 28 字略)」(人事 下 30 ウ 1) とあるように、「誤」が第 1 掲出漢字かつ合点がついている漢字であるのに対して、「錯」が第 11 掲出漢字であることにより、「誤」は、当時の常用漢字であることが分かる。『今昔物語集』で多数使用されていることと一致する。しかし、第 11 掲出漢字「錯」の使用数について、巻 20 以後、「誤」より多く見られる。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
誤				4		1	2	6	2		2		1								1	2						
錯								1		1	1	2					1			3		1			1	2		1
謬																		1										

## 3 ウケタマハル<sub>8</sub>(承<sub>1</sub>・奉<sub>2</sub>→承)⑦

下の表に示すように、『今昔物語集』では、「ウケタマハル」の漢字表記として、「承」が 62 例、「奉」が 45 例あるように、「承」「奉」がともに多く使用されている。黒川本『色葉字類抄』に「承<sub>ウケタマハル</sub> 奉<sub>聴共請</sub> 已上同」(辞字 中 53 オ 8) とあるように、「承」が第 1 掲出漢字であるのに対して、「奉」が第 2 掲出漢字であることが分かる。表に示すように、『今昔物語集』では、「承」「奉」がともに多く使用されているが、「承」が巻 20 以後に多く使用されていることに対して、「奉」の使用数が次第に減少する傾向が見られる。「ウケタマハル」の漢字表記「承」は、黒川本『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字であることを考え合わせると、「承」は、『今昔物語集』における常用漢字であることが分かる。これは、「承」が黒川本『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字であることと一致する。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
承	2			5	1		1		1	4	2		4		2	1	3	2	1	2	9	5	6	1	4	5	1	1
奉	2	1		2	4		1	9	3	10	2	1						5	1		1	1			1	1		

4 オソル<sub>51</sub>(恐<sub>2</sub>・怖<sub>1</sub>・懼<sub>3</sub>・畏<sub>11</sub>・悦<sub>5</sub>→恐)⑦

下の表に示すように、『今昔物語集』では、「恐」が 129 例、「怖」が 99 例と、使用数が拮抗している。「懼」「畏」「悦」は、それぞれ 4 例、3 例、1 例で、使用数は少ない。黒川本『色葉字類抄』に「怖<sub>オソル</sub>恐懼<sub>其過反</sub>慎愕惶忪嘖懼遣畏(他 40 字略)」(人事 中 65 オ 5)とあるように、「恐」が第 2 掲出漢字であるのに対して、「怖」が第 1 掲出漢字である。『今昔物語集』では、表に示すように、「恐」「怖」がともに多く使用されているが、「恐」より、「怖」のほうは巻 20 以後に多用されていることが見られる。形容詞「オソロシ」の漢字表記「怖」が、『今昔物語集』における常用漢字であることを考え合わせると、「オソル」の漢字表記「怖」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが考えられる。

他し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
恐	9	6	2	5	7	5	7	5	6	5	4	12	10	4	3	11	12	11	1	3	2	1	1	1	2			
怖	4	3	2	5	3	4	3	8	8	2	2	5	6		3	5	1	6		1	5	3		11	5	2		4
懼								3	1																			
畏	2																1											
悦									1																			

5 カクム<sub>6</sub>(衛<sub>4</sub>・圀<sub>1</sub>→圀)

下の表に示すように、『今昔物語集』では、「衛」が 10 例、「圀」が 9 例と、使用数が拮抗している。前田本『色葉字類抄』に「圀<sub>カコム</sub>カクム固邊衛塘<sub>已上同</sub>」(辞字 上 102 ウ 3)とあるように、「圀」が当時の常用漢字であることが分かる。

『今昔物語集』で、「圀」が「長者ノ家ヲ圍ム時ニ」(巻 2・23)のように使用されているが、「衛」が主に「長屋ノ家ヲ令衛ム」(巻 20・27)のような例に使用されているが、「大方ヲ衛テ」(巻 24・6)のような例にも 1 例使用されていることにより、「衛」の使用の範囲が広いと言えるが、複合語として、「圀」が 28 例使用されているのに対して、「衛」が 13 例使用されていることにより、「圀」のほうがやや多く使用されている。「圀」は、前田本『色葉字類抄』における常用漢字であることを考え合わせると、「圀」が『今昔物語集』における常用漢字であると考えられる。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
衛							2	2			1							2			1				1	1		
圀		1			1		1	1	1								1				3							



6 カタブク<sub>27</sub>(低<sub>2</sub>・傾<sub>1</sub>→傾)[下二]

下の表に示すように、『今昔物語集』では、「低」が 22 例、「傾」が 14 例あるが、前田本『色葉字類抄』に「傾<sub>カタツク</sub>低 (他 25 字略)」(辞字 上 104 ウ 4) とあるように、「傾」は、第 1 掲出漢字且つ合点がついていることにより、「傾」は当時の常用漢字であることが分かる。『今昔物語集』では、表に示すように、「カタブク」[下二]の漢字表記「低」の使用数がやや多いが、巻 20 までに使用されていることが分かる。「傾」は、巻 20 以後にも使用されていることから、使用されていく傾向が見られる。また、『今昔物語集』で、「カナムク」[四]が、「傾」で表記されていることを考えられると、「傾」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
低				2				1	2	5	6	2			2	2												
傾	1						1			2				2		2	1	2				1				1		1

7 クルシム<sub>12</sub>(困<sub>2</sub>・苦<sub>1</sub>→苦)

下の表に示すように、『今昔物語集』では、「クルシム」の漢字表記「困」が 8 例、「苦」が 6 例あり、「困」は巻 10 までに使用されているのに対して、「苦」は巻 10 以後も使用されていることにより、「苦」は使用されていく傾向が見られる。「クルシム」について、『色葉字類抄』に掲載されていないが、黒川本『色葉字類抄』に「苦<sub>クルシフ</sub>困<sub>苦悶反</sub> (他 10 字略)」(人事 中 74 ウ 2) とあることにより、「苦」「困」が「クルシム」と読むと考えられる。「クルシフ」の漢字表記「苦」「困」について、『今昔物語集』での使用数は、13 対 1 例であることと、形容詞「クルシ」、名詞「クルシビ」の漢字表記が全て「苦」と表記されていることから、「クルシム」の漢字表記「苦」が、『今昔物語集』の常用漢字であることが判断される。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
困			1				1	6																				
苦							1	1				1			1	1												1

8 シルス<sub>23</sub>(記<sub>4</sub>・注<sub>1</sub>・印<sub>x</sub>・験<sub>8</sub>・署<sub>x</sub>→記)

後の表に示すように、『今昔物語集』では、「シルス」の漢字表記「記」が 18 例、「注」が 17 例と、使用数が拮抗している。「印」「験」「署」は、それぞれ 3 例、2 例、1 例で、使用数が少ない。前田本『色葉字類抄』に「注<sub>シルス</sub> 丁注之二反 一記<sub>録力玉反</sub> 詠<sub>ロク</sub> 記<sub>居史反</sub> 註<sub>訂銘</sub> 験 (他 15 字略)」(辞字 下 76 オ 2) とあるように、「記」は第 4 掲出漢字であるのに対

して、「注」は第 1 掲出漢字且つ合点のついている漢字であるので、「注」は当時の常用漢字であることが分かる。

『今昔物語集』で、「記」は「日月ヲ記シツ」(巻 6・4) に、「注」は「夢ノ事ヲ注セリ」(巻 17・14) に使用されているように、2 字の使い分けが見られないが、「シルシオコス(注遣)」・「シルシツク(注付)」・「シルシツクス(注尽)」のような複合語が 3 語存しており、その漢字表記として、すべて「注」と表記されていることを考え合わせると、「シルス」の漢字表記「注」は、『今昔物語集』における常用漢字であると考えられる。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
記			1			3	3	7			1		1					1							1			
注						1		2			3	1	2			3	4		1									
印						1	1	1																				
験								2																				
署							1																					

#### 9 ツカル<sub>24</sub>(羸<sub>2</sub>・疲<sub>1</sub>→疲)㊦

下の表に示すように、『今昔物語集』では、「ツカル」の漢字表記「羸」が 16 例、「疲」が 11 例と、使用数の偏りは認められない。黒川本『色葉字類抄』には「疲<sup>ツカル</sup>羸<sup>弱也</sup>窮極卒瘦(他 18 字略)」(人事 中 22 ウ 5) とある。「羸」の注記に、「弱也」と記されている。

『今昔物語集』では、「羸」が主に「身羸レ腹大キニフクレテ」(巻 1・3)・「年老ヒ身羸テ」(巻 29・17) のように、「体が弱くなる」という意味に使用されていることにより、『今昔物語集』の漢字表記が当時の漢字の意味に従うことが考えられる。「疲」について、主に「身疲レ糧盡タリト」(巻 9・9) のように、「疲労する」の意味に使用されている。このように、2 字の使い分けが見られる。

黒川本なので、合点の有無は分からない。

巻	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
語表記																												
羸	3			6	3	1									1			1								1		
疲		1	2	1			1	1	1		1			1				2										

#### 10 ノム<sub>13</sub>(呑<sub>2</sub>・飲<sub>1</sub>→飲)㊦

後の表に示すように、『今昔物語集』では、「ノム」の漢字表記「呑」が 71 例、「飲」が 35 例と、2 字がともに多く使用されている。黒川本『色葉字類抄』に「飲<sup>ノム</sup>於帝反呑<sup>吐根反</sup>テントン(他 11 字略)」(人事 中 59 オ 7) とあるように、「飲」が第 1 掲出漢字であるのに対して、「呑」が第 2 掲出漢字である。

『今昔物語集』では、「飲」は、「水ヲ飲む」「酒ヲ飲む」「粥ヲ飲む」のように、「液体のものを口に入れて食道のほうに送り込む」という意味に使用されているのに対して、「呑」が「水ヲ呑ム」「酒ヲ呑ム」、「香爐ヲ呑ム」(巻 7・4)・「蝦ヲ呑ガ為ニ」(巻 16・16)のように、「丸のみにする」という意味に広く使用されていることにより、「呑」の使用範囲が広く見られることと、「呑」の使用数がやや多いことにより、「呑」は『今昔物語集』の常用漢字であると考えられるが、表に示すように、「呑」「飲」2 字の使用数の偏りが見られないことから、2 字がともに当時の常用漢字である可能性がある。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

巻 語表記	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
呑		5		1	3	1	1	7	6			4	1		3	1	16	2				1	4		5	9	1	
飲		1		3	5		1		1	2				1	1		1	1	1		5	9	1	1				1

#### 11 ヤブル<sub>45</sub>(破<sub>6</sub>・壊<sub>1</sub>・傷→破)[四]②

下の表に示すように、『今昔物語集』では、「ヤブル」の漢字表記「破」が 48 例、「壊」が 25 例使用されている。「傷」は 1 例で、使用数が少ない。黒川本『色葉字類抄』に「壊ヤフル傷地稀割破<sub>普通反</sub> (他 39 字略)」(辞字 中 86 ウ 8) とあるように、「壊」は第 1 掲出漢字であるのに対して、「破」は第 6 掲出漢字である。

『今昔物語集』では、「壊」は、「身ヲ壊ル」(巻 2・12)・「壁ヲ壊テ」(巻 11・22)「事ヲ壊ラムト為ルゾ」(巻 24・29)のように使用されているのに対して、「破」は、「戒ヲ破ル事ハ」(巻 1・30)・「身破ル事」(巻 2・25)・「国ヲ破リ」(巻 3・8)「瓠ヲ破テ」(巻 13・40)のように広く使用されている。また、前田本『色葉字類抄』に「破<sup>ヤフル</sup>裂<sup>ハレツ</sup> <sub>衣裳部</sub>」(暁字 上 33 オ 2) とあることにより、「ヤブル」の漢字表記「破」が、当時の常用漢字である可能性がある。

但し、黒川本なので、合点の有無は分からない。

巻 語表記	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
破	8	5	3		3	1	1	1	2	1	1	1	2	3	2	2	3	2		1		3			1		1	
壊	1	1		1	1	2					14				1	1		1			1				1			
傷												1																

以上のように、「アカス」の漢字表記「明」・「アク」の漢字表記「明」・「ウケタマハル」の漢字表記「承」・「オソル」の漢字表記「恐」・「カクム」の漢字表記「罍」・「カタムク」[下二]の漢字表記「傾」・「クルシム」の漢字表記「苦」・「シルス」の漢字表記「注」は、『今昔

物語集』の常用漢字である一方、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが分かる。「コフ」「トツグ」「ユルス」の 3 語に 2 種の漢字表記がともに合点がついているので、いずれも当時の常用漢字が使用されていることを合わせて、『今昔物語集』では、1 語に 2 種の漢字表記がともに多数使用されている語のうち、その 1 種は『今昔物語集』の常用漢字だけでなく、『色葉字類抄』の常用漢字でもあることが分かった。

一方、「ツカル」・「ノム」のように、2 種の漢字表記の中で、1 種の漢字表記が当時の常用漢字であるが、字による使い分けがあることが分かる。また、巻の偏りが見られないので、もう 1 種の漢字表記も当時の常用漢字である可能性があると考えられる。

#### 4・2 1 語に 2 種以上の漢字表記があるが、その使用数が少ない動詞の漢字表記

『今昔物語集』で、1 語に 2 種以上の漢字表記がともに使用数が少ないため、どの漢字表記が当時の常用漢字であるか、判断しにくい動詞が 22 語ある。

アザムク<sub>33</sub>(欺<sub>1</sub>・謀<sub>12</sub>・誣<sub>x</sub>・誤<sub>x</sub>→欺) イツハル<sub>25</sub>(詐<sub>2</sub>・偽<sub>1</sub>→偽) ウカル<sub>6</sub>(浮<sub>2</sub>・溜<sub>x</sub>→浮)⑦ クラブ<sub>8</sub>(競<sub>6</sub>・校<sub>1</sub>・比<sub>2</sub>→比)⑦ クム<sub>7</sub>(組<sub>1</sub>・編<sub>4</sub>→組)⑦ コホル<sub>x</sub>(凍<sub>3</sub>・氷<sub>x</sub>・凝<sub>1</sub>→凍) サマス<sub>x</sub>(覚<sub>3</sub>・醒<sub>1</sub>・悟<sub>4</sub>→覚) シゲル<sub>x</sub>(繁<sub>1</sub>・茂<sub>2</sub>・滋<sub>4</sub>→茂) シリゾク<sub>45</sub>(去<sub>40</sub>・却<sub>2</sub>・退<sub>1</sub>→退)[下二] ツム<sub>9</sub>(採<sub>7</sub>・摘<sub>5</sub>・撿<sub>x</sub>→摘) ツラナル<sub>13</sub>(烈<sub>x</sub>・連<sub>1</sub>・列<sub>3</sub>・貫<sub>7</sub>→連)⑦ ツラヌ<sub>57</sub>(烈<sub>x</sub>・連<sub>1</sub>・聯<sub>38</sub>→連)⑦ ノボス<sub>x</sub>(昇<sub>2</sub>・上<sub>5</sub>・登<sub>1</sub>→上)⑦ ハカラウ<sub>1</sub>(量<sub>x</sub>・計<sub>1</sub>→計) ハサム<sub>16</sub>(挟<sub>1</sub>・夾<sub>9</sub>・交<sub>10</sub>・校<sub>x</sub>・狹<sub>6</sub>→挟) ヒヤス<sub>x</sub>(冷<sub>1</sub>・氷<sub>x</sub>→冷) ヒログ<sub>x</sub>(弘<sub>x</sub>・披<sub>x</sub>) ホス<sub>4</sub>(干<sub>1</sub>・乾<sub>3</sub>→干) マガル<sub>19</sub>(鉤<sub>9</sub>・枉<sub>2</sub>・曲<sub>1</sub>→曲)⑦ ミガク<sub>14</sub>(瑩<sub>1</sub>・磨<sub>3</sub>→磨)⑦ ムクユ<sub>18</sub>(報<sub>2</sub>・酬<sub>1</sub>→報) ワク<sub>2</sub>(湧<sub>1</sub>・沸<sub>2</sub>→沸)

以上の 22 語は、1 語に 2 種以上の漢字表記があるが、使用数が少ないため、どの漢字表記が当時の常用漢字であるか、判断しにくい。1 語に 2 種以上の漢字表記がともに合点がついているのは、「イツハル」・「ホス」・「ワク」の 3 語である。「シリゾク」[下二]の漢字表記として、『今昔物語集』で、「去」が 1 例、「却」が 1 例、「退」が 1 例と記されているが、「シリゾク」[四]の漢字表記として「退」の 1 種の漢字表記に統一されていることにより、「シリゾク」[下二]の漢字表記「退」は、『今昔物語集』の常用漢字であることが分かる。また、前田本『色葉字類抄』に「退<sub>シリツク 他内反</sub>」(辞字 下 77 ウ 4)とあるように、「退」は、合点がついているので、「退」は『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であることが分かる。

また、『今昔物語集』で、「アザムク」に「欺」が 6 例に対して、他の漢字表記は 1 例ずつ使用されている。前田本『色葉字類抄』に「欺<sup>アザムク 去其反</sup>（他 32 字略）」とあるように、「欺」に合点がつき、第 1 掲出漢字であることを考えると、「欺」は『今昔物語集』の常用漢字であることが推測される。同じように、「クム」の漢字表記「組」は『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字であり、『今昔物語集』でも常用漢字である。「コホル」・「サマス」・「シケル」・「ノホス」の 4 語が、『今昔物語集』に使用されている 2 種以上の漢字表記は、ともに少ないので、どの字は『今昔物語集』の常用漢字であるか判断できないが、「コユ」（凍）・「サム」（覚）・「シケシ」（滋）・「ノホル」（上）は、『今昔物語集』の常用漢字であることにより、「コホル」「サマス」「シケル」「ノホス」の 4 語に使用されている「凍」「覚」「滋」「上」は、『今昔物語集』の常用漢字である可能性がある。これらの漢字表記は、『色葉字類抄』においても第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字である。よって、「コル」「サマス」「シケル」「ノホス」の漢字表記「凍」「覚」「滋」「上」が『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字である可能性がある。

また、「ヒロク」（弘）について、前田本『色葉字類抄』に掲載されていないが、形容詞「ヒロシ」の漢字表記「弘」は、「廣<sup>ヒロシ 古見反</sup>宏涵弘（他 18 字略）」とあるように、「弘」は「ヒロシ」と読むことにより、「ヒロク」と読んだ可能性もある。

「ツラナル」の漢字表記「烈」「連」などが、黒川本『色葉字類抄』に「連<sup>ツラナル</sup>聯列廉羅駢貫（他 6 字略）」（辞字 中 27 ウ 7）と、「ツラヌ」の漢字表記「烈」「連」などが、黒川本『色葉字類抄』に「連<sup>ツラヌ</sup>列貫（他 34 字略）聯（他 19 字略）」（辞字 中 26 オ 5）とあるように、「連」が、第 1 掲出漢字であることが分かる。「烈」という漢字が挙げられていないが、大系本『今昔物語集 1』（注 10）の補注 191 には、「烈の正字は列、連火を附することにより、恐らく視覚面において多くのものが並んでいるという意識を強調したものに違いない。（略）。例えば、古今集古写本の 1、筋切が春道列樹の「列」を「烈」に作ることによって代表されるように、中世一般の用字であった」とある。この説に従えば、『今昔物語集』に使用されている「烈・連」は当時の常用漢字と考えてよいことになる。

以上を踏まえて、『今昔物語集』におけるこれらの 22 語のうち、12 語に当時の常用漢字が使用されていることが明らかになった。

## 5 『今昔物語集』の漢字表記が「常用漢字表」の漢字表記と一部一致する動詞

以上、『今昔物語集』における 1 語に 2 種以上の漢字表記は、「常用漢字表」で 1 種の漢

字表記に統一されている動詞を検討してきたが、『今昔物語集』の 1 種の漢字表記は、「常用漢字表」で 2 種以上の漢字表記が対応している動詞と、『今昔物語集』の複数の漢字表記と、「常用漢字表」の複数の漢字表記と、一部一致している動詞がある。次はこれらの動詞について検討する。

### 5・1 『今昔物語集』における 1 種の漢字表記と「常用漢字表」における多種の漢字表記

『今昔物語集』で 1 種の漢字表記が対応している動詞は、「常用漢字表」で 2 種以上の漢字で表記されている語は以下のようなものである。

アタタム(温→暖・温) イタム(痛→痛・傷) オロス(下→降・下・卸) キハマル(極→窮・極) キハメル(極→窮・極・究) サガス(搜→搜・探) サハル(障→障・触) シヅム(静・鎮→静・鎮) タツヌ(尋→尋・訪) タタカフ(戦→戦・闘) トトノフ(調→整・調) トブ(飛→飛・跳) トマル(留→止・留) ナホス(直→直・治) オナル(直→直・治) ノバス(延→延・伸) ノブ(延→伸・延)[上二] ノブ(延→伸・延)[下二] ノル(乗→乗・載) ミル(見→見・診) ヨム(読→読・詠) ワヅラフ(煩→煩・患) ヲサマル(納→収・納・治・修)

以上の 23 語のうち、『色葉字類抄』に記載されている 16 例を挙げる。「イタム」は「痛<sup>イタム</sup> イタシ 漆澳傷 (他 27 字略) 悼 (他 23 字略)」(人事 上 6 ウ 5) とあり、「オロス」は「下<sup>オロス</sup> 舍移頓<sup>已上同</sup>」(辞字 中 67 ウ 5) とあり、「キハマル」「キハム」の 2 語は「極<sup>キハム</sup> キハマル 究窮 (他 30 字略)」(辞字 下 60 オ 1) とあり、「サハル」は「障<sup>サハル</sup> 之高反 サフ (他 14 字略)」(辞字 下 49 オ 7) とあり、「シツム」は「鎮<sup>シツム</sup> 静也<sup>殿同</sup>」(辞字 下 76 オ 6) とあり、「タツヌ」は「尋<sup>タツヌ</sup> (他 18 字略)」(辞字 中 8 オ 2) とあり、「タタカフ」は「戦<sup>タタカフ</sup> 闘 (他 4 字略)」(人事 中 4 オ 3) とあり、「トトノフ」は「調<sup>トトノフ</sup> 律愁<sup>又作整</sup> (他 41 字略)」(辞字 上 61 オ 4) とあり、「トブ」は「飛<sup>トブ</sup> (他 25 字略)」(辞字 上 59 オ 7) とあり、「ナホル」は「直<sup>ナオシ</sup> ナホル (他 4 字略)」(辞字 中 36 オ 5) ②とあり、「ノフ」[四]・「ノフ」[下二]の 2 語は「延<sup>ノフ</sup> 一期 延引也 書布臚述<sup>食書反著一也</sup> 伸 (他 26 字略)」(辞字 中 60 ウ 1) ②とあり、「ノル」は「乗<sup>ノル</sup> 實証食凌 二反 一馬也 騎載<sup>又奇</sup> (他 15 字略)」(辞字 中 60 ウ 4) ②とあり、「ミル」は「見<sup>ミル</sup> (他 55 字略)」(人事 63 オ 1) ②とあり、「ヨム」は「読<sup>ヨム</sup> 誦 (他 5 字略)」(辞字 上 116 ウ 5) とある。

「アタタム」「トマル」「ノバス」「ワヅラフ」「ヲサマル」の 5 語は、『色葉字類抄』に掲載されていないが、「アタタム」は「暖<sup>アタ、カニ</sup> アタ、カナリ 暎温<sup>焉渾反</sup> 煥燦<sup>煥燦</sup> 煦煖<sup>乃管反</sup> 一酒出也

(9 字略)」「(辞字 下 38 ウ 4)、「トマル」は「泊<sup>ハク</sup> トマリ」(地儀 上 54 ウ 1)、「ナホス」は「直<sup>ナオシ</sup> ナホル (他 4 字略)」「(辞字 中 36 オ 5) ㊟、「ノハス」は「延<sup>ノフ</sup> 一期也 延引也 書布<sup>ノフ</sup> 臚述<sup>食書反著一也</sup> 伸 (他 26 字略)」「(辞字 中 60 ウ 1) ㊟、「ワツラフ」は「煩<sup>ワツラヒ</sup> ワツラハシ (他 16 字略)」「(人事 上 87 ウ 2)、「ヲサマル」は「収<sup>オサム</sup> 式州反納蔵斂入道治<sup>一國一也</sup> 直利反<sup>一</sup> 搆理修<sup>一理也 二修</sup> (他 4 字略)」「(辞字 中 68 オ 4) ㊟から、5 語に使用されている漢字表記は、当時の常用漢字であることが推測される。

以上のように、「常用漢字表」に載っている動詞の漢字表記のうち、前田本『色葉字類抄』が編纂された当時で、既に常用漢字であるのは、「アタタム」「キハマル」「キハム」「シツム」の 4 語である。他の 18 語は、「常用漢字表」に載っている動詞の 1 種の漢字表記は、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字である。18 語は、『今昔物語集』で、1 種の漢字表記として使用されていることにより、『今昔物語集』の動詞の漢字表記は、当時の常用漢字が使用されていることが推測される。

但し、「サカス」の漢字表記として、前田本『色葉字類抄』に「涼<sup>サガス</sup> 曝<sup>一</sup> 米也<sup>揚</sup> 同」(辞字 下 49 オ 5) とあるように、「搜」の漢字は前田本『色葉字類抄』に掲載されていない。『古本節用集』においても「サカス」の項目に「搜」の字は掲載されていない。更に『文明節用集』に「サカス」という語は掲載されていない。但し、前田本『色葉字類抄』に「探<sup>サクル</sup> 他今日反<sup>搜</sup> 所鳩反 (他 3 字略)」「(辞字 下 49 オ 5) とあるように、「搜」「探」は「サクル」の漢字表記として掲載されている。「サカス」は『色葉字類抄』『古本節用集』『文明節用集』に掲載されていないことと、「サクル」に「搜」「探」の漢字表記があることを考えると、「サカス」は「サクル」の語から出てきた可能性がある。

## 5・2 『今昔物語集』の複数の漢字表記と、「常用漢字表」の複数の漢字表記と、一部一致している動詞

以下の動詞は、『今昔物語集』と「常用漢字表」が共に 1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞であるが、その動詞の漢字表記は完全に一致しない語である。

### 5・2・1 「常用漢字表」の漢字の種類の方が多い動詞

『今昔物語集』で、1 語に 2 種以上の漢字表記が対応されているが、「常用漢字表」で、それ以上の漢字表記が対応している動詞は、以下の 2 語である。

アグ(上・挙→上・挙・揚) カカル(懸・係・掛→掛・懸・架・係)

以上の 2 語は、『今昔物語集』より、「常用漢字表」の方が動詞の漢字表記の種類が増え

ている。前田本『色葉字類抄』に「揚<sup>アウ</sup> 時掌反 一名也 上<sup>上</sup> 槁颺<sup>颺</sup> 擲<sup>擲</sup> 居許反 (他 43 字略)」(辞字下 34 オ 7)・「繫<sup>カク</sup> カ、ハル 結懸眩桂慕詠撫綰羈綱掛 (他 28 字略)」(辞字 上 101 ウ 3) とあるように、「常用漢字表」に載っている 2 語の動詞の漢字表記は、前田本『色葉字類抄』に掲載されている(「係」以外の漢字表記)。

### 5・2・2 『今昔物語集』の漢字の種類の方が多い動詞

『今昔物語集』で、1 語に 2 種以上の漢字表記が対応されているが、「常用漢字表」で、『今昔物語集』の一部の漢字表記が掲載されている動詞は、以下の 9 語である。

アフ(会・合・相・値・逢・遇・遭→合・会・遭) アツ(当・充・宛→当・充) ウツ(打・討・罰・撃・擲→打・討・撃) ウレフ(患・憂・愁→憂・愁) オス(推・押・圧→推・押) カヘル(返・帰・還・→返・帰) ツク(付・着・託・詫・詫・就→付・着・就)[四] ツツシム(謹・慎・敬→慎・謹) ヲサム(収・治・修・納・摂→収・納・治・修)

以上の 9 語は、『今昔物語集』より「常用漢字表」の方が、漢字表記の種類が減っている。「常用漢字表」の「同字異訓」の漢字の用法」の凡例 2 で(注 11)で、「その意味を表すのに、二つ以上の漢字のどちらを使うかが一定せず、どちらを用いてもよい場合がある。又、一方の漢字が広く一般的に用いられるのに対して、他方の漢字はある限られた範囲に使われないものもある」と記されている。前述した『今昔物語集』における 1 語に 2 種以上の漢字表記が対応している動詞が、1 種の漢字表記に統一しようとする傾向があるが、漢字により微妙な違いがあるため、以上の語は、『今昔物語集』でも「常用漢字表」でも使い分けがある語として存しているのだろう。

### 5・2・3 両方とも一致する漢字表記があるが、異なる漢字表記もある動詞

『今昔物語集』に使用されている動詞の漢字表記の一部と、「常用漢字表」に載っている動詞の漢字表記の一部と一致するのは、以下の 28 語である。

アタタマル(温・煖→温・暖) アラハス(表・現・顕・証・験→表・現・著) アラハル(見・現・顕→現・表) アハス(合・会→合・併) ウタフ(歌・詠→歌・謡) オカス(犯・蒙→犯・侵・冒) オクル(送・後→遅・後)[下二] オコス(発・起・遣→起・興) オコル(発・起→起・興) カカル(懸・係・掛→掛・懸・架・係) カク(係・掛・懸→掛・懸・架) カハル(代・替・変・賛・→変・換・替・代) カヘス(返・還→返・帰) サス(点・指・差・着・→指・差・挿) シヅマル(閑・静→静・鎮) シボル(洩・搆→絞・搾) ススム(進・勸・勤→進・勸・薦)[下二] スル(摺・磨→刷・擦) ソ



ナフ(備・膳→備・供) タフ(堪・勝→堪・耐) ツク(付・着・即→付・着・就)[下二]  
 ツグ(次・嗣・継→次・接・継) ツトメル(務・勒・勤→努・務・勤) トル取・採・  
 捕・執・搭→取・捕・執 採・撮) ナラフ(習・学→習・倣) ハカル(計・量・謀・  
 議→図・計・測・量・謀・諮) フルウ(振・篩→振・震・奮) ヤブル(破・壊→破・  
 敗)[下二] ヨル(依・寄→因・寄)

以上の 29 語は、『今昔物語集』と「常用漢字表」の動詞の漢字表記の一部が一致する。  
 これらの語の漢字表記は、時代の変遷につれ、変わってきたものもあろうし、後の時代で  
 新しい意味が生じたので、新たに作られた漢字表記もあろうと考えられる。

## 6 終わりに

以上のように、『今昔物語集』における 1 語に 2 種以上の漢字表記がある語の漢字表記  
 について、『色葉字類抄』で、どのように掲載されているのか、「常用漢字表」でどんな語  
 が載っているのかについて、調査してきた。

結果として、『今昔物語集』における 1 語に 2 種以上の漢字表記が使用されている動詞  
 の漢字表記として、その最も多く使用されている 1 種の漢字表記は、『色葉字類抄』に掲  
 載されている第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字表記が多く使用されていることが  
 明らかになった。

特に、『今昔物語集』で使用数が 1 位である漢字と、「常用漢字表」の漢字と一致する場  
 合、『色葉字類抄』における第 1 掲出漢字かあるいは合点がついている漢字が使用される  
 比率が最も高いことも分かった。

また、『今昔物語集』の動詞の漢字表記は、1 種の漢字表記に統一しようという試みが見  
 られる。このことから、動詞の漢字表記が統一される傾向が早く院政時代に既に存してお  
 り、現代の表記に繋がっていくと言える。

一方、『今昔物語集』に使用されている常用漢字が、『色葉字類抄』に掲載されている合  
 点がついていない漢字・第 1 掲出漢字ではない漢字表記が使用されていることから、『今  
 昔物語集』における常用漢字は、『色葉字類抄』で示した常用漢字と異なる場合があるこ  
 とが分かった。

## 【注】

- 1 峰岸明「今昔物語集」における漢字の用法に関する一試論」(2) 一副詞の漢字表記を中

心に一」(『国語学』第 85 集、1971)

- 2 佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』(1974、明治書院)による。
- 3 中田祝夫・峯岸明共編『色葉字類抄研究並びに索引』(1964、風間書房)による。
- 4 国語研究会監修『現代国語表記の基準』(第 6 次改定版)(2001、ぎょうせい)による。
- 5 正宗敦夫編纂・校訂『類聚名義抄』(第 1 巻と第 2 巻)(1970、風間書房)による。
- 6 中田祝夫著『古本節用集六種研究並びに総合索引』(1968、風間書房)による。
- 7 中田祝夫著『文明本節用集研究並びに索引』(1970、風間書房)による。
- 8 山田孝雄編『今昔物語集』(1)「1959、岩波書店」の補注 309 による。
- 9 諸橋轍次著『大漢和辞典』(5)(1967、大修館書店)による。
- 10 山田孝雄編『今昔物語集』(1)「1959、岩波書店」の補注 191 による。
- 11 注 4 に同じ。

### 第 3 章 動詞の漢字表記についての個別的研究

#### 第 1 節 「アワツ」の漢字表記についての史的研究

##### 1 はじめに

動詞の漢字表記について、現在「かう」に対して、「買う」のように 1 種類の漢字で固定しているものもあれば、「あげる」に対して、「上げる・挙げる・揚げる」のように複数の種類の漢字が使用されているものもある。ここで取り上げる「アワツ」(注 1)は、前者に示したような動詞に対して、1 種類の漢字が固定しているものの一つである。

「アワツ」は、古語で、現在の学校教育では「慌てる」と表記される。「常用漢字表」(注 2)においても「アワツ」の項に「慌」の字だけが収められている。しかし、明治時代に遡ると、森鷗外の『雁』では「慌」の字だけが使われているが、夏目漱石の『三四郎』では「慌」という字はなく、「周章」「狼狽」という漢字が使われている。このように明治時代の「アワツ」の表記に使う漢字と現在の使用漢字との間に違いがある。また、同じ明治時代でも、作家、作品によって、「アワツ」の表記の違いがうかがえる。

それでは、「慌」は「アワツ」の漢字表記として、いつからどのような資料で使われ始めたのか。時代によって、「アワツ」はどのように表記されてきたのか。どんな理由で「慌」が使用され始めたのか。表記によって意味が違ってくるのだろうか。

先行研究を調べてみると、『基礎日本語辞典』(注 3)と『日本語基本動詞用法辞典』(注 4)に、「アワツ」の語義記述があった。「アワツ」の意味について、『基礎日本語辞典』では「思わぬ事態、心の準備ができていない状況が突発して驚きまごつくこと」と述べられ、『日本語基本動詞用法辞典』に「不意を突かれて落ち着きを失ってしまう」と述べられている。確かに現代語の「アワツ」の意味には、思わぬ事態で冷静さを失うといったマイナスのイメージがある。「アワツ」の意味を歴史的に見るとどうか、また漢字表記と意味とどのように関連しているのだろうか。歴史的な観点から、より詳細に考察してみよう。

##### 2 古辞書における「アワツ」の漢字表記

各時代に編纂された古辞書は、それぞれの時代の代表的な漢字を掲載していると考えられる。従って、古辞書に掲載された「アワツ」の漢字表記を見ることによって、歴史的な漢字表記の変遷を概観することが可能である。そこでまず古辞書における「アワツ」の漢

字表記について見てみたい。

## 2・1 『色葉字類抄』における「アワツ」の漢字表記

『色葉字類抄』(前田本)には、「アワツ」に対して、「繞・遽・章・睭・額・狼狽・周章・額焉・淡薄・澆薄・惴惶・舉動」の12種類の漢字表記が記載されている(注5)。意味としては、「繞・遽・章・睭・額・狼狽」に対して、「驚也」(人事 下巻30丁表1行目)と説明されている。

## 2・2 『類聚名義抄』における「アワツ」の漢字表記

『類聚名義抄』(注6)には、「アワツ」と読む漢字として、「観智院本」に「遽・睭・額・狼狽・澆・惴・惴・惶・醜・醜・周章」の11種類、「蓮成院本」に「遽・睭・醜・醜・周章」の5種類、「高山寺本」に「遽・睭」の2種類、「西念寺本」に「遽・周章」の2種類がある。「遽」「周章」の2字は、『色葉字類抄』においても記されているので、当時の「アワツ」の表記として認められていたと考えられる。

## 2・3 節用集における「アワツ」の漢字表記

古本節用集	周章 周惴 遽而
文明本節用集	周章 造次
恵空編節用集大全	周章 忪 遽
倭玉篇	惴 章 遽
合類節用集	周章 馥焉
白河本字鏡集	惴 惶

節用集は、日常で使用する辞書として、編纂されたものである。これを見ることによって、当時の代表的な漢字が分かる。左の表は古辞書大系(中田祝夫編)に基づき作成したものである。表に示すように「周章」が最も多く掲載され、次いで「遽」

が多い。意味としては、『古本節用集』『文明本節用集』に「驚怖意也」と記されている。このことから「アワツ」に「驚怖」の意味のあったことが分かる。

更に「アワツ」の漢字表記として、「周章」「周惴」「遽而」などの2字の表記が多いことも、「アワツ」の表記の特徴であろう。「周章」という表記は各節用集に掲載されているので、当時一般的に認められていた表記であったのだろう。

以上のように、「周章」が多くの辞書に記されているが、常用漢字表にある「慌」という字はまだ古辞書に認めていない。『白河本字鏡集』によれば、「慌」は、「タチマチ」「タフロカス」「ウシ」「マトシ」と読まれており、「アワツ」の訓は挙げられていない。

## 3 上代・中古における「アワツ」の漢字表記

上代の作品では、まず『古事記』『日本書紀』『続日本紀』を調べたが、『日本書紀』『続

日本紀』に「アワツ」と読む可能性がある漢字が使用されていた。

(1) 物部守屋大連、邪睨みて大きに怒る。是の時に、押坂部史毛屎、急て来て、密に大連に語りて曰はく、(『日本書紀』巻21)

(2) 人皆惶え遽てて計を為すことを知らず(『続日本紀』巻33)

(1)の「急」は、『日本書紀』(日本古典文学大系)では「アワツ」として読んでいるが、『色葉字類抄』等の古辞書に「アワツ」と読める漢字として掲載されていないので、「アワツ」と読むか、「イソグ」と読むか、判断がつかない。ここでの「急」の意味は、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。(2)の「遽」は、『色葉字類抄』等の古辞書に、「アワツ」の読みが掲載されているので、「アワツ」と読む可能性が高い。ここでの「遽」は、「人皆惶え」とあることから、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味であるが、「どうしたらいいか分からない」という心的側面が強いと考えられる。

また中古の和文では、『竹取物語』、『伊勢物語』、『源氏物語』などの仮名文学を調べたが、漢字表記された「アワツ」は認められなかった。

#### 4 中世における「アワツ」の漢字表記

##### 4・1 『今昔物語集』における「アワツ」の漢字表記について

中世の作品で、「アワツ」の漢字表記が最も多く使用されていたのは『今昔物語集』(注7)であった。『今昔物語集』には、「アワツ」の漢字表記として「遽・忿・澆・周・周章」の5種類の漢字が使われている。「遽」が1例、「忿」が1例、「澆」が5例、「周」が7例、「周章」が2例である。

(3) 聖人、此レヲ見ルニ、心モ遽テ肝モ迷ヒヌ。年来ノ行ヒモ忽ニ壊レテ、念ジ不可過ズ。(巻10・34 聖人犯后蒙國王咎成天狗語)

「遽」を「アワツ」と読むことは『色葉字類抄』等の古辞書に書かれている。(3)の用例は「山で修行している聖人が、後の美しい姿を見て、心動かされる」場面である。従って、ここでの「遽」は、『色葉字類抄』の記載に「驚也」とあるように、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

(4) 兄ノ少将、(中略)被免ツレバ返来タルニ、忿テ、枕ヲ被賛ニケレバ魂ノ入り方ノ違テ、活ル事ヲ不得ズシテ迷ヒ行ク也。(巻15・42 義孝小将往生語)

この「忿」は、『色葉字類抄』などの古辞書には、「アワツ」と読むことができる漢字

として挙げられていない。但し、『新撰字鏡』では、「忿」に対して「遽也急也」と記載されていることから、「忿」を「アワツ」と読む可能性もあると考えられる。ここでの「忿」の意味は、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味ではなく、「突然の出来事に対して、急いで行動する」という意味である。

- (5) 而ル間、夜半許ニ其ノ家ニ火出来ヌ。人皆澆テ、先ヅ他ノ財ヲ取出サムト為ル間ダニ、此ノ経ヲ忘レ奉リニケリ。(巻 12・30 尼願西所持法花經不焼給語)
- (6) 清尋ガ下テ居タルヲ見テ、或ハ澆テ立リ、或ハ走り返リ去テ云ク、(巻 15・15 比叡山僧長増往生語)
- (7) 本ノ僧ノ云ク、「疾ク隠テ此ノ壺屋ニ入テ壁ヨリ臨ケ」ト澆テ云ヘバ、云フニ随テ這入テ戸ヲ閉テ壁ノ穴ヨリ臨ケバ、(巻 19・19 東大寺僧於山値死僧語)

(5)から(7)は、5例ある「澆」の用例のうちの3例を示したものである。(5)は「突然の出火で驚き、度を失う」場面である。(6)は「国人たちが追い払おうとした僧の前に、尊敬している清尋が座っている姿を突然見たので、驚く」場面である。(7)は「地獄の責めを受けている僧が、責めの時刻が来たことに驚き、生きている僧に『早く隠れろ』と言う」場面である。(5)(6)(7)の「澆」は、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

- (8) 此ル悪人、俄ニ此ク髻ヲ切ツレバ、何ナル事出来ヌラムトテ、講師モ周テ物モ不云ズ、其ノ庭ニ居タル者共モ唳リ合タリ。(巻 19・14 讃岐國多度郡五位聞法即出家語)
- (9) 此生贅ノ男、胯ニ夾タル刀ヲ取マヽニ、俄ニ起走テ、一ノ宝倉ノ猿ニ懸レバ、猿周テ仰様ニ倒タルニ、(巻 26・8 飛弾國猿神止生贅語)
- (10) 「老法師ハ早ウ死テ臥セリ。此ハ何ガセムト為ル」ト、周タル氣色ニテ云ヘバ、住持驚テ、(巻 29・17 攝津國来小屋寺盜鐘語)

(8)(9)(10)は7例ある「周」の用例のうち、3例を示したものである。「周」は『色葉字類抄』等の古辞書に「アワツ」の漢字として記載されていなかった。但し『古本節用集』(黒本本)では、「周章」に「アワテフタメク」と記されていることから、「周」を「アワツ」と読む可能性が考えられる。

(8)は「五位が急に髪を切って出家を希望したので、講師が驚いている」場面である。(9)は「生贅の男が突然切りかかってきたので、猿が驚いて仰向けに倒れている」場面である。(10)は「老法師が死んでいる姿を見て、金槌の僧が『どうしようか』と驚いた様子で

住持に告げている」場面である。(8)(9)(10)の「周」の意味は、共通して「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

- (11) 軍調へ居タル程ニ、家ノ廻ニ有ル郎等走ラセ来テ告テ云ク、「常陸殿ハ此ノ海ノ中ニ、浅キ道ノ有ケルヨリ、若干ノ軍ヲ引具シテ、既に渡リ御スルハ。何ガセサセ給ハムト為ル」ト、横ナハリタル音以テ周章云ケレバ、(巻 25・9 源頼信朝臣責平忠恆語)

「周章」は「アワツ」の表記として各辞書に記載されている。(11)の「周章」は、「敵が海を既に渡り切っているということを知って、忠恒が驚く」場面である。(11)の「周章」も、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

以上の例のように、『今昔物語集』には、「遽」「忿」「澆」「周」「周章」の5種類の漢字が「アワツ」の表記として使用されていた。意味は、「忿」が「突然の出来事に対して、急いで行動する」という意味で使用されている他は、「遽」「澆」「周」「周章」が全て「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味で使用されている。

『宇治拾遺物語』では、「アワツ」の用例があるが、全て仮名表記であった。『発心集』『古今著聞集』には、「アワツ」がなかった。『沙石集』(慶長十年古活字本)に「アワツ」があるが、全て仮名表記である。

#### 4・2 軍記物語における「アワツ」の漢字表記

『延慶本平家物語』には、「アワツ」の例は15例ある(注8)。そのうち11例が「周章」と書かれているが、他の4例は片仮名表記である。

- (12) 六月廿五日、俄ニ親王ノ宣言ヲ下サレテ、ヤガテ其夜位ヲ譲奉ラセ給ニキ。ナニトナク上下周章タリシ (第1本 主上々皇御中不快之事)
- (13) 廿四日亥時計ニ忍テ六ハラへ行幸ナル。例ヨリモ人ズクナニテ、事イソガシク、人々周章タリ。(第3末 惟盛北方事)

(12)(13)は、11例のうち2例を示したものである。(12)は、「二条院が急に位を王子に譲ったので、家臣たちが驚く」場面である。(13)は「法皇が急に行幸したので、周囲の人々が驚く」場面である。このように、「周章」は「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。この点で、『今昔物語集』の「アワツ」と、意味に違いはない。

「アワツ」の表記として『今昔物語集』に5種類の漢字があったのに対して、『延慶本平家物語』は「周章」だけである。各節用集で、「周章」が共通して挙げられているように、

「周章」の表記が中心になっていくのは、中世の「アワツ」の表記の特徴であると考えられる。

また『源平盛衰記』（慶長古活字版）でも、「アワツ」の漢字表記としては、「周章」だけが使われている。

#### 4・3 抄物における「アワツ」の表記

『四河入海』では、「周章」について、次のような説明がある。

(14) 周章ト云ハアワタ、シクイソカハシイノ様ナ心ソ恐懼ノ形ソ法華ノ和点ニモ周章トアワテ、ト讀ソ(19の2)

『四河入海』では、「周章」を「周章トアワテ」のように文選読みしている。また「周章」の意味として、「アワタ、シクイソカハシイノ様ナ心ソ恐懼ノ形ソ」と説明している。よって、ここでの「周章」も、先に『今昔物語集』や『延慶本平家物語』の「アワツ」の意味と同じ内容が述べられている。

以上の調査を通して、中世では「遽・忿・澆・周・周章」5種類の漢字が「アワツ」の表記として『今昔物語集』に存在しているが、その後の作品では、「周章」のみ使われている。「慌」という表記はまだ使われていない。「アワツ」の意味としては、全て「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味であった。

「アワツ」の意味には、「心的側面」と「外的側面」といった二つの要素が存する。「心的側面」とは、「突然の出来事に対して驚く」という側面であり、「外的側面」とは、心的側面が「冷静さを失う」といった行動に表されるという側面である。用例を見ると、(3)「心モ遽テ肝モ迷ヒヌ」のように心的側面の強い「アワツ」と、(10)「周タル気色」のように外的側面の強い「アワツ」が存在する。

#### 5 近世における「アワツ」の漢字表記

近世の作品から、「アワツ」を検索した結果、読本とそれ以外の作品の間で、「アワツ」の表記に違いが見られた。従って、ここでは、読本とそれ以外の作品という観点から、近世の「アワツ」の漢字表記について述べてみたい。

##### 5・1 読本以外の作品における「アワツ」の漢字表記

江戸時代初期の井原西鶴の作品で、「アワツ」は、『武道伝来記』に「周章」が3例見られる。



- (15) もはや敵は、掌のうちに有。周章る所にあらず。(巻6 神木の咎めは弓矢八幡)
- (16) 関内まづ待てくれよと、半分頭剃かけしを、周章て立さはぎ、天井の板の厚き所はないかと逃廻り、(巻6 毒酒を請太刀の身)
- (17) 夫婦待かけて、さきに持せし挑灯切落せば、あやめもしらぬ五月闇、此太刀風に周章テ、若党三人、惣堀へ転び落けるに、(巻7 我が命の早使)

(15)は「突然の敵に驚く」場面である。(16)は「突然の雷の音に驚く」場面である。(17)は「突然切りつけられたことに驚く」場面である。従って、(15)(16)(17)とも「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。このように、近世の「アワツ」の意味は、中世と同じである。

井原西鶴の他の作品には、「アワツ」の漢字表記の例は見出せなかった(注9)。

また、江戸時代初期の作家である近松門左衛門の作品では、「アワツ」の例は認められたものの、全て仮名表記だった。

江戸時代初期では、他に「諸国新百物語」(注10)において「周章」が1例認められる。

- (18) ある日心ち煩はしく、俄に氣をとり失ひて伏したりしを、人々驚き安心散丁子円など口に入るゝに、齒を喰ひつめてあかず。いかゝはせんと周章て騒ぎし。(巻4 命は入相のかねの奴)

(18)は「男が突然氣を失って、人々が驚く」場面である。ここでの「アワツ」も「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

このように江戸時代初期の作品では、漢字表記された「アワツ」の例は少ないものの、全て「周章」と書かれており、中世からの漢字表記の流れに沿っている。意味も中世の「アワツ」の意味と変わらない。

## 5・2 読本における「アワツ」の漢字表記

### 5・2・1 江戸時代初期読本における「アワツ」の漢字表記

都賀庭鐘の『英草紙』(注11)から読本が本格化したと言われているので、彼の作品で「アワツ」はどのように記されているのか、『英草紙』『莠句冊』などの作品を調べた。

- (19) 思ひがけなく驚けども、女なれば手むかひもならず、雨点のごとくに打てれて、慌てて身を縮め、(『英草子』第1巻 馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話)
- (20) 重る政事に日も入て、ヲクリ宮燈照す諸侯の面々。猶退朝の御暇も、内殿の方騒しく、内豎の官人周章よばゝり、(『呉服文織時代三国志』第1)

(21) 滴たる涎沫泉のごとく、毒気霧となりて顔を打つ。兩人魂を飛し惶逃出るも毒気に薰ぜられ、御階のもとに倒れ伏て正気なし。(『莠句冊』第 3 巻 絶間池の演義強頸の勇衣の智あり話)

(22) 厨の尼も忙て、油を尋て水をさし、足定らず。(『義経磐石伝』巻 3 先の太后剃髪幽棲す。六道物語虚妄といふ評)

都賀庭鐘の作品では、「アワツ」の漢字表記として、「周章」の他、「慌」「惶」「忙」の漢字が認められた。(19)の「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」は『全像古今小説』(1985、ゆまに書房)所収の「金玉奴棒打薄情郎」を翻案したものである。(19)に相当する「金玉奴棒打薄情郎」の箇所は次のようである。

(23) 肩背上棒如雨下打得叫喊不迭正没想一頭處莫司戸被打慌做一堆

(23)のように、「金玉奴棒打薄情郎」の対応箇所には「慌」の字が使われている。意味も(19)の「慌」と同じである。従って、ここでの「慌」の表記は中国語の表記の影響を受けたと考えられる。(19)の「慌」は、「馬場が突然下女たちに打たれて、驚いて身を縮める」場面である。(20)の「周章」は、「内堅の官人が伝国の玉璽が紛失したことに気づいて、驚く」場面である。(21)の「惶」は、「突然の化け物の出現に驚く」場面である。(22)は「突然賊が庵に入ったことに、尼たちが驚く」場面である。4 例とも「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

また江戸時代初期の読本である上田秋成の『雨月物語』には「慌忙」と表記された「アワツ」が認められた。「慌忙」は『大漢和辞典』に載せられ、また現代中国語でも使う語であり、上田秋成も中国語の表記の影響を受けて、「慌忙」と表記したと考えられる。

(24) 左門慌忙とゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらず。(菊花の約)

(25) 雲摺墨をうちこぼしたる如く、雨篠を乱してふり来る。翁人翁人慌忙惑ふをまつろへて人里にくだる。(蛇性の姪)

この他、『初期江戸読本怪談集』(注 12)には、「慌」「周障」「遽」と表記された「アワツ」が認められた。

(26) まちかく人足多ければ、軍太は慌て逃去たり。(『奇伝新話』巻 2 禍善福悪建部軍太為発跡)

(27) 官治ますます怖れ周障て、涙を流していふは、(『怪異前席夜話』巻 4 枉死の冤魂讐を報ずる話)

(28) 鮮血数升をくだす。其時通人、大に遽たるに女さらに神色を変えずしていふ、(『一

二草』巻2 当麻通人盗人蛛子媛に魅とらるゝ話)

(26)は、「多くの人が近づいてきたので、軍太が驚く」場面である。(27)は、「官治が突き落として殺した女より、復讐を受けるに違いないことを僧より聞いて、驚く」場面である。(28)は、「通人が幽霊の女から、鮮血が流れたので、驚く」場面である。従って、3例とも「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

以上の例から見ると、近世では、「アワツ」は、「周章」だけでなく、種々な漢字で表記されていたことが分かる。「慌」は江戸時代初期の読本から使用され始めたようである。

### 5・2・2 江戸時代後期読本における「アワツ」の漢字表記

江戸時代後期の読本として山東京伝と曲亭馬琴の作品を取り上げる。まず山東京伝の作品を見よう。

(29) 勘平窺罷内に入て、「勘平今日帰来り候ひぬ」と叫ければ、老婆大に慌てゝ出走、  
(『忠実水滸伝』)

(30) 後より老女韋駄天走に追来るにぞ、「こはいかにすべき」と瞭迷ひけるが、老女は已に追つきて(『本朝酔菩提全伝』)

(31) 「すはすは修羅の鼓の響くなり。閻王のむかひ来るべし。又呵責にあひ苦しむことか」といひつゝ、周章まどひて立けるに、(『本朝酔菩提全伝』)

「アワツ」の漢字表記として「慌」「瞭」「周章」が認められている。(29)は「勘平が密かに家に入り、突然声を出したので、老婆が驚く」場面である。(30)は「緑児が老女の所から逃げ出したが、老女に追われ、『どうしようか』と冷静さを失う」場面である。(31)は「閻王が来ることを恐れて、驚く」場面である。(29)(31)の「慌」「周章」が「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味であるが、(30)の「瞭」は「突然のことに、冷静さを失い、どうすればいいか分からない」という心的側面の強い意味に使われている。

次に曲亭馬琴の『椿説弓張月』『夢想兵衛胡蝶物語』などの作品に使われた「アワツ」について述べる。

(32) 蕉火てらして来るものありけり。阿公はこれを見て、ますます瞭(『椿説弓張月』続編巻5)

(33) ちよこちよこ走り忽地に、跌き輾ぶ稚児が、その儘わつと泣出せば、母親遽てゝ走り出で、(『夢想兵衛胡蝶物語』後編巻1)

(34) 打れて痛楚に堪ざりけん、刀を戛哩と落したる、隆成慌て挿添の、小刀を抜ん、  
(『開卷驚奇俠客伝 第4集巻2』)

曲亭馬琴の作品(注13)では、「アワツ」の漢字表記として、「慌」「遽」「慌忙」「着急」の漢字が認められる。このうち、「慌」は馬琴の作品に多く使用され、「アワツ」を表記する主要な漢字となっている。

(32)は「阿公が、蕉火が近づいてきたことに驚く」場面である。(33)は「子供が転び泣き出したので、母親が驚く」場面である。(34)は「隆成が姑摩姫に打たれて、刀を落としたことに驚く」場面である。(32)の「睭」は、「突然起きたことに対して驚き、どうすればいいか分からない」という心的側面の強い意味であるが、(33)(34)の「遽」「慌」は、「突然起きたことに対して、冷静さを失う」という意味である。

以上から「アワツ」の漢字表記として「慌」は、近世の読本で使われ始め、江戸時代末期まで広く読本に使用されてきたことが窺われる。中国の白話小説の影響を受けた読本で、「慌」の例が使われ始めたことから、「慌」の表記は、中国語白話表記の影響を受けたと考えられる。

## 6 近代における「アワツ」の漢字表記

### 6・1 幕末から明治初期にかけての新聞における「アワツ」の漢字表記

『幕末明治初期新聞』(注14)により、幕末から明治初期にかけての新聞から、「アワツ」の漢字表記された例を探したところ、「周章」が3例認められた。

(35) 旅籠屋に大きに驚き、周章て後より潜りを、内よりしつかり押へつ表の容子を  
うかゞふに、(海陸新聞)

(35)は「官軍方と関東方の武士が、喧嘩を始めたので、旅籠屋が驚く」という場面である。「周章」の意味は、前に述べたように「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

新聞は多くの民衆が読み、正確に内容を伝えるものなので、当時の一般的な表記がなされていると考えられる。検索した限りでは、まだ「慌」の字は新聞において使われていないようである。

### 6・2 明治時代の作品における「アワツ」の漢字表記

明治初期の作家である松村春輔らの書いた『春雨文庫』(明9～)(注15)には、「アワツ」

の表記として「周章」が使われている他に、「慌」も使われている。

- (36) お聞が酌を為やうとして何様したはづみか手が外れ徳利を其処へ取落せばお聞ハ慌て我が前だれにて溢れし酒を拭きながら

(36)は「お聞が徳利を落としたことに驚く」場面である。意味も「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

仮名垣魯文の小説『高橋阿傳夜刃譚』(明12)に、「アワツ」の表記として「周章」が使われている。

- (37) 飛ぶが如くに走来る者ハたしかに追人と尼君ハ身を震ハして足も空お傳ハ周章 尼君の手を引立て(第17回 風雲花月の光榮を障碍ぐ)

(37)は「追手が来たので、お傳が驚く」場面である。意味は「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」である。「慌」という漢字は認められなかった。

坪内逍遙の『春風情話』(明13)と『当世書生気質』(明18)に、「慌」の使用例が認められた。『当世書生気質』には、「狼狽」と表記した例も1例認められた。

- (38) 「維廉」は少しく慌てたる面地にて、顔赤らめつゝ言葉せはしく、(『春風情話』第1編)

- (39) 倉「菓子なんぞはいらない」トいひつゝ、慌てゝ煙草入れを、懷のうちへおしこみ、(『当世書生気質』第3回)

「慌」の意味は、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」で、これまでの意味と同じである。

その後、二葉亭四迷や夏目漱石の作品にも、「狼狽」が使われていた。

- (40) 転がされては大騒ぎして起返り、又ヨチヨチと這ひ寄つて、ポツチリと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思う柔かな乳首を探り当て、狼狽てチウと吸付いて、小さな両手で揉み立て揉み立て吸出すと、(『平凡』11)

(40)の「狼狽」には、「冷静さを失う」という意味はなく、「急いで行動する」という意味であり、現代語の「アワツ」とは意味を異にする。

坪内逍遙以降、二葉亭四迷や森鷗外、尾崎紅葉らの作品には、「慌」が多く使用されている。

- (41) 玄関から大きな声で、「只今！」といひながら、内へ駈込んで、卒然本包を其処へ抛り出し、慌てゝ弁当箱を開けて、(『平凡』15)

- (42) お玉が立ち上がるとたんに、女中が慌てゝ履物を直しに出た。(『雁』11)

(43) 渠は、(中略)慌て、枕の下に財布を取出して見た。(『赤痢』)

(41)(42)(43)の「慌」の意味は、今までと同じく、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」という意味である。

このように、「慌」という字は、明治初期の作家である松村春輔、坪内逍遙、二葉亭四迷らの作家以降、「アワツ」の漢字表記として徐々に使用されるようになった。但し、夏目漱石のように、「慌」という字を使用せず、「周章」「狼狽」を使う作家もいた。「アワツ」の漢字表記として、古代から使用され続けてきた「周章」も引き続き使用されている。

## 7 おわりに

以上、「アワツ」の漢字表記について、意味と関わらせながら、時代を追って述べてきた。

『色葉字類抄』には、「繞・遽・章・睭・顙・狼狽・周章・顙焉・淡薄・澆薄・悼惶・舉動」の12種類の漢字表記が載せられているが、実際に文献から見出せたのは、「遽」「周章」「狼狽」である。『続日本紀』には、「遽」が見られ、「周章」は、中世に入ってから、徐々に使われ始め、その後の「アワツ」の表記の中心的位置を占めるようになり、明治時代まで使われ続けた。「澆」「周」は、『今昔物語集』では「アワツ」の漢字表記として多く使われているが、各辞書や『今昔物語集』以後の作品に見出せなかった。

江戸時代に入り、特に読本において、「慌」が使われ始め、江戸時代の読本に多く使用される。読本は中国白話文学の影響を受けており、「慌」の表記は、中国語の表記の影響を受けたと考えられる。特に「金玉奴棒打薄情郎」と、この翻案である「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」の同一箇所、いずれも「慌」が使われていることは、注目される。

明治時代になって、ごく初期ではまだ「慌」は使用されなかったが、松村春輔、坪内逍遙や二葉亭四迷、森鷗外らの作品に多く見られるようになる。

一方、「周章」も明治時代の作品に認められるものの、その使用数は減少する傾向が見られる。明治時代に「アワツ」の表記は、徐々に「慌」へと移行していったものと思われる。

「アワツ」の意味は、古来から現代に至るまで、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」で、変化は認められない。但し「遽」「睭」が「突然のことに、冷静さを失い、どうすればいいかわからない」という心的側面の強い意味に使われたり、「狼狽」が「冷

静さを失う」という意味ではなく、「急いで行動する」という意味に使われたりといったように、漢字による使い分けも存した。

「アワツ」の表記の歴史を調べてみて、日本語の表記史において、江戸時代の読本の影響が少なからず存在したことが分かった。今後は漢字表記の歴史における読本の影響について、更に考察を深めたいと考えている。

### 【注】

- 1 古典語の「アワツ」、現代語の「アワテル」は、ともに「アワツ」で表記した。
- 2 国語研究会監修『現代国語表記の基準』（第6次改定版）（2001、ぎょうせい）による。
- 3 森田良行『基礎日本語辞典』（7版）（1996、角川書店）による。
- 4 小泉保〔ほか〕編『日本語基本動詞用法辞典』（4版）（1996、大修館書店）による。
- 5 『色葉字類抄』（前田本）には、「澆」に「衰也」とある。「澆」は、「アワヅ」と読まれ、意味も「衰也」で、「アワツ」とは別語である。本論では、「アワヅ」は考察の対象外としたが、『色葉字類抄』の「アワツ」に掲載された12種類の語のうち、「淡薄」「澆薄」は、「衰也」という意味で、『色葉字類抄』は「アワツ」と「アワヅ」を混同して掲載している可能性がある。
- 6 草川昇編『五本対照類聚名義抄和訓集成』（2000、汲古書院）による。
- 7 山田孝雄編『今昔物語集』（日本古典文学大系 22～26）（1959～1963、岩波書店）による。
- 8 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』（索引篇）（1996、勉誠社）による。
- 9 新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』（自立語索引編第1巻～第3巻）（2000～2003、勉誠出版）による。
- 10 叢書江戸文庫の『百物語怪談集成』と『続百物語怪談集成』を調べたところ、『続物語怪談集成』所収の「諸国新百物語」に、「アワツ」の漢字表記として「周章」が1例認められた。
- 11 中村幸彦校注・訳『英草子・西山物語・雨月物語・春雨物語』（新編日本古典文学全集 78）（1995、小学館）による。
- 12 大高洋司・近藤瑞木編『初期江戸読本怪談集』（2000、国書刊行会）による。  
用例に示した他に、『怪異前席夜話』には、「愴慌」が1例、「遽」が1例と、『菟道園』には、「慌」が1例認められた。
- 13 用例に示した他に、『椿説弓張月』には、「慌」が3例、「遽」が3例、「周章」が1例

と、『開卷驚奇侠客伝』には、「慌忙」「着急」「慌」「遽」が 1 例ずつ認められた。

14 明治文化研究會『幕末明治新聞全集』(1934～1935、大誠堂)による。

15 『明治開化期文学集 1』(1966、筑摩書房)による。



## 第2節 サ変動詞「ス」の漢字表記「仕・為」についての史的研究

—サ変動詞の漢字表記「仕」の成立過程を中心に—

### 1 はじめに

サ変動詞「ス」は、日本語の基礎語であって、使用頻度は、全語彙の中で一位を占めている(注1)。「ス」の連用形「シ」は、単独でも、複合動詞・複合名詞などの前接語としても使用されるので、「シ」の使用は極めて高い率で現われている。

『広辞苑』(注2)において、「仕上げ」「仕事」のように、多くの「仕～」の語が記されており、「文部省 公用文 送り仮名用例集」(注3)においても、「シ～」の語が27語挙げられている。時代を遡ると、『今昔物語集』で、サ変動詞「ス」、連用形「シ」は「為」で表記されるが、連用形については、「仕」が表記されたかどうか疑問が残る。

ここでは、サ変動詞「ス」連用形の「シ」、複合語「シ～」が漢字「仕」と表記され始めたのは、いつからどのような資料で使われたのか、サ変動詞の表記を問題として、連用形表記に注目し、「為」と「仕」の関係について考察する。

### 2 辞書におけるサ変動詞連用形の漢字表記

#### 2・1 平安・鎌倉時代

辞書は当代の語を記すものであるから、各時代に書かれた辞書について、サ変動詞の漢字表記を調べることにより、「仕」の使用を時代的に概観することができる。『字鏡集』『色葉字類抄』『類従名義抄』などの辞書を調べたが、サ変動詞の漢字表記として「為・欲」があったが、「仕」が記されていなかった。その後の『名語記』には「しわざ如何、答、しわざは為態也」とあり、サ変動詞の連用形「シ」が「為」と表記されている。「仕」の例は認めていなかった。「仕合」「仕送」などのサ変動詞連用形が複合動詞・複合名詞の前接語となる例は掲載されていなかった。また、「為合」「為送」のように「為」を使った複合動詞、複合名詞も掲載されていなかった。

このように、鎌倉時代の辞書からは、サ変動詞連用形の漢字表記として、「仕」を使った例は見出すことができなかった。

#### 2・2 節用集

##### 2・2・1 『古本節用集』

『古本節用集』(注4)として伊京集、明応五年本、天正十八年本、饅頭屋本、黒本本、易

林本を見てみると、それらには「シ」の連用形として「無<sup>シタナシ</sup>為方」、「仕<sup>シスゴシ</sup>過」、「仕<sup>シスユル</sup>居」、「仕<sup>シタツル</sup>立」、「<sup>シタテ</sup>為立」の 5 語が出ている。「シ」の漢字表記として、「シガタ」「シタテ」の「シ」が「為」と表記され、「シスゴシ」「シスユル」「シタツル」の「シ」が「仕」と表記されている。このことから、室町時代ではサ変動詞の連用形「シ」は、複合動詞・複合名詞の前接語として、「為」だけでなく、「仕」も使われていることが分かる。

## 2・2・2 『文明本節用集』

『文明本節用集』(P 935)(注 5)には以下の語が載せられている。

<sup>シアグル</sup> 仕拳揚上	<sup>シノボル</sup> 仕登昇	<sup>シサグル</sup> 仕下	<sup>シカケル</sup> 仕懸	<sup>シスユル</sup> 仕居	<sup>シタケル</sup> 仕著	<sup>シスマス</sup> 仕澄	<sup>シアワスル</sup> 仕合
<sup>シゴト</sup> 仕事	<sup>シハタス</sup> 仕果	<sup>シコナウ</sup> 仕毀	<sup>シソズル</sup> 仕損	<sup>シミグル</sup> 仕亂	<sup>シアハス</sup> 仕置	<sup>シクル</sup> 仕除	<sup>シスゴス</sup> 仕過
<sup>シヨメル</sup> 仕寄	<sup>シナラウ</sup> 仕習	<sup>シトノウ</sup> 仕調	<sup>シカマユ</sup> 仕構	<sup>シナシ</sup> 仕成	<sup>シタクル</sup> 仕分	<sup>シキル</sup> 仕切	<sup>シハナフ</sup> 仕放
<sup>シマワス</sup> 仕廻	<sup>シマイ</sup> 仕舞	<sup>シカヘス</sup> 仕返	<sup>シモドス</sup> 仕戻	<sup>シツキル</sup> 仕盡	<sup>シソコル</sup> 仕揃	<sup>シカツ</sup> 仕勝	<sup>シマケル</sup> 仕負
<sup>シマス</sup> 仕増優益	<sup>シヲトル</sup> 仕劣減	<sup>シオキ</sup> 仕置	<sup>シハジメル</sup> 仕始	<sup>シマサメル</sup> 仕納	<sup>シイル</sup> 仕入	<sup>シテ</sup> 仕手	<sup>シトメル</sup> 仕留
<sup>シアドス</sup> 仕惑	<sup>シドクル</sup> 仕届	<sup>シダス</sup> 仕出	<sup>シマス</sup> 仕餘				

この 44 語は、すべて「シ」が「仕」と表記され、ほかの辞書に見られない多くの語が記されている。特に「ス」を 229 例調べたところ、73 頁の「番舶」以下の項に、「番を仕」という箇所があり、「仕」に「スル」と「ツカマツル」の 2 種の読みが付されている。このことから、「ス」の漢字表記として、中世では、すでに使用されていることが考えられる。

## 2・2・3 『いろは字』

次は妙本寺蔵永禄二年(1559)の『いろは字』(注 6)における「シ～」の語である。

<sup>シタテ</sup>為立 <sup>シコト</sup>為事 <sup>シアハセ</sup>為合 <sup>シハセ</sup>仕合 <sup>シツケ</sup>為付 <sup>シツケ</sup>仕付 <sup>シワザ</sup>為行 (44 ウ)

この 7 語がサ変動詞連用形「シ」から成る複合語である。『古本節用集』では、サ変動詞連用形の漢字表記として「為」「仕」が使われ、『文明本節用集』では、すべての「シ」が「仕」と表記されている。『いろは字』では、「シタテ」が「為立」、「シコト」が「為事」と記された以外、「シアハセ」には「為合」「仕合」、「シツケ」には「為付」「仕付」のように、1 語に 2 種の漢字表記が使用されている。サ変動詞の連用形「シ」は、複合動詞・複合名詞の前接語として、「為」で表記するか、それとも「仕」で表記するか、まだ統一されていないと考えられる。

## 2・2・4 『運歩色葉集』

京都大学付属図書館蔵の元亀二年(1571)の『運歩色葉集』(注 7)では、サ変動詞の連用形から成る複合語「シ～」に「仕」を当てる例は 5 例である。

仕舞<sup>シマイ</sup> 仕合<sup>シアセ</sup> 仕立<sup>シタテ</sup> 仕付<sup>シツケ</sup> 仕態<sup>シワザ</sup>

これに対して、「為」は「<sup>シワザ</sup>為態」1 例である。『いろは字』では、「シアハセ」「シツケ」の「シ」は「為」「仕」の 2 種の漢字表記が記載されているが、『運歩色葉集』では「仕」の方が多く用いられている。

以上から室町時代の辞書では、「シ」の漢字表記として「為」だけでなく、「仕」も使われていることが明らかになった。但し、「シ」の漢字表記として「仕」と表記されることが多くなったと思われる。

### 3 中世までの作品における「為・仕」

中世以前の資料としてまず『古事記』『日本書紀』などを調べた。サ変動詞連用形の漢字表記として「為」は使われているが、「仕」は使われていない。

- (1) 品太天皇 巡行之時 於此處日暮 即取此阜松爲之療(『風土記』播磨國風土記)
- (2) 其女須勢理毘賣出見、目合爲(シ)而相婚、(『古事記』上卷)
- (3) 是後、素戔鳴尊之爲行也、甚無状。(『日本書紀』卷 1 神代上)

(1)(2)の「為」はサ変動詞の連用形であり、(3)の「為行」(シワザ)はサ変動詞連用形「シ」からなる複合名詞の前接語である。この「為行」は漢籍に見ない連語で、日本的である。

また宮島達夫編の『古典対照語彙表』(笠間書院 1971)には『万葉集』・『竹取物語』・『伊勢物語』などの 14 の作品が取り上げられている。39 語が「為～」と、「シタツ」(下二)「シタツ」(四)「シタテガホ」の 3 語が「仕～」と、編者により記されているが、一々調べたところ、『万葉集』の「シカヌ」以外の 42 語(注 8)は仮名で表記されていて、「仕～」の表記はなかった。

- (4) 面忘れ如何なる人の爲るものそわれは爲金津(しかねつ)繼ぎてし思へば(『万葉集』卷 11・2533)

『万葉集』(日本古典文学大系)には爲金津(シカネツ)以外、サ変動詞連用形「シ」を「為」と表記する例は、『万葉集総索引』によると、52 例が存している。この「為」は正用である。

- (5) 橘の島の宮には飽かぬかも佐田の岡辺に侍宿爲尔往(しにゆく)(卷 2・179)

- (6) 古(いにしへ)のますら壮士の相競ひ妻問ひ為邪牟(しけむ)葦屋の……永き世の語りに為乍(しつ)後人の……(巻 9・1801)

また、『万葉集』では、「為」は仮名として用いられることもあった。『万葉集総索引』漢字篇には、形容詞活用語尾「名津蚊為とわれを思へか 巻 16・3791」、名詞「為暮降れ見む 巻 10・2234」など、種々の用例に仮用の「為」を見ることができる。但し、「仕」にこのような仮名としての用例は見られない。

#### 4 中世におけるサ変動詞の漢字表記

##### 4・1 説話集におけるサ変動詞の漢字表記

##### 4・1・1 『今昔物語集』

サ変動詞の連用形「為」表記は、『今昔物語集』には多くの例が採取できる。

- (7) 道慈、論義ヲ為タリケルニ、神叡答へケル様、實ニ昔ノ迦旃延ノ如シ。(巻 11・5 道慈亘唐傳三論歸來、神叡在朝試語)
- (8) 家主ノ女、不知ヌ人ノ押テ宿レバ、恐レテ片角ニ隠レ居ヌ。不宿サジト為ケレドモ、可立キニモ非ネバ、人ヲ出シテ、(巻 16・8 殖槻寺観音、助貧女給語)
- (9) 然テ、内供夢ニ、房ノ上ニ金色ノ佛、烏帽子ヲ為給テ、(巻 19・37 比叡山大智房檜皮葺語)

サ変動詞連用形「シ」からなる複合語「シ～」の例が『日本書紀』に「為行」、『万葉集』に「為金津」が使われているにすぎないが、『今昔物語集』では多くの例が認められる。具体的に「為行」が 1 例、「為入」が 1 例、「為得」が 7 例、「為居」が 1 例、「為立」が 3 例、「為付」が 1 例、「為畢」が 1 例、「為態」が 8 例である。

- (10) 己等許成ヌル物ヲバ、心ニ任テ為得給ハムズルカハ」ト頼咲テ、(巻 25・10 依頼信言平貞道、切人頭語)
- (11) 田舎人ナドニモ非ズ、諸司勞ノ五位ニテ、京ニ為行ク者ナレバ、(巻 28・31 大蔵大夫藤原清廉、怖猫語)
- (12) 糸清氣ナル食物ヲ、銀ノ器共ニ為居ヘテ、女ニモ男ニモ食セタリ。(巻 29・3 不被知人女盗人語)
- (13) 為付ニケル事ナレバ、我が心ト盗シケル程ニ、二三度ニモ成ニケリ。(29・3 不被知人女盗人語)
- (14) 「正シク此レ、此ノ家ノ人ノ為態也。(巻 29・11 幼兒、盗瓜蒙父不孝語)

(15) 筥ニ為入ラム物ハ、我等ト同様ニコソ有ラメ。(巻 30・1 平定文、假仮本院侍従語)

(16) 郡司妻ニ、「此レ見ヨ、京ノガ為立タル様ノ美サヲ」トゾ云ケル。(巻 30・4 中務太輔娘、成近江郡司婢語)

以上のように、「為」が、『今昔物語集』では、サ変動詞の連用形「シ」の漢字表記だけでなく、「為行ク」のように、サ変動詞の連用形から成る複合語「シ～」の漢字表記としても、多く使われていることが分かる。

以下の3例は、『今昔物語集』において、編者により、「仕」をサ変動詞連用形「シ」として読まれた例である。

(17) 己ヲ年來便有ラバト思フ者共ニテ候ケレバ、『敵ニテ仕タリケル事也ケリ』ト思給テ、(巻 23・15 陸奥前司橘則光切殺人語)

(18) 而ル間、此典薬頭ニ、極ク装束仕タル女車ノ乗泛レタル、入ル。(巻 24・8 女、行醫師家治瘡迹語)

(19) 神泉ノ西面ニテ、俄ニ雷電シテ、夕立ノ仕リシ程ニ、神泉ノ内ノ、暗ニ成テ西様ニ暗ガリ罷リシニ、(巻 24・11 忠明、治值龍者語)

(17)は相手の敵に対して、「ツカマツル」という謙譲表現を使う必要はない。(18)は不明の女車に対して、謙譲表現を使う必要もない。さらに、(19)の「夕立」という自然現象に「ツカマツル」と読む可能性は低い。ところが、「仕」を「シ」と読むことについては、尚、慎重に考える必要がある。従って、この3例の「仕」を「シ」と読むか、それとも「ツカマツル」と読むかについて、『今昔物語集』の「仕」(「ツカフ」と読む判断される例を除く)を184例調べてみた。

調査を通して、『今昔物語集』の「ツカマツル」は、天皇、公、仏などにお仕えするときに多く用いられ、サ変動詞「ス」の意の謙譲語としても使われていた。以下はサ変動詞「ス」の謙譲語として使われている例である。

(20) 大臣弥ヨ恠ビテ、「何事ゾ」ト問ヒ給ヘバ、男、「若君ノ御服ヲ仕タル也」ト申セバ、(巻 19・9 依小兒、破硯侍出家語)

(21) 然テ申ケルハ、「此レハ頼光ガ仕タル箭ニモ不候ハ、先祖ノ耻セジトテ、守護神ノ助ケテ射サセ給ヘル也」トナム申テ、罷出ニケリ。(巻 25・6 春宮大進源頼光朝臣、射狐語)

(20)は下人の男が大臣に言った場面で、(21)は頼光が時の東宮(後の三条天皇)に言った場

面である。2 例とも話者は聞き手に対して地位が低いので、話し手が聞き手に対して、自身の行為を、謙譲を含ませて表現する場面に用いられている。

(17)の話者は地位が低い男であるのに対して、聞き手は殿上人である。従って、ここの「仕」は「ツカマツル」と読む可能性が高い。

次に、(18)の「装束仕タル」を「装束シタル」と読んでいる例に関係して、他の「装束ス」の連用形の例を調べた。

(22) 其ニ将行タレバ、年五十許ナル男ノ怖シ氣ナルガ、水干装束シテ、打出ノ大刀帶タリ。(巻 26・18 観硯聖人、在俗時値盗人語)

(23) 夜半許ニ塗箆ノ戸ヲ細目ニ開テ、其ヨリ長五寸許ナル五位共ノ、日ノ装束シタルガ、馬ニ乗テ十人許次キテ枕上ヨリ渡ケルヲ、(巻 27・30 幼児為護枕上蔭米付血語)

以上の(22)(23)のように、『今昔物語集』では、「装束シタル」「装束シテ」のように、仮名で表記されている例が 7 例ある。この 7 例とも、地位の低い人・霊(1 例)の装束を描写している場面である。このような仮名で書かれた「シ」に対して、次のように「仕」で書かれた例もある。

(24) 上達部殿上人ノ仕レル装束、書ムニモ可書盡クモ非ズ。(巻 28・3 圓融院御子日參曾祢吉忠語)

(24)の「仕」は圓融院の天皇にお仕えする上達部殿上人の装束を修飾しているものである。(24)の「仕レル装束」の場合は送り仮名「レル」が書かれており、「ツカマツレル」と読んだと考えられる。「ツカマツル」を使うのは、作者が天皇に対して敬意を表す表現である。

(18)は、作者が典薬頭に対して敬意を表す表現と推測される。このように考えると、(18)の「装束仕タル」は「装束ツカマツリタル」と読むと考えられる。

次に、(19)「夕立ノ仕リシ程ニ」の「仕」は送り仮名「リシ」と書かれており、「ツカマツリシ」と読むと考えられるが、自然現象の場合に「ツカマツル」が用いられるかどうかについて、『今昔物語集』における「夕立」の例及び自然現象の例を調べることにする。

(25) 其人、西ノ八条ト京極トノ畠中ニ、賤ノ小家一ツ有リ。其前ヲ行ケルニ、俄ニ夕立ノシケレバ、馬ヨリ下リテ、其小家ニ入ヌ。(巻 26・13 兵衛佐上綏主、於西八条見得銀語)

(26) 今ハ十町許モ行ヌラムト思フ程ニ、空陰テ夕立シケレバ、(巻 24・11 忠明、治値

## 龍者語)

『今昔物語集』では、自然現象を描写している場面は、「夕立シ〜」「雷電シ〜」のように、多く存しているが、「ツカマツル」が自然現象の作用として使用されている例が見出せなかった。特に、(25)「俄ニ夕立ノシケレバ」は、(19)の「夕立ノ仕リシ」と同じように、格助詞「ノ」の後に付けられているので、同じ意味に使われていると判断される。また、(26)は、(19)と同じ説話であるので、(19)の「仕リシ」は、「シタリシ」と読む可能性が高いと推測される。但し、「雷電」「空」「風」などの自然現象を検討したところ、自然現象の例は全て地の文に用いられているのに対して、(19)は会話文に用いられている。

(17)(18)(19)のほかに、以下の例に注目したい。

- (27) 大臣ノ申サク、「先年ニ盗ヲ仕ガ為ニ僧房ニ入タリシニ、〈略〉、盗ヲ仕ル事无カラマシカバ、其ノ時ニ被謀レテ辛キ目ヲゾ見マシ、(巻5・3 國王、為盗人被盗夜光玉語)

(27)と似ている説話は、『打聞集』(1961、白帝社)にもある。

- (28) 大臣の申く「先年盗せむれうに僧房に入たりしに、〈略〉、盗をせざらましかば、その時にはかられて、からきめをも。(15 玉賊成國王事)

(28)と(27)と違い、「セ」はサ変動詞連用形ではないが、2例とも、話者は大臣であるのに対して、聞き手は国王である。(27)では、自分の盗みの行動に「仕」を使っているが、(28)はサ変動詞「ス」を使っている。

従って、(27)の「仕」は、サ変動詞「ス」の漢字表記である可能性が高い。よって、(17)と(19)の「仕」も「シ」と読むと考えられる。

## 4・1・2 『沙石集』

日本古典文学大系の『沙石集』(梵舜本)には、「シイダス」「シタツ」「シナル」など、複合語の前接語として、サ変動詞連用形「シ」を仮名で表記している例や、「仕」を使っている例が32例ある。特に、「仕」がサ変動詞連用形「シ」の漢字表記として使用されている例も1例あった。

- (29) 中比甲斐國ニ、嚴融房ト云學生アリケリ。修行者多ク給仕奉事仕テ學問シケリ。(巻3・3 嚴融房ト妹女房ト問答事)

(29)の「奉事仕」の「仕」は校注者により、「シ」と読まれている(注9)。新編日本古典文学全集『沙石集』(小学館)において、

(30) 中比、甲斐国に巖融房とか申しける学生、名匠の聞えありければ、修行者など集りて給仕し、学問しけり。(巻 3・5 ある学生、在家の女房に責めらるる事)とある。また、大系本の同じ説話に以下の箇所もある。

(31) 阿難答テ云、「如形ソレ程ノ事ハ知レドモ、廿五年ノ間、給仕奉事シ奉テ、龍宮へ入り給シニモ、(巻 3・3 巖融房ト妹女房ト問答事)」

(31)は阿難(阿難陀)が、善思菩薩に対する会話である。聞き手の善思菩薩に対しても、給仕奉事する相手如来に対しても、敬讓語「ツカマツル」ではなく、「シ」が使われていた。(29)(30)(31)の 3 例を考え合わせると、(29)の「給仕奉事仕テ」の「仕テ」は、「シテ」と読むことが分かる。

このように、サ変動詞連用形「シ」は、「仕」で表記され始めたのは、鎌倉時代に遡ることができる。但し、『打聞集』『十訓抄』など和漢混淆文体の説話集に、以上のような例を見出せなかった。

#### 4・2 歌論におけるサ変動詞の漢字表記

##### 4・2・1 『良基連歌論集』

南北朝連歌を幽玄の詩として質的に高めるのに大きな役割を演じたのは、救済と二条良基であるとされる(注 10)。それでは、二条良基の連歌論で、サ変動詞連用形「シ」と、複合語の前接語「シ」の漢字表記が、どのように表記されているか、古典文庫の『良基連歌論集』を取り上げることにする。

(32) 又「月やかすむらんうき夕暮の秋の風」なんと仕たるは地連哥也。(智連集)

(33) 周阿ガ昔ダニウキ身ノイツヲ忍ラント仕侍シ、か様ノ姿ヲ可為本候。(連歌十様)

(34) サレバニセタレドモ、周阿ガ袖ヌラス涙ノ瀧ノ上ニ子テト云句ヲ仕タリシヲ、当座興シテ此上ハト吟ジ侍シ(同上)

『良基連歌論集』では、「～シタルハ」の例が多いが、「ツカマツルハ」の例は見出せなかった。(33)(34)は、自分の行為ではないので、「ツカマツリハベリシ」「ツカマツリタリシヲ」と読まないと考えられる。このことから、『良基連歌論集』には、サ変動詞連用形の漢字表記として、「仕」が使用されていることが分かった。

(35) いくたびも前句のかしらに出るとあらば、こなたには舟宿道旅と仕留てあらばこそ付侍れ。(知連抄)

(36) 只花下幽人月前吟客道生ナド云シ物、地下ノ風躰ヲ仕出シテ次第二天下ニ流布セ



ル也。(九州問答)

(37) 是ゾ第一ノ生得ノ堪能ノ仕態ニテ侍ベキ。(同上)

『今昔物語集』では、「為出」「為態」のように、複合語の前接語「シ」の漢字表記として、「為」が使われているが、『良基連歌論集』では、「仕手」「仕留」「仕出」「仕態」などのように、複合語の前接語として、サ変動詞連用形「シ」が、「仕」と表記されている。

『良基連歌論集』では、「シテ」を「士手」と書かれている例も 1 例あった。

(38) 今ノ様ニテハ連歌ノ士手出来スル事難有ヤ侍ラン。(九州問答)

以上の検討を通して、単独に使用されているサ変動詞連用形「シ」、複合語の前接語「シ」の漢字表記として、「仕」が使用されているのは、南北朝時代であることが分かった。

#### 4・2・2 『心躰抄』

サ変動詞連用形の漢字表記として、「仕」が使用されているのは『良基連歌論集』だけでなく、室町時代初期の資料と思われる『心躰抄』(注 11)にもその姿を見せている。『心躰抄』(正しくは『和歌集心躰抄抽肝要』)は京都大学所蔵、連歌論書であるが、多量の和歌を収め、和歌や連歌の語彙や用語を用いた作法についての論で構成されている。この部分にサ変動詞連用形「シ」の漢字表記として「仕」が使われている。

(39) 維ヲ人仁案仕為ト思等都テ維句ニ懸合為秀逸ハ拾句ニ一句モ難在〈略〉風ヲモ吹セ何仕為許ニテハ (P85)

(40) 風ノ間ハ花ノ命ノ繫レテ加様ニ幽賢ニ仕侍シ(P44)

(41) 邪正ヲ不弁物多中ニテハ何成上手モ連哥仕憎キ也(P115)

サ変動詞の連用形「シ」は、(39)「仕為ト」「仕為許」、(40)「仕侍シ」、(41)「仕憎キ也」のように記されている。『日本語教育事典』(注 12)の「心躰抄」の項に、「【著者】成阿。二条良基(元応二 1320～嘉慶二 1388)に仮託される」と指摘されている。従って、『良基連歌論集』の対応箇所を調べてみた。

(42) 是を人々案じてしたりと思ども、すべてこの句にかけあひたる秀逸は十句に一句も有がたし。〈略〉、風をもふかせなどしたるばかりにては(『連理秘抄』)

(43) 邪正ヲ弁ざるものゝ中にてはいかなる上手も連歌のしにくき也。(『連理秘抄』)

(42)と(39)、(43)と(41)は完全に一致しているので、(39)の「仕為ト」は「シタリト」・「仕為許」は「シタルバカリ」と、(41)の「仕憎き也」は「シニクキナリ」と読むと判断される。(40)の「仕侍シ」は、『良基連歌論集』に「シハベリ」とあるが、「ツカマツリハベリ」

はなかった。従って、(40)が「シハベリ」と読むと考えられる。

(44) 増テ人ノ句眞実ノ仕手何ヲモ聞得事可難(P23)

(45) 救済近代一軀ヲ仕出シ為上ハ期道ノ聖人也(P41)

(46) 哥ノ道モ連哥仕ノ式寄合モ捨レ候歟ト(P48)

(44)(45)のように、『心躰抄』では、サ変動詞の連用形「シ」からなる複合語の前接語として、「仕」と表記されていることが分かった。更に(46)の「連哥仕」のような複合語の漢字表記としても「仕」が使われている。

#### 4・2・3 『長短抄』

『長短抄』(注 13)では、サ変動詞連用形「シ」の表記として、漢字「仕」は見出せなかった。仮名「シ」であった。

(47) ヤカテ弓ヲヒケハ犬スキヲ見テ馬ノ爪ノ上ヲハシリ出ヲコシヒキノ射手ノシタリカハリテ (四十五ウ)

複合語の前接語として、「仕」と表記されている例が以下のようなものである。

(48) サルサワノ池ニ飛鳥川ヲ對スル也此句ニ仕手ノコアテト云事アリ口傳スヘシ(八オ)

(49) 儀理ヲ以テ付合アリ上手之好付合也下手ハ不仕得向也(二十九ウ)

(50) 人ニキハヲトサルハ句ヲ一句モ仕出ヌレハ (三十一ウ)

(51) 詞ナラハアリトモナシトモ云ニヲヨハス仕立大事也(三十五ウ)

(52) 發句ナラヌ仕ナカシノ句ニモ此心アリ(三十六ウ)

『長短抄』には、「仕手」が 21 例、「仕得」が 1 例、「仕出」が 1 例、「仕立」が 2 例「仕ナカシ」が 1 例あった。

以上の検討を通して、サ変動詞の連用形「シ」のみならず、「シ」から成る複合語「シ～」も「仕」と記されているのは、南北朝時代であることが明らかになった。

#### 4・3 軍記物語におけるサ変動詞の漢字表記

軍記物語の中で、サ変動詞「仕」の用例数が多く、特徴的な使い方をもっている。作品として、まず『曾我物語』を取り上げたい。

##### 4・3・1 『曾我物語』における「仕」の使用例

仮名交じり本より古い成立と言われるのが真字本『曾我物語』(注 14)である。その中で最も古い完全な写本とされる伊東本を調査したところ、サ変動詞連用形「シ」が、「仕」と表記されている例があった。

(53) 山内聞之是程晴態不<sub>ナ</sub>仕<sub>下</sub>不覺<sub>ハシ</sub> (巻一)

(54) 胡深王母喰<sub>レ</sub>虎御年申十五歳始仕<sub>下ッ</sub> (巻四)

(55) 一人<sub>モ</sub>陋臆无<sub>コッ</sub>者共哀<sub>ナレ</sub>尋常恩仕<sub>シタラマシカハ</sub>此者共而<sub>リ</sub>思留此謀叛者 (巻十)

(53)(54)の「仕」の後に尊敬語「タマフ」が付されているので、「仕」を謙讓語「ツカマツル」と読まないと考えられる。(55)は、送り仮名が「シタラマシカハ」とあることから、この「仕」を「ツカマツル」という動詞では読みにくい。従って、(53)(54)(55)の「仕」は、サ変動詞「ス」の連用形「シ」の漢字表記だと考えられる。

また、『曾我物語』では、連用形だけでなく、他の活用形にも「仕」と表記されている例があった。

(56) 後親後子別妻別夫毎度淵瀬投ケ身仕<sub>セン</sub>自害<sub>モ</sub> (巻二)

(57) 一年一度方々様父御文学文吉仕<sub>ヨ</sub>不可有不調心 (巻四)

(58) 當世替昔仕<sub>レ</sub>佐様悪事者有<sub>レ</sub>狩庭<sub>モ</sub>亦有旅宿<sub>モ</sub>討勝<sub>セ</sub>延<sub>ヤ</sub>一步 (巻六)

(59) 汝此者共有縁聞食此等首共預<sub>ッ</sub>汝入足高送曾我里<sub>ヘ</sub>仕<sub>サセヨ</sub>葬送 (巻十)

(56)の「セン」の「セ」を尊敬或いは使役の助動詞とするのは、文脈上無理がある。従って、この「セ」はサ変動詞「ス」の未然形と考えられ、ここでは「仕」を「セ」と読んだということになる。(57)は父から子への文である。当該箇所では、父は子に対して尊敬表現を使っていないので、ここでの「仕」は「ツカマツル」の命令形ではなく、「ス」の命令形「セヨ」であると考えられる。(58)は「悪事をする者」に対して謙讓語「ツカマツル」は、不適切である。また「仕」の箇所にヲコト点「スル」がある。従って、(58)の「仕」はサ変動詞「ス」の連体形「スル」であると考えられる。(59)は、上位者鎌倉殿から下位者伊豆の国の住人である尾河三郎への会話である。鎌倉殿が三郎に葬送を命じている場面である。「仕」を敬語として読むとすれば、話者は鎌倉殿であるので、自敬敬語と考えられる。従って、「仕」は、敬語「ツカマツル」と読む可能性がある。しかし、「サセヨ」があるので、「ツカマツラサセヨ」と想定しなければならない。しかしながら、「ツカマツラス」という四段活用はない。従って、(59)の「仕」はサ変動詞「ス」の未然形「セ」であると判断される。

以上のように、『曾我物語』では、サ変動詞の漢字表記として、「仕」が未然形「セ」、

連用形「シ」、連体形「スル」、命令形「セヨ」に用いられている。「仕」が「スル」と読まれるのは、『文明本節用集』にも掲載されている。このことから、室町時代では、「仕」がサ変動詞連用形の漢字表記だけではなく、他の活用形にも用いられていたことが分かる。

次は、『曾我物語』にける複合語「し～」の漢字表記を見てみよう。

- (60) 此等不仕出斯不思議(巻十)
- (61) 冠者原仕失候間(巻九)
- (62) 若彼等仕勝此大事者(巻六)
- (63) 和君盜許仕習(巻九)
- (64) 思取殿原一同仕儲手縄樋出(巻一)
- (65) 二人女房達心中共被推量哀説法不仕遣(巻十)
- (66) 其外馬上歩立腕執躍超物武士仕態(巻一)

真字本『曾我物語』には、「仕出」が1例、「仕失」が1例、「仕勝」が5例、「仕習」が1例、「仕儲」が3例、「仕遣」が1例、「仕態」が7例ある。サ変動詞連用形からなる複合語「シ～」は全て「仕」と表記され、「為」はなかった。

#### 4・3・2 『曾我物語』以外の作品にけるサ変動詞の漢字表記

以上のように、サ変動詞の漢字表記として、「仕」が『曾我物語』の各活用形に使用されていることが分かった。同じくヲコト点が付している『平家物語』では、どのように使用されているかについて、四部合戦状本『平家物語』(注15)を調べたところ、以下の例がある。

- (67) 殿下御車副一人<sup>シ</sup>逃<sup>シ</sup>残り淀<sup>ヨトノ</sup>住人因幡<sup>モリ</sup>使<sup>シ</sup>国久丸申<sup>セ</sup>仕御車従是中御門殿成<sup>ヌ</sup>還御(巻1 殿下乗合)
- (68) 凡平家為<sup>シ</sup>仕祈<sup>リ</sup>一ト<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>事(巻7 平家山門連署)
- (69) 伊予国住人高市武者所清則大鹿二ッ射取<sup>リ</sup>妻鹿逃<sup>ナラ</sup>不心<sup>ナラ</sup>狩<sup>シ</sup>仕喚<sup>リ</sup>申(巻9 三草合戦)

以上のように、『平家物語』においても、サ変動詞「ス」が使用されている。また複合語の前節語「シ」の漢字表記として、「仕」も使用されている。

- (70) 院御結縁<sup>もさせ</sup>打寤<sup>させ</sup>下山門京都騒<sup>キモ</sup>震<sup>ヒ</sup>偏是天狗仕態(巻7 重衡日吉社参向)
- (71) 田畠耕作<sup>シ</sup>閑可<sup>キ</sup>為<sup>キ</sup>父母孝養無益事思企<sup>シ</sup>仕損<sup>コッ</sup>(巻5 早馬)

例のように、『平家物語』では、複合語「シ～」の前接語として、「仕」が多く使用され

ていることが分かった。

『甲陽軍鑑』『信長記』『太閤記』などの軍記物語を調べたところ、複合語「シ～」の漢字表記として、「仕」が引き続き、使用されていることが分かった。しかし、単独に使用されているサ変動詞「ス」の漢字表記としては、これらの軍記物語には見出せなかった。

#### 4・4 古記録類における「シ～」について

古記録の資料として、『大日本古文書』『大日本古記録』『史料纂集』など、日常的な書記生活を留める資料を調査した。

- (72) 佗事至候へは、よき仕合に候、爰元万事に殊忠之様に候へとも、(上杉家文書上杉定家自筆書状)
- (73) 被召御腹由候、誠恣之仕立、前代未聞、無是非次第、(上杉家文書山崎吉家朝倉景連署状)
- (74) 信州之境深雪不及人馬砌、駿州可有仕置候、以此一理、動干弋之由候、(上杉家文書北條氏照書状)
- (75) 大工三人面之板敷仕直也。此間簀子也(兼見卿記天正三、六、七)
- (76) 昨日并七日棟ヲ上…。昨今雨下、散々ノ仕合也(多聞院日記天正八年、正、并八)
- (77) 昨日関白殿無御出、ナラ中地下ヨリ仕出ノ飯ノ用意無足ト云々、…弥三相州小田原ヨリ今日帰了、仕合一段珍重ノ由也、(多聞院日記天正十六、十、十一)
- (78) 当時疵は仕立候へども、痔病出合候、(上井覚兼日記天正十四、八、并四)
- (79) 雲州万願寺山之儀、敵取誘付而、神西在陳衆罷出、可仕崩之覚悟候。就其人数之儀、追々申越候(平賀家文書<元亀元>十、十五、毛利元就同輝元連署状写=)
- (80) 何事も仕はつし候議候、可有御推量候、(吉川家文書毛利輝元自筆書状)
- (81) ヤツバラ、コノ諸勢ヲ仕崩<sup>シツツシ</sup>、具足ニ目ヲ懸ヲミテ(本福寺跡書・東山大谷殿破却之事)
- (82) 従先規不仕付諸役夫役等、新儀不可被仰付事(六角氏式目 三五・新儀諸役夫役事)
- (83) 此外自他之仕成にて、申掠子細候者、至其時可有法度之事(吉川氏法度)

以上のように、サ変動詞連用形からなる複合語「シ～」は、「仕」が宛てられていることが分かった。このように室町時代後期より、古文書、古記録、法制史料などの、資料に漸次多く使用されるようになった。

しかし、正規の漢文体と言われている抄物『史記抄』『毛詩抄』『四河入海』『蒙求抄』

を調べたところ、多くのサ変動詞連用形「シ」、連用形からなる複合語「シ～」の語が用いられているが、「シアハセ」のみ「仕合」(『蒙求抄』三 60 才)と表記されている。このことから、室町後期では、「シ」の漢字表記「仕」が、正式の漢文体にはまだ普及していないことが分かった。

## 5 おわりに

「為」「仕」という字は、上代から資料に見られるが、サ変動詞連用形の漢字表記としては「為」が使われ、「仕」は用いられていなかった。『今昔物語集』に、「仕」が編者により「シ」と読まれる例が3例あったが、『今昔物語集』の「仕」の例を分析したところ、3例のうち、2例の「仕」については、「ツカマツル」と読む可能性が存することが判明した。一方(27)～(31)の例を通して、鎌倉時代では、サ変動詞連用形の漢字表記として、「仕」が既に使用されていたことが考えられる。

南北朝時代に成立した『良基連歌論集』には、サ変動詞連用形「シ」を、「仕」と表記されている例が存した。また、室町時代に成立した『心躰抄』には、サ変動詞連用形「シ」を、「仕」と表記されている例も存した。

室町時代後期に成立した『曾我物語』では、サ変動詞連用形「シ」だけでなく、他の活用形にも「仕」が使用されていることも分かった。『文明本節用集』における「番をする」の例を考え合わせると、室町時代には、「仕」がサ変動詞連用形以外の活用形に使用されていたと考えられる。

一方、サ変動詞の連用形から成る複合語「シ～」が、「仕」と表記されるのは室町時代の『節用集』であるが、調査を通して、南北朝時代の『良基連歌論集』には、すでに使われていたことが明らかになっている。このことから、「仕」が複合語の前接語「シ」の漢字表記として、用いられ始めたのは、南北朝時代であると考えられる。

その後、軍記物語だけでなく、室町時代後期から、古文書、古記録、法制史料など、正規の漢文体でない資料に次第に多く見られるようになる。

『今昔物語集』の例(27)と『打聞集』の例(28)と、『文明本節用集』には「番を<sup>仕</sup>」とあることから、元々はサ変動詞「ス」の表記として、「仕」が存していた可能性がある。今後、更に資料を増やし、検討していきたい。

### 【注】

- 1 『総合雑誌の用語』(1957年、秀英出版)による。

- 2 新村出編『広辞苑』（1967、岩波書店）による。
- 3 国語研究会監修『現代国語表記の基準』（第 6 次改定版）（2001、ぎょうせい）による。

27 語は次のようである。

仕上がり	仕上げ	仕上機械	仕上工	仕入れ	仕入価格	仕入先
仕打ち	仕送り	仕納め	仕返し	仕掛花火	仕掛品	仕切り
仕組み	仕込み	仕損じ	仕出し	仕出屋	仕立て	仕立て上がり
仕立券	仕立物	仕立屋	仕舞	仕向地	仕分け	

- 4 中田祝夫『古本節用集六種研究並びに総合索引』（改定新版）（1979、勉誠社）による。
- 5 中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引』（改定新版）（1979、勉誠社）による。
- 6 『いろは字』[妙本寺蔵永禄二年本](1974 年、清文堂、鈴木博解説)による。
- 7 『運歩色葉集』[元亀二年京大本](1969 年、臨川書店)による。
- 8 42 語は次のようである。

しあつむ(為集)[下二] しいる(為入)[四] しあふ(為合)[四] しあふ(為敢)[下二] し  
ありく(為歩)[四] しいづ(為出)[下二] しう(為得)[下二] しおく(為置)[四] しかく  
(為掛)[下二] しかさぬ(為重)[下二] しかぬ(為不堪)[下二] しかはす(為交)[四] し  
く(為来)[カ変] しくらす(為暮)[四] しこむ(為込)[下二] しさす(為止)[四] しぎま  
(為様) しさわぐ(為騒)[四] ししる(為知)[四] しすう(為据)[下二] しそこなふ(為  
損)[四] しそす(為)[四] しそふ(為添)[下二] しそむ(為初)[下二] したつ(仕立)[四]  
したつ(仕立)[下二] したてがほ(仕立顔) しちらす(為散)[四] しつく(為付)[四] し  
つくす(為尽)[四] しなす(為成)[四] しならはす(為習)[四] しならふ(為習)[四] し  
なる(為馴)[下二] しのこす(為残)[四] しはつ(為果)[下二] しはなす(為放)[四] し  
やる(為遣)[四] しよる(為寄)[四] しわざ(為事) しわたす(為渡)[四] しゐる(為  
居)[上二]

- 9 渡邊綱也『沙石集』（1966、岩波書店）の 147 ページの脚注 42 では、「底本の「仕」はツカマツリテと読むか」と解釈されている。
- 10 佐藤喜代治編『国語学研究事典』（1977、明治書院）における「連歌」の項による。
- 11 『和歌集心躰抄抽肝要』は京都大学蔵本。堀部正二解説、島津忠夫補註、野間光辰・阪倉篤義序。1969 年、大学堂書店。この解説によれば、本書の成立は『梵灯庵返答書』（応永 24 年、1417）を遡りえないという。

- 12 水谷修〔ほか〕編『日本語教育事典』(新版)(2005、大修館書店)による。
- 13 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会『連歌論集』(天理図書館善本叢書と書之部 第7巻)(1973、天理大学出版部)による。
- 14 山岸徳平・中田祝夫解説『真名本曾我物語』(1974、勉誠社)による。
- 15 慶応義塾大学附属研究所編『四部合戦状本平家物語』(1967)斯道文庫

### 【参考文献】

- 1 岡見正雄校『良基連歌論集』(1952～1955) 古典文庫
- 2 東京大学史料編纂所編纂『上井覚兼日記』(大日本古記録)(1954～1957)岩波書店
- 3 『中世法制史料集』第三巻(六角氏式目)(1965)岩波書店
- 4 『中世法制史料集』第三巻(吉川氏法度)(1965年)岩波書店
- 5 高木市之助〔他〕校注『万葉集』(1～4)(日本古典文学大系)(1969)岩波書店
- 6 東京大学史料編纂所編『吉川家文書』(大日本古文書家わけ9)(1970)東京大学出版会
- 7 東京大学史料編纂所編『上杉家文書』(大日本古文書家わけ12)(1971)東京大学出版会
- 8 斉木一馬・染谷光広校訂『兼見卿記』(史料纂集 19)(1971)続群書類従完成会
- 9 東京大学史料編纂所編『熊谷家文書・三浦家文書・平賀家文書』  
(大日本古文書家わけ14)(1971)東京大学出版会
- 10 山田孝雄等校注『今昔物語集』(日本古典文学大系)(1970～1971)岩波書店
- 11 笠原一男・井上鋭夫校注(蓮如 一向一揆)『日本思想大系 17』(1972)岩波書店
- 12 正宗敦夫編『万葉集総索引』(1974)平凡社
- 13 竹内理三編『多聞院日記』(増補 続史料大成)(1978)臨川書店
- 14 酒井憲二編『甲陽軍鑑』(古典資料類従 20～23)(1979)勉誠社
- 15 北野克著 田山方南校閲『名語記』(1983) 勉誠社
- 16 高木市之助・富山民藏編『古事記總索引本文篇』(新装版第三刷)(1994)平凡社
- 17 小島憲之〔他〕校注『日本書紀』(2)(新編日本古典文学全集 3)(1996)小学館



### 第3節 「ハイル」の表記と意味の変遷について

#### 1 はじめに

「<sup>はい</sup>入る」は移動動作を表現する動詞の代表的な語で、国語国立研究所の『総合雑誌の用語』(注1)では使用率0.8%、142位の使用語である。しかし、『今昔物語集』では、「ハイル」の語はなく、「ハヒイル」(這入)はあった。時代が下がるが、川端康成の『伊豆の踊子』(大正15)(注2)には、「二度も三度も湯には入つてみたりしてゐた」と「湯に入つて」の2種の表記があり、「は入る」という特別の表記が使用されている。

「<sup>はい</sup>入る」には「はひいる」「はいいる」「這入る」「入る」などのいろいろな表記があったが、「<sup>はい</sup>入る」という形の成立はいつ成立したのか、またどのようにして今の「<sup>はい</sup>入る」に変化したのか。現在の「入る」には「はいる」と「いる」の二つの読み方があるが、「イル」は殆ど「染み入る」「痛み入る」のように、複合語或いは熟語の中に用いられて、古語のイメージが残り、使用の範囲が限られている。逆に「ハイル」の使用の範囲が幅広いから、古代から次第に拡大してきたことと推測できる。「ハイル」が「イル」の使用の領域に入っただのはいつごろからであろうか。古代から現代までの文学作品を資料にして、詳しく調査していきたい。

#### 2 上代・中古における「ハイル」の表記と意味

現存する日本最古の歴史書『古事記』と、日本最古の正史である『日本書紀』との上代資料の中では、まだ「<sup>はい</sup>入る」の語源とされる「這入」などはなかったが、「入」という漢字は出てきて、『古事記』の中に118ヶ所、『日本書紀』の中に15ヶ所あり、「這」という字は用いていない。

平安時代になってから、かな文字が出来たことによって、「いる」は仮名で表記されることが多くなった。漢字「入」は「<sup>い</sup>入る」[四]と「<sup>入</sup>る」[下二]に用いられた。「ハヒイル」は「はふ」(這う)と四段の「いる」が結びついた複合語である。「ハヒイル」は複合語であるから、原義に近く用いられ、意味としては前の動詞「這ふ」の意味もあったし、「入る」という意味もあった。「這ふ」の状態において、主体が狭い所へ潜り込むという意味が強かったが、他の色々な場合にも用いられた。そこで、次に中古の「ハヒイル」の表記と使用の範囲・意味について検討してみよう。

例文について、テキストの影印のあるものは、それに従い、活字校定本は校定の凡例に

従って、原形に復元して用いた。但し、対象とする語以外の部分は読解の便宜を考えて、適当に漢字、句読点などを施してある。

- ① 「はひ入」で表記して、主体（人）が人目の付かない所へ移動することを表現し、這いながら潜り込むあるいは気が付かないように入るという意味で、心理的な要素（恐怖、隠れたいという気持ち）も含まれて、具体的な場所が必要である。

(1) [母]「あな、さがな。などで、寝られざらむ。もし、あやや、ある」と言ひければ、この男、すのこのうちにははひ入て、隠れにければ、のぞきて見るに、人もなかりければ、(『平中物語』27)

(2) [男]「あやしくもあるかな。こと木もなくて、これしも」など言ひて、この、北なる家にははひ入て、さしのぞきたりければ、薨などさしあげて、女ども、あまた集まりおり。(『平中物語』36)

- ② 「はひいる」で表記して、意志的な主体（人）が外部からある特定の場所・内部に移動することを示す。「這ふ」という動作が認められない。

(3) はしのかたにあゆみいでて、幼き人をよびいでて、「われは今は來じとす」などいひをきて、いでにけるすなはち、はひいりてをどろをどろしう泣く。(『かげろふ日記』 上巻(康保3年8月～9月))

(4) 人はえしらず、われのみぞあやしとおぼゆるに、妻戸おしあけて、ふとはひいりたり。(『かげろふ日記』 中巻(天禄2年11月～12月))

(5) 山伏は穀絶ちて久しくなり侍りぬ。忠こそ「しばし、ここに立ちたまへ」といひて、うちにははひいり(注3)て、冬の装束一具を、いと小さく畳みて、身づからもて出でて給フ。(『宇津保物語』 忠こそ)

(6) ゆるしたてまつり給へればはひいりてさすかにいりもはて給はぬをいとあはれと思ひて(『源氏物語』(大島本) 總角)

- ③ 主体（人）が貴人たちの傍、宮廷などの特別の場所へ移動することを表す。「はひいる」「はひ入る」で表現する。

(7) かくて、皆出立ち給ふ。紀伊國に到り給ヒて、松方、まづ吹上の宮にははひいり(注4)て、君の御前についキる。(『宇津保物語』 吹上 上)

(8) かくて、中納言内にははひ入りて、犬宮かき抱きて「犬をば宮はいかがの給ヒつる。(『宇津保物語』 蔵開 上)

上のように中古では「<sup>はい</sup>入る」「はひる」などの表記がまだ用いていないが、「<sup>はい</sup>入る」の語

源とされる「はひいる」「はひ入る」等の表記はすでに存在した。「はひいる」は「ハイル」の語源だと認められているが、調査によると、「はいいる」の形もあった。次の例である。

- (9) ゐとわりなくてことつけてもはいいり給ぬへき御心はへなれはとさまかうさまにわひしければすへりいてて(『源氏物語』(大島本) 螢)
- (10) 人すくなにておはするけしきをみてはいいり(注 5)やし給へりけむとおほす。(『源氏物語』 夕霧)
- (11) いとしのびて、まだ夜ぶかく、出でにけり、たまさかに、はいゝりはいゝりたりけれど、あふことは難カリケリ。(『篁物語』)
- (12) いと清げにて、はいいり(注 6)て見給フに、物憂がり給ヒつれど、かうてもありぬべしと見給フ。(『宇津保物語』 國譲 中)

その他に、「はいる」という表記が中古からすでに存在したことも明らかになった。例としては以下のである。

- (13) 人すくなにておはするけしきをみてはいり(注 7)もやし給へりけむとおほす。(『源氏物語』 夕霧)
- (14) 御念佛果てまであるべくこの西院の僧達に仰事給はす。これはこのおはしますめぐりにはいりつゝ仕うまつるべき也。(『栄花物語』 卷二十五 みねの月)
- (15) うちにはいり(注 8)て、冬の装束一具を、いと小さく畳みて、身づからもて出でて給ふ。(『宇津保物語』 忠こそ)

以上のように、表記においては「ハイル」の語源は「はひいる」であって、「はいいる」の写本もあった。また、「はいる」という表記が中古になかったとは言えないだろう。「はひいる」「はいいる」などの使用の範囲や使用の対象などが限られて、今のように多く使用されたことはなかった。つまり中古の「<sup>はい</sup>入る」の語源「はひ入る」などの言葉が使用された時、主体は人に限り、場所は人の気づかない所、或いは特別な場所に限られ、「這って入る」「潜って入る」の意味も強かった。

### 3 中世における「ハイル」の表記と意味

時代は中世になると、「ハイル」はどのようなになったか、表記と意味と前時代よりどれほど変化したか、「ハイル」は一体「はひいる」「はいいる」のどちらから変わってきたか、或は各種の表記はあったかどうかについて検討し続けてみよう。中世の「ハイル」は以下のである。

- ① 表記としては「這入」「這入ル」「ハヒ入」で示して、人や動物（蛇・牛）などが、広い所から穴・草むらなどの所へ這って移動することを表す。目的地は家屋の外である。
- (16) 尻ニ行ク程ニ大ナル墓ノ有ルニ<sup>ハヒ</sup>這入ル、「己ガ尻ニ立テ入給へ」ト云へバ、恐シケレドモ其ノ穴ニ付テ入ヌ。(『今昔物語集』(巻 5・19 天竺龜報人恩語)
- (17) 蛇、此レヲ聞テ、翁ノ顔ヲ打見テ、蝦ヲ弃テ、藪ノ中ニ<sup>ハヒ</sup>這入ヌ。(『今昔物語集』(巻 16・16 山城國女人依觀音助遁蛇難語)
- (18) 墓穴ノ有ケルヲ見付テ、其レニ<sup>ハヒ</sup>這入リテ暫ク有ケレ程ニ、日モ暮テ暗テ成ニケリ。(『今昔物語集』(巻 28・44 近江國篠原入墓穴男語)
- (19) 山に大ル穴有リ。牛、此穴ハヒ入。其ハトモニ次ツギテ入バ、久通テ、明所ニ通出デ、見バ、天竺ニモ不似、花開タリ。(『打聞集』20 唐僧入穴事)
- ② 「はひ入」「はひ入る」「はひいる」などの表記を使い、主体（人）が外から内（家、神の社など）に移動することを表す。
- (20) 今オキアカリテ、小家ニハヒ入ムトシケル時行合テ、何トモ云セス本鳥ヲ押切テ、(『十訓抄』巻 4・3)
- (21) それに心もとなく、あさましく、うつし心も失せはてて、はひ入りぬべけれど、すべきかたもなく、やりつるくやしさを思へど、かひなければ、泣く泣く曉ちかくいでぬ。(『宇治拾遺物語』平貞文・本院侍従事 巻 3ノ 18)
- (22) 遥かに山深く入(り)てけはしき谷の奥に、(荒)れたる神の社ありける中にはひ入(り)ぬ。(『発心集』第 8・1 時料上人隱徳の事)
- (23) この佐實はからくしてをきあがりて、小家にはひいらんとしける時、行あひて、何ともいはず引だして、もとゞりを切てけり。(『古今著聞集』興言利口第 25)
- ③ 「はひいる」「はひ入」「はい入る」「這入」で表記して、主体（人）が身体を縮ませて穴、屋敷の下などに潜り込むことを表す。
- (24) 木のうつほのありけるにはい入て、目もあはず、かゞまりて居たるほどに、(『宇治拾遺物語』上・3 鬼ニ褻被取事)
- (25) 家ノ内ニ有ケル人皆或ハ物ノ迫ニ隠レ、或ハ板敷ノ下ニ<sup>ハヒ</sup>這入ヌ。(『今昔物語集』巻 29・7 藤大夫□家入強盜被捕語)
- (26) 大納言をみたてまつり、おそれたる體にて、やをらすのこのしたへはい入にけり。(『古今著聞集』變化第 27)

(27) 御まへなる人もね入ぬるにやをとする人もなく、ちいさらかに、はひいらせ給ぬるのちいかなる御ことともかありけん。(『とはずがたり』)

- ④ 「はいる」「はい入る」で表記して、外から中への移動ではなくて、ある範囲の中での移動を表す。中古では「藪の中」に移動する主体は動物(蛇)に用いられたが、中世になると、「藪の中」に移動する主体が人にも及んだ。

(28) 六月の日の草もゆるがずて(ツ)たるに、片山のやぶのなかにははいり、あをのけにふし、あぶぞ、蚊ぞ、蜂蟻な(ン)どいふ毒虫どもが身にひしとりつゐて、さしくひな(ン)どしけれども、(『平家物語』上 巻第5 文覺荒行)

(29) くちなは、このぬしが顔をうちみて、のみかけたるかへるをはき出して、藪の中へはい入ぬ。(『古今著聞集』 巻第20 (魚蟲禽獸第30))

中世末期になってから、「はいる」という表記は再び出て、使用の場所が更に広く用いられた、「川・海へはいる」という形が出てきた。「はいる」で表記する例は例(29)のほか、以下の例も使用された。

(30) この忠清白昼にただ一人築地をはねこえて、はいつて(faitte)一人をばうち殺し、ま一人をば生け捕って後代に名を上げたものでござるが、(『平家物語』(天草版))

(31) 御不断衆二星をうたせられ候。草薙孫四郎・小阿弥、川へはいり申候。(『伊達天正日記』2 天正16年3月15日)

(32) さうの御ともの衆はうミへはいり申、いろいろ大くゐ被レ申候。(同上九 天正17年5月23日)

以上の例から見ると、中世の前期、「はひ入る」「はい入る」などの表記が使用し続けられたが、末期になると、これらの表記はほぼ消えてしまった。代わりに「はいる」という表記が室町時代末期に多く用いられた。「這入」という漢字表記は中世に用い始められた。意味の表現においては、中古の「ハヒイル」と同じであるが、主体は人だけでなく、動物(牛、蛇)にも用いられ始めた。場所は家・藪の中・穴だけでなく、神の社・川・海などにも及んだ。

#### 4 近世における「ハイル」の表記と意味

近世では、「はいる」「入る」という表記が多く使われた。「ハイル」の使用の範囲・意味としては前時代より広がってきたが、「這いながら入る」という意味が無くなっていく傾向

があった。使用の範囲・意味について、中世の用い方以外に、以下の場合にも使われた。

①主体（人）がある特定の領域に移動して、一時的にある状況に加わる。場所は具体的な所から抽象的な場所に及んだ。結果を表す。

(33) 《しやぎり、しうは、三人の中へはいり、一返まはり、笛ひつととむる時、ばうのひだりの手をはなし、右にばうを一本づゝもつて、とびのく》(大蔵虎明本 狂言 脇狂言之類 三本の柱)

(34) づきんをとりて、二人の間へはいり (大蔵虎明本 狂言 集狂言之類 いぐい)

(35) 女郎の口から金貸せとまで恥を捨てての心ざし。無にしてやらしゃるはそりゃいかい邪見。悪い事はいふまいこちの仲間へはいらしゃれ。(近松門左衛門『博多小女郎波枕』)

②「～が入る」の形が出てきて、～の所は主体ではなく、無意志の物である。従って主体の移動動作ではなく、無意志の物がある範囲に入るという意味である。

(36) 是はならずの森の柿の木。口へはいる物こそと、薬罐たぎれば、茶碗みがきて、何かな、御馳走もがなと申侍る。(『好色一代男』巻2 女はおもはくの外)

③極めて抽象的な場所に用いて、見えない空間の中での移動である。「人の心に染み込む」という意味が強い。

(37) 野郎なればこそ、三十四五迄も若衆顔をして、人の懐の中へもはいるそと、おかしき色の道の思はれける。(『男色大鑑』巻5 面影は乗掛の絵馬)

それに、特徴として、井原西鶴の作品では「はいる」が多く使用されたようであった。『近松浄瑠璃集』の中で「はいる」「這入る」「入る」の三種の表記が使用されたことから見ると、表記が多種多様になった。現代作家（常用漢字表が公表された前）の表記の多様化の初期ではないかと思う。

また、近世では「ハイル」の表記の中で、「はいる」「這入る」「入る」のほかに、「は入る」という表記が初めて出てきた。ただし、「は入る」の表記について、資料として、静嘉堂文庫蔵の『醒睡笑』を使ったが、『内閣文庫本醒睡笑』の中にはすべて仮名「はいる」が使われ、次の用である。

(38) 此盗は物かほしさには入たとさるかしこき人数寄に行路地へ入れたは植たる竹の先をつゝみたるか (『醒睡笑』巻2 腔)

(39) 太郎いふわれは日本の岩石を金銀にして其中へは入て居たいと。(『醒睡笑』巻7 似合たのぞみ)

- (40) 路入桃源深更深 桃源ト云ハモノ木ノシンノ処ノ各 其中へハ入テシレハ路ガ  
シクへ行ケバ行クホドフカイ也是モ 中ノ次 ニナシ深シユウナリ (『句双紙  
抄』 27 オ)

このように、古代では「ハイル」の表記も表現も相当変わってきた。かな表記としては、最初の「ハヒイル」「ハイイル」などの複数の表記から次第に「ハイル」になった。「這入」は、「ハヒイル」の漢字表記として、使用され始めたのは中世であるのに対して、「這入」と「入」は、「ハイル」の漢字表記として使用され始めたのは、近世に入ってからのことである。更に「は入る」という表記も使用された。

以上の例から見て、「ハイル」の成立は大体二種類がある。

- ① 中古で最初は「はひいる」の形が出て、後はハ行転呼音の発生につれて、語中・語尾におけるハ・ヒ・フ・ヘ・ホがワ・ヰ・ウ・エ・ヲになった。それと同時に、イ・ヰが[i]に統合されたのによると、「はひいる」から「はいいる」になって、後に「ハイル」になった。これは「はひ入る」の使用率が高いことから推測できる。
- ② 最初から「はひ入る」類（這入など）・「はい入る」類・「はいる」類の三種類が出てきて、後に「はひいる」類から「ハヒル」になって([fafiiru]の[ii]が統合されて、[fafiru]になった)、「はいいる」類から「はいる」になった([faiiru]の[ii]が統合されて、[fairu]になった)。後に「はいいる」から変わった「はいる」は次第に「はいる」類に接近して、「ハイル」になった。「ハヒル」ではなく、「ハイル」は近世に多く使われたことから見ると、「はいいる」から変化した語である可能性が高いと推測できる。また近世では「は入る」という表記が出てきたことから見ると、「はい入る」の中の「イ」が脱落されて、「は入る」になったと思われる。

また使用の範囲、意味においては、最初の「這いながら入る」「潜り込む」などの意味から次第に「堂々と入る」ということになった。場所も最初の家・穴などから神の社・川などに及んで、特に「仲間へはいる」「人の懷の中へもはいる」などにも及んだ。従って、「ハイル」は具体的な方面だけでなく、抽象的と具体的との両方面へと広がってきた。このようにして、「ハイル」の元の表記・意味を失って、時代なりの特徴を持って発達してきた。

## 5 近代以後における「ハイル」の表記と意味

以上から見ると、時代の変化につれて「はひいる」「はひ入る」などの表記が次第にな

くなり、意味における「<sup>はい</sup>入る」の範囲が段々広がってくる傾向が明らかになった。現代で表記としては昭和二十一年に「当用漢字表」「現代かなづかい」が公示される以前、色々な表記が作家に使用されたが、作家によって表記が違ふ。また明治、大正、昭和における「ハイル」の表記も違ふ。大体「這入る」「入る」「はひる」「はいる」に分けられら。

江戸時代の影響を受けて、旧仮名遣いを使い続ける一方で、同じ作品の中にも色々な表記も使い、「ハイル」の表記が多彩になった。この時代では、「入る」「這入る」は普通になって、また夏目漱石の表記の中で「<sup>はい</sup>這る」「入いる」という表記が出てきた。意味においては、前時代より更に広がったが、「這いながら入る」という意味がほとんどなくなった。次は各時代の「ハイル」を見てみよう。

### 5・1 明治時代

この時代では学制発布と新政府の政策が次々と進むにつれて、国語の方面にも及んで、日本語史において新旧の交替の時期と言える。「入る」「はひる」「這入る」「はいる」などが混じり合って混然と使用された。大体「入る」についての表記は以下のである。

① 樋口一葉は具体的な場所に移動する時「這入る」で、抽象的な場所に入る時は「入る」で表記するようである。「湯に這入る」「床へ這入る」という形があった。

(41) 太吉もお湯に<sup>ぶう</sup>這入なといへば、あいと言つて帯を解く、お待お待、(『にぎりえ』)

(42) 仕事を頼むの何が何うしたのと小五月蠅<sup>はい</sup>這入込んで前だれの半襟の帯つかはのと附届をして御機嫌を取つては居るけれど、(『わかれ道』)

(43) 私はどんな疲れた時でも床へ<sup>はい</sup>這入ると目が冴へて<sup>それ</sup>夫は<sup>それ</sup>夫ハ色々な事を思ひます、(『にぎりえ』)

(44) 菊の井のお力は鑄型に<sup>いがた</sup>入った女でござんせぬ、(『にぎりえ』)

② 「穴へ<sup>はい</sup>入る」の形であるが、忌み言葉として使われた。

(45) 私は今年三十九になる。人世五十が通相場なら、まだ今日明日穴へ<sup>はい</sup>入らうとも思わぬが、しかし未来は長いやうでも短いものだ。(二葉亭四迷『平凡』)

(46) ああ、お祖母さんは先刻穴へ<sup>はい</sup>入って了つたが、もう何時迄待ても帰つて来ぬのだと思うと、急に私は悲しくなつてシクシク泣出した。(二葉亭四迷『平凡』)

③ 自動詞であるが、他の力を借りて、非情物を外から内へ移動するという意味である。

(47) 小狗は一寸香を嗅いで、直ぐ甘そうに先ずピチャピチャと舐出したが、汁が鼻孔へ<sup>はい</sup>入ると見えて、時々クシンクシンと小さな嚏をする。(二葉亭四迷『平凡』)



④ ある状態、状況になるという意味に用いられ、ほぼ「入る」「這入る」で表記する。

(48) 中には樽柿が一杯<sup>はひ</sup>入<sup>はひ</sup>つてゐる。(夏目漱石『三四郎』10)

(49) 妹が此間から病氣をして、大学の病院に這入つてゐるんですが、(夏目漱石『三四郎』3)

またこの時代では「入る」で表記したが、読み方は違うところもあったし、「入る」を「はまる」に使うこともあった。

(50) 今年は、めた水に祟る歳だのう、こないだも工女が二人河へ<sup>はま</sup>入<sup>はま</sup>つて死んだといふのに… (島崎藤村『旧主人』5)

(51) 三ヶ月毎の書替の手数料と、利子が其儘に元金の中へ<sup>は</sup>加<sup>い</sup>入<sup>い</sup>つていくから(坪内逍遙『当世書生気質』6)

(52) 何でも物価高直の折柄、私の<sup>いれ</sup>入<sup>いれ</sup>る食料では到底も賄い切れぬけれど、(二葉亭四迷『平凡』30)

(53) 本箱だの、机だの、ガラス戸の箱へ<sup>いれ</sup>入<sup>いれ</sup>た大きな人形だの、袋入りの琴だの、(二葉亭四迷『平凡』33)

また、特例として「ハイル」の表記は夏目漱石の作品の中で「<sup>はい</sup>這<sup>はい</sup>る」「<sup>はい</sup>入<sup>はい</sup>る」と記された。例は次のようである。

(54) 少し待てば歇みさうである。二人は大きな杉の下に<sup>はい</sup>這<sup>はい</sup>つた。雨を防ぐには都合の好くない樹である。(『三四郎』8)

(55) 彼らが停留場を離れる時、二人連れ立つて何處へ行くだらうか、敬太郎には丸で想像も付かなかつたのだが、突然斯んな家へ<sup>はい</sup>入<sup>はい</sup>られて見ると、何でもない所丈に、却つて案外の感に打たれざるを得なかつた。(『彼岸過迄』 停留場 31)

## 5・2 大正時代・昭和時代・昭和以後

大正時代になってから、話題がさらに広まって、色々の分野に用いた。表記は「<sup>はい</sup>はいる」「<sup>はい</sup>はひる」「<sup>はい</sup>入<sup>はい</sup>る」「<sup>はい</sup>這<sup>はい</sup>入<sup>はい</sup>る」は多く使用された。明治期の「<sup>はい</sup>耳<sup>はい</sup>に<sup>はい</sup>入<sup>はい</sup>る」は大正時代になってから、「<sup>はい</sup>耳<sup>はい</sup>には<sup>はい</sup>いる」になったようである。状態、状況などの意味が普通になった。

(56) それから塞がつて分からも家賃が<sup>はい</sup>入<sup>はい</sup>つて来ないんださうだ。(夏目漱石『明暗』7)

(57) 夫の手前老人に對する批判を憚かつた細君の話題は、すぐ實際問題の方へ<sup>はい</sup>入<sup>はい</sup>つて来た。(夏目漱石『明暗』7)

- (58) 彼女は金の<sup>はい</sup>入った厚い帯の端を手にとって、夫の眼に映るやうに、電燈の光に翳した。(夏目漱石『明暗』8)
- (59) さうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて來た。(芥川龍之介『羅生門』)
- (60) その序に自然と娘の猿を可愛がる所由も御耳にはいつたのでございませう。(芥川龍之介『地獄變』)

表記として『明暗』においても、「入いる」が使用された。

- (61) 「病院といふ程の病院ぢやないが、診察所の二階が空いてるもんだから、其所へ入いる事も出来るやうになつてゐるんだ」(『明暗』4)
- (62) 「ことによると君の病院へ入いつてゐるうちかも知れない」(『明暗』37)
- (63) お延は堀の家を見るたびに、自分と家との間に存在する不調和を感じた。家へ入いつてからもその距離を思ひ出す事が屢あつた。(『明暗』123)

また大正時代の「ハイル」の特徴として、川端康成の初期の作品に「は入る」が使用された。江戸時代から「は入る」の表記が出たことから見ると、「は入る」は川端康成の独特の表記ではなく、前時代の表記を引き続いたものである。川端康成の初期の作品において、特に『伊豆の踊子』の中に「は入る」が9箇所使用された。まずは『伊豆の踊子』の中の「はいる」を見てみよう。

- (64) その内湯につかつてゐると、後から男がは入つて來た。
- (65) 私はぢつと坐つてゐられないので二度も三度も湯には入つてみたりしてゐた。
- (66) 雨戸を閉ぢて床には入つても胸が苦しかった。
- (67) また湯には入つた。
- (68) 一緒には入らうとしきりに誘はれたが、若い女が三人もゐるので、私は後から行くとごまかしてしまつた。
- (69) 太鼓がは入ると御座敷が浮立ちますね。」と、おふくろも向ふを見た。
- (70) ヲ野を出外れると、また山には入つた。
- (71) 甲州屋と云ふ木賃宿は下田の北口をは入ると直ぐだつた。
- (72) 踊子はちよこちよこ部屋へは入つて來た宿の子供に銅貨をやつてゐた。
- (73) 私は安心して、その隣の船室には入つた。

以上のように「は入る」で表記されたが、次は「入る」で表記された。

- (74) 暗いトンネルに入ると、冷い雫がぼたぼた落ちてゐた。  
 (75) 踊子の聲がふと私の耳に入つたので振返つてみると、  
 (76) ——物乞ひ旅藝人村に入るべからず。  
 (77) 湯に入つて、榮吉と一緒に新しい肴の晝飯を食つた。  
 (78) 踊子は堀割が海に入るところをぢつと見下したまま一言も云はなかつた。

(74)～(78)の「入る」は「ハイル」と読むのであろうか、「イル」と読むのであろうかについて、検討してみたい。川端康成の作品において、初期の他の作品を見てみよう。

- (79) 私も平氣でさうだと思ひ、棺の中には自分が這入つてゐるのが分つてゐましてね、それで妙なんです、……。『白い満月』  
 (80) 一緒にお湯へは入つてゐたのよ。『白い満月』  
 (81) お湯へはいつて來ないか。『驢馬に乗る妻』  
 (82) それ、咽佛が動いた。現に人間の口へ這入つてゐるのに、馬鹿馬鹿。『十六歳の日記』 )  
 (83) 「どうぞ御自由におはいり遊ばせ。人間の頭の扉には鍵がございません。」『青い海黒い海』  
 (84) 部屋には入つて來た父は稻妻のやうに腕を突出しました。『青い海黒い海』  
 (85) 彼女は女車掌の控室へは入つて行つた。『五月の幻』

例(80)(81)から見れば、例(77)は「ハイル」と読むわけである。ほかの4例も「ハイル」と読むであろう。(75)はある領域から特定の領域への移動であつて、これは(79)(82)と同じであろう。(74)(76)(78)は領域の移動であり、(83)(84)(85)と同じであると思われる。したがつて、(74)～(78)は全部で「ハイル」と読むであろう。

また、菊池寛の作品の中では「は入る」という表記も出てきた。川端康成は大正時代で「は入る」が使用されたが、菊池寛は大正、昭和とも用いた。多数の例文があつたが、その中の幾つかを挙げよう。

- (86) 編輯がある型には入ることは雑誌としては、危機である。('文藝春秋'編輯記文集(大正14年7月))  
 (87) 八月には入つて、思ひついたことなので、今月はうまく行かないかもしれない。(同上(大正15年9月))  
 (88) 去年の冬から、今年の春にかけてなど、月に一度しかは入らなかつた。だから、温泉などへ行つても、一度もお湯には入らないことがある。(話の塵(昭和10

年 11 月))

- (89) 砂糖が再度渡来したのは、戦国の初頃である。琉球の黒砂糖が、は入つてきたのである。(話の屑籠 (昭和 18 年 9 月))

このようにして、昭和時代でも「は入る」の形も存在した。昭和二十一年には「現代かなづかい」が公布されたことによって、「入る」は次第に現代の形になったのである。

## 6 おわりに

以上のように、「ハイル」は時代につれて変化してきた。「這入」という表記が出たのは中世の複合語「ハヒイル」からであるのに対して、「ハイル」の漢字表記「入」は、近世に入ってから使用され始めたことが分かった。かな表記においては、「はひいる」「はいいる」などの様々の表記から次第に「はいる」になったが、漢字と共に「はひ入る」を使うこともあり、意味としては、「這いながら入る」から、「堂々と入る」「仲間に入る」に至るまで、広く使用されるようになってきた。主語も最初の人・動物から次第に物へと及んだ。特に「ハイル」は移動動作を表す動詞から状態を表す動詞へと変化したことは中古から中世、近世への大きな変化であったといえる。

この論文の中で、「ハイル」の変遷だけについて検討したので、不足の所が未だに多数である。例えば、「ハイル」が変遷しているうちに、「イル」はどのように変化するのか。同作品の中で、「ハイル」と「イル」が使われる場合、その使い分けがどうなっているのか。これは今後の課題として取り組みたい。

本稿で対象としたのは 1 語であるが、その表記と意味用法の変化の考察は他の語の考察にも参考になるものであろう。

## 【注】

- 1 国語国立研究所『総合雑誌の用語』(1957、秀英出版)による。
- 2 川端康成『伊豆の踊子』(新選名著復刻全集 近代文学館)(1927、金星堂)による。
- 3 「はいり」は「大橋長慶本」「新宮城書蔵本」「榊原本其一」「榊原本其二」「猪苗代兼寿本」「内閣文庫本」「狩谷掖斎本」「紀氏本」「本居氏本」「友人某所蔵古写本其一」「友人某所蔵古写本其二」「玉琴」の各本に「はいり」とあることを意味する。
- 4 「大橋長慶本」「新宮城書蔵本」「本居氏本」「田中道麻呂校本」「塙保己一所持古写本」「玉琴」「延保五年刊家蔵イ本書入板本」の各本に「はひいり」とあることを意味する。

- 5 「陽明家本」「保坂本」「國冬本」「麥生本」「阿里莫本」の中に「はいり」とあることを示す。
- 6 「前田家本」の中に「はいり」とあることを示す。
- 7 「平瀬本」の中に「はいり」とあることを意味する。
- 8 「延宝五年版本」の中に「はいり」とあることを示す。

#### 【参考文献】

- 1 黒板勝美 丸山二郎共校訂『古今著聞集』(1940) 岩波書店
- 2 池田亀鑑編著『源氏物語大成』(1953) 中央公論社
- 3 芥川龍之介著『芥川竜之介全集』(1954～1955) 岩波書店
- 4 『落窪物語 堤中納言物語』(日本古典文学大系 13) (1957) 岩波書店
- 5 『平家物語』(日本古典文学大系 32) (龍谷大学図書館蔵) (1959) 岩波書店
- 6 『宇津保物語』(1～3) (日本古典文学大系 10～12) (1959～1962) 岩波書店
- 7 『今昔物語集』(1～5) (日本古典文学大系 22～26) (1959～1963) 岩波書店
- 8 『篁物語 平中物語 浜松中納言物語』(日本古典文学大系 77) (1964) 岩波書店
- 9 『栄花物語』(日本古典文学大系 76) (1965) 岩波書店
- 10 中島悦次著『打聞集』(1965) 白帝社
- 11 中村啓信編『日本書紀総索引』(1971) 角川書店
- 12 鴨長明著 築瀬一雄編『発心集』(1972) 古典文庫
- 13 池田廣司・北原保雄著大蔵虎明本『狂言集』の研究 (1972～1983) 表現社
- 14 次田香澄校注『とはずがたり』(校注古典叢書 28) (1978) 明治書院
- 15 『きのふはけふの物語』(大英図書館蔵古活字本の複製) (1981) 勉誠社
- 16 岩淵匡編『醒睡笑』(1982) 笠間書院
- 17 山本洋編『樋口一葉集』(近代文学初出復刻 1) (1984) 和泉書院
- 18 江口正弘著『天草版平家物語対照本文及び総索引 本文篇』(1986) 明治書院
- 19 『宇治拾遺物語』(新日本古典文学大系) (1990) 岩波書店
- 20 来田隆編『句双紙抄』(1991) 清文堂
- 21 夏目漱石著『夏目漱石集』(1991) 和泉書院
- 22 近松門左衛門著『近松浄瑠璃集』(1993～1995) 岩波書店
- 23 高木市之助 富山民蔵共編『古事記総索引』(1994) 平凡社

- 24 菊池寛著『菊池寛全集』(第 24 卷)(1995) 文藝春秋
- 25 浅見和彦校注・訳『十訓抄』(1997) 小学館
- 26 井原西鶴『井原西鶴全集』(2000) 勉誠出版

## 終 章

本論文は、古代で使っている動詞の漢字表記と、現代で使っている動詞の漢字表記の違いを明らかにし、動詞の漢字表記の変遷の過程を捉え、更に、表記の変遷の要因についても考察してきた。

### 第1章 漢字表記の史的研究の意義と先行研究

現在の日本語の表記には、漢字もあれば、仮名もある。それに句読点などの符号もあるが、昔の日本では、『古語拾遺』に「上古之世 未有文字 貴賤老少 口口相傳 前言往行 存而不忘」とあるように、文字はなかった。文字については、古代日本で「神代文字」が存していたという説があるが、現在の学界では、「神代文字」の存在を否定するのは普通である。

漢字の伝来について、出土した漢字が書かれた土器・鏡・貨幣・木簡などの時代、古墳の築造年代などの分析を通して、漢字は、前1世紀ごろ日本に伝わってきたことがわかった。その後、貿易・政治などの交流につれ、遅くとも1世紀になると、日本では、漢字が読めるのは渡来人だけでなく、一部の日本人もいたと推測される。但し、出土した土器に描かれた文字から、2世紀になっても、日本人はまだ漢字を把握していないと見られる。2世紀から4世紀の間にかけて、日本人の間で漢字に対する理解が徐々に広まったと考えられる。

5世紀になると、出土した刀・剣などの銘文に、漢字の音を利用し中国語にない語を多く表記することにより、漢字を使って日本語を表記しようとする試みが見られる一方、漢字が既に一部の人に理解されていたと考えられる。その上で、6世紀になると、漢字の訓を利用し日本語が表記されるようになった。更に、7世紀になって、中国語にない助詞・助動詞も漢字で表記されるようになり、変体漢文、宣命書なども使われ始めたことが、出土した木簡から明らかになってきたのである。

時代が下るが、慶応2年(1866年)に、前島密の提出した「漢字御廃止之儀」は、明治政府に採用されなかったが、福沢諭吉から漢字節減論が出された。その結果として、大正12月の「常用漢字表」、昭和21年11月の「当用漢字表」などの一連の政策が出された。現在では、昭和56年10月の「常用漢字表」を「漢字の目安」として、使用されている。

この一連の政策をきっかけにして、漢字に対する国民の関心が集まり、漢字を使った国語表記の研究も芽生えてくる。表記研究は、昭和30年代以後盛んになり、数多くの論、著

書が出された。先行研究の検討を通して、古代から現代に至るまで、語の漢字表記について、1 語多漢字表記が 1 種の漢字表記に固定する傾向が見られること、一方、中世から現代にかけて、和語の漢字表記が使用されていく傾向も見られることなどが、先行研究によって明らかにされている。

しかしながら、日本語表記研究は、研究の歴史が、他の日本語研究の分野に比べて比較的遅く始まったこともあり、日本語の表記に関する歴史的研究は、まだ明らかにされていないことも多い。

## 第 2 章 『今昔物語集』における動詞の漢字表記の研究

古代における漢字表記と現代の漢字表記とどう違うかということをし、『今昔物語集』1 作品に絞って、『色葉字類抄』を参考し、「常用漢字表」に載っている動詞の漢字表記と、載っていない動詞の漢字表記との分析し概観したところ、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一致する動詞、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一致しない動詞、『今昔物語集』の漢字表記と「常用漢字表」の漢字表記と一部一致する動詞のように、2 作品に同じ漢字表記がある動詞と、異なる動詞の漢字表記と、一部異なる動詞が存している。

『今昔物語集』と「常用漢字表」と一致する動詞の漢字表記は、1 語に 1 種の漢字表記がある動詞でも、1 語に 2 種以上の漢字表記がある動詞でも、使用されている漢字表記は、その殆どが、『色葉字類抄』における第 1 掲出漢字かあるいは合点がついている漢字であることがわかった。よって、これらの動詞の漢字表記は、現在だけでなく、『色葉字類抄』が編纂された当時、すでに常用漢字として使用されていることが考えられる。これらの漢字表記は、すべて『今昔物語集』に存し使用されていることにより、『今昔物語集』が編集された当時で、『色葉字類抄』における常用漢字ではない一部の表記は、院政期になって、現代の表記につながっていく傾向が見られると言える。

『今昔物語集』の漢字表記と、「常用漢字表」の漢字表記と一致しない動詞について、現在使用されていない動詞の漢字表記は、『今昔物語集』に使用されていても、『色葉字類抄』が編纂された当時の常用漢字ではない漢字が使われたり、他の語の漢字表記から推測され得られたりする動詞が多いことが分かった。このことから、この種類の語の多くは、当時でもよく使用されていなかった語だと言える。一方、「常用漢字表」に載っていないが、現在でも使用されている動詞の場合、動詞に使用されている漢字表記の多くは、『色葉字類



抄』が編纂された当時の常用漢字が使用されていることが明らかになった。

『今昔物語集』と「常用漢字表」の漢字表記が異なる動詞について、『色葉字類抄』の第 1 掲出漢字か或いは合点がついている漢字が、半分程度しか当時の常用漢字が使用されていないことから、『色葉字類抄』に掲載されている常用漢字の一部が、『今昔物語集』が編纂されている際、既に表記が変化しており、使用されなくなっている可能性がある一方、混乱し使用し続けられている可能性もある。これらの語の漢字表記が後に時代に従い、変わりやすい語の漢字表記となっていると考えられる。

『今昔物語集』と「常用漢字表」において、一部一致している動詞の漢字表記について、『今昔物語集』における 1 語に 2 種以上の漢字表記が使用されている動詞の漢字表記として、その最も多く使用されている 1 種の漢字表記は、殆ど『色葉字類抄』に掲載されている第 1 掲出漢字か或は合点がついている漢字表記である。また、この 1 種の漢字表記に統一しようという試みが見られる。このことから、動詞の漢字表記が統一される傾向が早く院政時代に既に存しており、現代の表記に繋がっていくと言える。

### 第 3 章 動詞の漢字表記についての個別的研究

『今昔物語集』の漢字表記と現代の表記とが異なる部分から、その一部の動詞の変遷の過程について、史的研究をしてきた。

「アワツ」は、『今昔物語集』では「アワツ」が「遽・澆・急・周・周章」の 5 種の漢字に当てられているが、「澆」「周」は、中世以前と中世の各辞書や『今昔物語集』以後の作品に見出せなかった。「周章」は、中世に入ってから、徐々に使われ始め、その後の「アワツ」の表記の中心的位置を占めるようになり、明治時代まで使われ続けた。「慌」が使われ始めたのは、江戸時代に入り、特に読本に多く使用される。明治時代になって、極初期はまだ「慌」は普通に使用されなかったが、松村春輔、坪内逍遙や二葉亭四迷、森鷗外らの作品に多く見られるようになる。一方、「周章」も明治時代の作品に認められるものの、その使用数は減少する傾向が見られる。明治時代に「アワツ」の表記は、徐々に「慌」へと移行していったものと見られる。

「アワツ」の意味は、古来から現代に至るまで、「突然起きたことに対して驚き、冷静さを失う」で、変化は認められない。但し「遽」「瞭」が「突然のことに、冷静さを失い、どうすればいいか分からない」という心的側面の強い意味に使われたり、「狼狽」が「冷静さを失う」という意味ではなく、「急いで行動する」という意味に使われたりといったよ

うに、漢字による使い分けも存したことが分かった。

『今昔物語集』で、サ変動詞は基本的に「為」で表記される。ただし、連用形については、「為」の他に、「仕」でも表記された可能性も残る。そこで、中世の各辞書、資料などを参考し、「ス」の漢字表記「仕」の成立過程を明らかにしてきた。『今昔物語集』に、「仕」が校注者により「シ」と読まれる例が 3 例あったが、『今昔物語集』における「仕」のすべての例を分析し、そのうちの 1 例の「仕」については、「シ」と読む可能性がないわけではない。特に、『沙石集』で「仕」を「シ」と読まれる例が 1 例あったことにより、「仕」を「シ」と読むことが、中世では、既に存していたことが考えられる。南北朝時代に成立した『良基連歌論集』には、サ変動詞連用形「シ」を、「仕」と表記されている例が既に存していたことが明らかになった。室町時代後期の『曾我物語』では、サ変動詞連用形「シ」だけでなく、他の活用形にも「仕」が使用されていることも分かった。『文明本節用集』における「番をする」の例を考え合わせると、室町時代には、「仕」が「ス」の活用形に使用されていたと考えられる。

一方、サ変動詞の連用形から成る複合語「シ～」が、「仕」と表記されるのは室町時代の『節用集』であるが、調査を通して、南北朝時代の『良基連歌論集』には、すでに使われていたことが明らかになっている。このことから、「仕」が複合語の前接語「シ」の漢字表記として、用いられ始めたのは、南北朝時代であると考えられる。

「ハイル」は、『今昔物語集』では、「ハイル」の語はなく、「ハヒイル」（這入）があった。かな表記においては、「はひいる」「はいいる」などの様々の表記から次第に「はいる」になったが、漢字と共に「はひ入る」を使うこともあり、意味としては、「這いながら入る」から、「堂々と入る」「仲間に入る」に至るまで、広く使用されるようになってきた。主語も最初の人・動物から次第に物へと及んだ。特に「ハイル」は移動動作を表す動詞から状態を表す動詞へと変化したことは中古から中世、近世への大きな変化であったといえる。

以上の検討を通して、中世の動詞の漢字表記が、現代の動詞の漢字表記へと繋がっていくことが分かった。古代で固定されていない動詞の漢字表記が、語の意味の変化につれ、漢字表記が違ってくる動詞もあるし、近世になって、読本の影響で新たな漢字表記が使用され始めた動詞もあることも明らかにした。

## 今後の課題

以上のように、漢字の成立、日本語との結びつきから、作品を絞って、その中の動詞と

現在の動詞の漢字表記との違い、個別動詞の史的変遷について検討してきたが、不足な点がまだ沢山ある。今後どのように検討していくかについて、以下のように考える。

- 1 論文の第 2 章で、『今昔物語集』に存しているすべての動詞を中心に、「常用漢字表」にも載っている動詞の漢字表記を、『色葉字類抄』を参考し検討してきたが、『今昔物語集』に存しないが、「常用漢字表」に載っている動詞も多く存している。これらの動詞の成立は、『今昔物語集』が編集された当時、使用されていたかどうか、他の作品を参考しながら、検討していきたい。
- 2 論文の第 3 章のサ変動詞「ス」について、『文明本節用集』には「番を仕<sup>スル</sup>」とあることから、元々はサ変動詞「ス」の表記として、「仕」が存していた可能性があると考え。今後、更に資料を増やし、検討していきたい。
- 3 本論では、動詞の漢字表記について検討してきたが、動詞の漢字表記と意味との関係は切り離して考えることができない存在であるので、これらの調査は今後の課題として取上げたい。

## 参 考 文 献

## 【論文】

- 1 山田俊雄「表記体・用字と文脈・用語との関連—今昔物語集宣命書きの中の特例に及ぶ覚書—」(『成城文芸』第 15 号、1958)
- 2 佐藤喜代治「西鶴の小説における用字についての試論」(『東北大学文学部紀要』13 下、1963)
- 3 山口佳紀「今昔物語集表記法管見」(『国語と国文学』第 43 卷、1966)
- 4 馬淵和夫「文字・表記」(『国語学』第 81 集、1970)
- 5 宮島達夫「和語の漢字表記」(『国語論説資料 7』(第 4 分冊上、1970)
- 6 峰岸明「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論—副詞の漢字表記を中心に—〔一〕」(『国語学』第 84 集、1971)
- 7 峰岸明「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論—副詞の漢字表記を中心に—〔二〕」(『国語学』第 85 集、1971)
- 8 小林芳規「将門記に於ける漢字の用法—和化漢文とその訓読との相関の問題—」(『高山寺本古往来 表白集』(高山寺資料叢書第 2 冊)、1972、東京大学出版会)
- 9 小林芳規「国語資料としての高山寺本古往来」(『高山寺本古往来 表白集』(高山寺資料叢書第 2 冊)、1972、東京大学出版会)
- 10 鈴木丹士郎の「『里見八犬伝』の用字についての一試論」(『専修国文』第 11 号、1972)
- 11 小林芳規「将門記に於ける漢字の用法—和化漢文とその訓読との相関の問題—」(山岸徳平『日本漢文学史論考』、1974、岩波書店)
- 12 林史典「日本における漢字」(『岩波講座 日本語 8 文字』、1977、岩波書店)
- 13 山内洋一郎「金沢文庫本佛教説話集の表記体系」(『鎌倉時代語研究 第 5 輯』、1982、武蔵野書院)
- 14 山田俊雄「近世の常用漢字について」(『言語生活』378、1983)
- 15 小谷博泰「稻荷山古墳鉄剣銘の文章」(『木簡と宣命の国語学的研究』、1986、和泉書院)
- 16 武部良行「文字・表記」(『国語学』第 145 集、1986)
- 17 浅野晃「浮世草子の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 7 近世の漢字とことば』、1987、明治書院)
- 18 小松寿雄「滑稽本の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 7 近世の漢字とことば』、1987、明

治書院)

- 19 矢野準「人情本の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 7 近世の漢字とことば』、1987、明治書院)
- 20 彦坂佳宣「洒落本の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 7 近世の漢字とことば』、1987、明治書院)による。
- 21 春日和男の「漢字の伝来」(佐藤喜代治編『漢字講座 1 漢字とは』、1988、明治書院)
- 22 田中牧郎『『今昔物語集』』(佐藤喜代治『漢字講座 5 古代の漢字とことば』、1988、明治書院)
- 23 加藤正信編「付録 2 各種漢字制限案及び現「常用漢字」をめぐる諸事項一覧表」(佐藤喜代治編『漢字講座 11 漢字と国語問題』、1988、明治書院)
- 24 村田正英『図書寮本宝物集』における和語表記の漢字」(『尾道短期大学研究紀要』第 37 巻第 2 号、1988)
- 25 佐藤武義「古往来—『雲州往来』を中心に—」(佐藤喜代治『漢字講座 5 古代の漢字とことば』、1988、明治書院)
- 26 彦坂佳宣「洒落本漢字の用法についての試論」(『立命館文学』505、1988)
- 27 飛田良文『『安愚楽鍋』の漢字』(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)
- 28 蒲生芳郎「鷗外と漢字—初期作品、特に『舞姫』を中心に—」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)
- 29 米沢幹一「二葉亭四迷の漢字—『浮雲』における字法—」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)
- 30 玉村文郎「尾崎紅葉・幸田露伴の漢字—『多情多恨』と『五重塔』—」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)
- 31 岡本勲「自然主義文学の漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)
- 32 下河部行輝「新感覚派の漢字—川端康成の用法—」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)
- 33 佐藤武義「古代の漢字とことば」(佐藤喜代治『漢字講座 5 古代の漢字とことば』、1988、明治書院)
- 34 田中牧郎の『『今昔物語集』』(佐藤喜代治『漢字講座 5 古代の漢字とことば』、1988、

明治書院)

- 35 飛田良文「近代日本語と漢字」(佐藤喜代治『漢字講座 8 近代日本語と漢字』、1988、明治書院)
- 36 木坂基「写生文の漢字語」(佐藤喜代治『漢字講座 9 近代文学と漢字』、1988、明治書院)
- 37 小林賢次「天理本『狂言六義』用語考」(大島一郎教授退官記念論集刊行会『日本語論考』、1991、桜楓社)
- 38 川嶋秀之「古事記の用字法一曰・云・言・謂・語」(大島一郎教授退官記念論文集『日本語論考』、1991、桜楓社)
- 39 東辻保和「『打聞集』における漢字の用法」(『鎌倉時代語研究』(第1輯)、1991、武蔵野書院)
- 40 田中順子「夏目漱石研究一の『夢十夜』の宛字について一」(『東洋大学短期大学論集』第27号、1992)
- 41 土屋信一「明治・大正・昭和期の漢字使用」(前田富祺編『国語文字史の研究』5、1992、和泉書院)
- 42 青木美子『今昔物語集』における動詞「カヘル」の漢字表記について」(『高知大国文』第24号、1993)
- 43 鈴木丹士郎「読本におけう漢字語の傍訓一「雨月物語」と「弓張月」を中心にして一」(『近代語研究』(第2集)(3版)、1994、武蔵野書院)
- 44 宇都宮啓吾が「「急」字と「イソグ」訓との対応関係の定着に就いて一中世に於ける”日常常用漢字”に就いての一考察一」(前田富祺『国語文字史の研究』(3)、1996、和泉書院)
- 45 藤井涼子「野郎評判記」「姿記評林」「雨夜三盃機嫌」における和語の漢字表記」(『同志社国文学』46、1997)
- 46 吉田東朔「明治以降の国字問題の展開」(佐藤喜代治編『漢字講座 11 漢字と国語問題』、1999、明治書院)
- 47 土屋信一「表記」(『国文学 解釈と鑑賞』第64巻第7号、1999)
- 48 水野正好「日本に文字が来たころ一出土文字が語る古代」(平川南編『古代日本の文字世界』、2000、大修館)
- 49 土屋信一「漢字使用の新しい傾向」(『計量国語学』第22巻第7号、2000)
- 50 佐藤武義「和語・漢語の表記」(飛田良文『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』、

2002、明治書院)

- 51 平川南「二～四世紀の倭国で書かれた文字」(国立歴史民俗博物館編『古代日本文字のある風景 一金印から正倉院文書まで』、2002、朝日新聞社)
- 52 磯貝淳一「和化漢文資料における「アフ」の用字法について—和漢混淆文との比較から—」(『新大國語』第 29 号、2003)
- 53 柚木靖史『万葉集』における「念」「思」の用字法」(『広島女学院大学日本文学』第 13 号、2003)
- 54 今野真二「近世語の表記」(『日本語学』第 23 巻第 12 号、2004、明治書院)

### 【著書】

- 1 川端康成『伊豆の踊子』(新選 名著復刻全集 近代文学館)(1927) 金星堂
- 2 明治文化研究會『幕末明治新聞全集』(1934～1935) 大誠堂
- 3 黒板勝美・丸山二郎共校訂『古今著聞集』(1940) 岩波書店
- 4 荒木良雄校註『太山寺本曾我物語』(1941) 武蔵野書院
- 5 岡見正雄校『良基連歌論集』(1952～1955) 古典文庫
- 6 池田亀鑑編著『源氏物語大成』(1953) 中央公論社
- 7 芥川龍之介著『芥川竜之介全集』(1954～1955) 岩波書店
- 8 東京大学史料編纂所編纂『上井覚兼日記』(大日本古記録)(1954～1957) 岩波書店
- 9 下中彌三郎『古事記大成 3 言語文字篇』(1957) 平凡社
- 10 『落窪物語 堤中納言物語』(日本古典文学大系 13)(1957) 岩波書店
- 11 国立国語研究所『総合雑誌の用語』(1957) 秀英出版
- 12 『平家物語』(日本古典文学大系 32)(龍谷大学図書館蔵)(1959) 岩波書店
- 13 『宇津保物語』(1～3)(日本古典文学大系 10～12)(1959～1962) 岩波書店
- 14 山田孝雄編『今昔物語集』(日本古典文学大系 22～26)(1959～1963) 岩波書店
- 15 『篁物語 平中物語 浜松中納言物語』(日本古典文学大系 77)(1964) 岩波書店
- 16 中田祝夫・峯岸明共編『色葉字類抄研究並びに索引』(1964) 風間書房
- 17 中島悦次著『打聞集』(1965) 白帝社
- 18 『中世法制史料集』(第 3 巻)(1965) 岩波書店
- 19 『栄花物語』(日本古典文学大系 76)(1965) 岩波書店
- 20 『明治開化期文学集』(日本近代文学大系 1)(1966) 筑摩書房

- 21 坂本太郎〔他〕『日本書紀 上』(日本古典文学大系 67) (1967) 岩波書店
- 22 慶応義塾大学附属研究所編『四部合戦状本平家物語』(1967) 斯道文庫
- 23 『運歩色葉集』(元龜二年京大本) (1969) 臨川書店
- 24 高木市之助〔他〕校注『万葉集』(1~4) (日本古典文学大系) (1969) 岩波書店
- 25 東京大学史料編纂所編『吉川家文書』(大日本古文書家わけ 9) (1970) 東京大学出版会
- 26 東京大学史料編纂所編『上杉家文書』(大日本古文書家わけ 12) (1971) 東京大学出版会
- 27 東京大学史料編纂所編『熊谷家文書・三浦家文書・平賀家文書』(1971) 東京大学出版会
- 28 『大日本古文書家わけ 14』(1971) 東京大学出版会
- 29 斉木一馬・染谷光広校訂『兼見卿記』(史料纂集 19) (1971) 続群書類従完成会
- 30 中村啓信編『日本書紀総索引』(1971) 角川書店
- 31 小瀬甫庵著・松沢智里編『信長記』(甫庵本) (1972)
- 32 笠原一男・井上鋭夫校注『日本思想大系 17』(1972) 岩波書店
- 33 古典研究会発行・長澤規矩也解題『後漢書』(3) (1972) 汲古書院
- 34 『高山寺本古往来 表白集』(高山寺資料叢書第 2 冊) (1972) 東京大学出版会
- 35 鴨長明著・築瀬一雄編『発心集』(1972) 古典文庫
- 36 池田廣司・北原保雄著大蔵虎明本『狂言集』の研究 (1972~1983) 表現社
- 37 天理図書館善本叢書 and 書之部編集委員会『連歌論集』(天理図書館善本叢書 and 書之部 第 7 卷) (1973) 天理大学出版部
- 38 山岸徳平『日本漢文学史論考』(1974) 岩波書店
- 39 『いろは字』(妙本寺蔵永禄二年本) (1974) 清文堂、鈴木博解説
- 40 正宗敦夫編『万葉集総索引』(1974) 平凡社
- 41 佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』(1974) 明治書院
- 42 山岸徳平・中田祝夫解説『真名本曾我物語』(1974) 勉誠社
- 43 西郷信綱『古事記注釈』(第 1 卷) (1975) 平凡社
- 44 『岩波講座 日本語 8 文字』(1977) 岩波書店
- 45 佐藤喜代治編『国語学研究事典』(1977) 明治書院
- 46 竹内理三編『多聞院日記』(増補 続史料大成) (1978) 臨川書店
- 47 次田香澄校注『とはずがたり』(校注古典叢書 28) (1978) 明治書院
- 48 伴信友著『仮字本末』(1979) 勉誠社
- 49 酒井憲二編『甲陽軍鑑』(古典資料類従 20~23) (1979) 勉誠社



- 50 中田祝夫『<sup>改定  
新版</sup>古本節用集六種研究並びに総合索引』(1979) 勉誠社
- 51 中田祝夫『改定新版文明本節用集研究並びに索引』(1979) 勉誠社
- 52 岡雅彦『きのふはけふの物語』(大英図書館蔵古活字本の複製)(1981) 勉誠社
- 53 鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 第5輯』(1982) 武蔵野書院
- 54 岩淵匡編『醒睡笑』(1982) 笠間書院
- 55 山本洋編『樋口一葉集』(近代文学初出復刻1)(1984) 和泉書院
- 56 小谷博泰著『木簡と宣命の国語学的研究』(1986) 和泉書院
- 57 江口正弘著『天草版平家物語対照本文及び総索引 本文篇』(1986) 明治書院
- 58 佐藤喜代治『漢字講座7 近世の漢字とことば』(1987) 明治書院
- 59 佐藤喜代治編『漢字講座1 漢字とは』(1988) 明治書院
- 60 佐藤喜代治『漢字講座5 古代の漢字とことば』(1988) 明治書院
- 61 佐藤喜代治『漢字講座8 近代日本語と漢字』(1988) 明治書院
- 62 佐藤喜代治『漢字講座9 近代文学と漢字』(1988) 明治書院
- 63 佐藤喜代治編『漢字講座11 漢字と国語問題』(1989) 明治書院
- 64 『宇治拾遺物語』(新日本古典文学大系)(1990) 岩波書店
- 65 大島一郎教授退官記念論文集『日本語論考』(1991) 桜楓社
- 66 大島一郎教授退官記念論集刊行会『日本語論考』(1991) 桜楓社
- 67 鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 第1輯』(1991) 武蔵野書院
- 68 来田隆編『句双紙抄』(1991) 清文堂
- 69 夏目漱石著『夏目漱石集』(1991) 和泉書院
- 70 前田富祺編『国語文字史の研究 5』(1992) 和泉書院
- 71 坪井清足・平野邦雄『古代史総論』(1993) 角川書店
- 72 近松門左衛門著『近松浄瑠璃集』(1993~1995) 岩波書店
- 73 高木市之助・富山民藏共編『古事記総索引』(1994) 平凡社
- 74 沖森卓也・佐藤信『上代木簡資料集成』(1994) 桜楓社
- 75 近代語研究会編『近代語研究 第2集』(3版)(1994) 武蔵野書院
- 76 高木市之助・富山民藏編『古事記総索引本文篇』(新装版第三刷)(1994) 平凡社
- 77 菊池寛著『菊池寛全集』(第24巻)(1995) 文藝春秋
- 78 中村幸彦校注・訳『英草子・西山物語・雨月物語・春雨物語』(新編日本古典文学全集  
78)(1995) 小学館

- 79 前田富祺『国語文字史の研究 3』(1996) 和泉書院
- 80 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』(索引篇) (1996) 勉誠社
- 81 森田良行『基礎日本語辞典』(7 版) (1996) 角川書店
- 82 小泉保 [ほか] 編『日本語基本動詞用法辞典』(4 版) (1996) 大修館書店
- 83 小島憲之 [他] 校注『日本書紀』(2) (新編日本古典文学全集 3) (1996) 小学館
- 84 浅見和彦校注・訳『十訓抄』(1997) 小学館
- 85 上田正昭編『古代の日本と渡来文化』(1997) 学生社
- 86 東野治之『木簡が語る日本の古代』(1997) 岩波書店
- 87 太田紘子『二葉亭四迷『あひづき』の表記研究と本文・索引』(1997) 和泉書院
- 88 岡村秀典著『三角縁神獣鏡の時代』(1999) 吉川弘文館
- 89 井原西鶴『井原西鶴全集』(2000) 勉誠出版
- 90 平川南編・稲岡耕二 [ほか] 著『古代日本の文字世界』(2000) 大修館書店
- 91 柳田康雄『伊都国を掘る一邪馬台国に至る弥生王墓の考古学』(2000) 大和書房
- 92 草川昇編『五本対照類聚名義抄和訓集成』(2000) 汲古書院
- 93 大高洋司・近藤瑞木編『初期江戸読本怪談集』(2000) 国書刊行会
- 94 新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』(自立語索引編第 1 巻～第 3 巻) (2000～2003)  
勉誠出版
- 95 『日本語史研究の課題』(2001) 武蔵野書院
- 96 国語研究会監修『現代国語表記の基準』(第 6 次改定版) (2001) ぎょうせい
- 97 飛田良文『現代日本語講座 第 6 巻 文字・表記』(2002) 明治書院
- 98 高島英之【古代出土文字資料の研究】(2002) 東京堂出版
- 99 国立歴史民俗博物館編『古代日本 文字のある風景—金印から正倉院文書まで—』(2002)  
朝日新聞社
- 100 平川南編『古代日本文字の来た道 古代中国・朝鮮から列島へ』(2005) 大修館書店
- 101 平川南 [ほか] 編『文字による交流』(2005) 吉川弘文館
- 102 平川南 [ほか] 編『文字表現の獲得』(2006) 吉川弘文館

**【附記】**

本論文は、テーマの決定、論の組み立てなどについて、指導教官柚木靖史先生からご指導いただき、深く感謝の意を表します。また、論文を執筆するにあたり、多くの先生方のご意見を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。